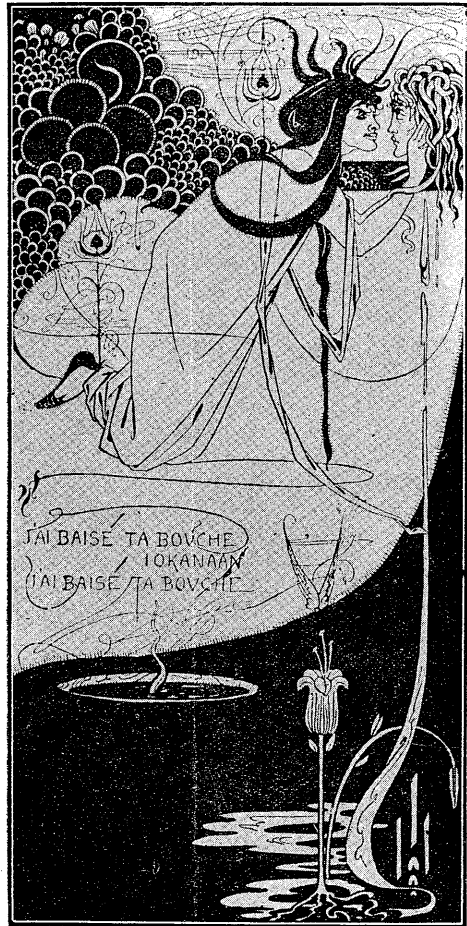


# 北辰會雜誌



第八十六號

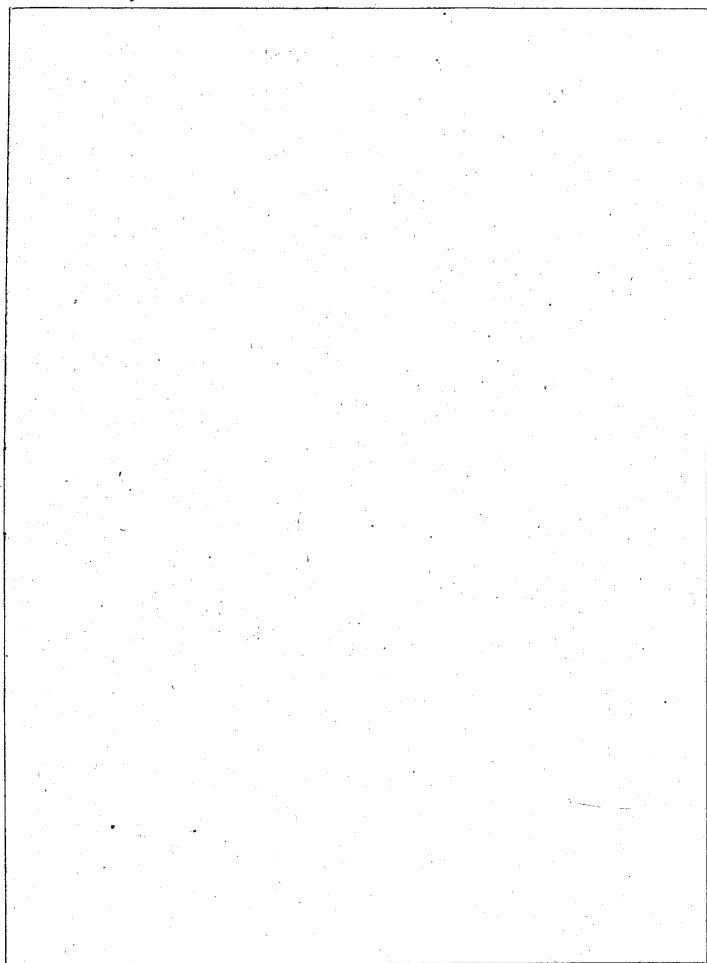
四高等學校北辰會雜誌  
大正八年十二月十九日印刷  
大正八年十二月廿五日發行  
第八十六號

# 北辰會雜誌 第八十六號 目次

權力意志に關する二三の考察 (譯文)	高坂正顯	(1)
或る日の乘仙人 (劇作)	藤澤和夫	(16)
夜明けを待つ心 (劇作)	林正義	(26)
譯詩三篇 (譯文)	三島寬	(43)
枳殼の實 (詩)	田中完之助	(46)
かはたれ (短歌)	二見武雄	(48)
女盜人 (劇作)	北村喜八	(51)
菅沼先生 (劇作)	宇田川貞一郎	(59)
或る秋の夜の幻想 (戯詩)	各務虎雄	(76)
雜報		(119)
北辰會各部々報		(123)
通信		(138)
編輯餘言		(141)

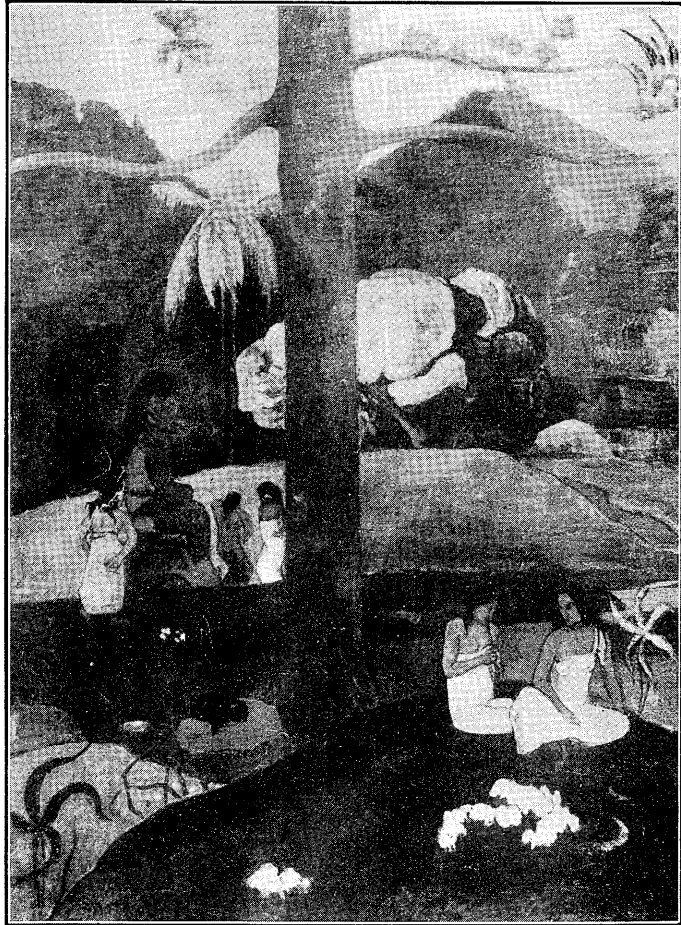
東京帝大國語文科會

表紙 (銅版) Design for "Salome" (Audrey Bardsley)  
 挿畫 (銅版) Die Flötenspielerin (Paul Gauguin)



Paul Gauguin

Die Flötenspielerin.



## 權力意志に關する二三の考察

Man is to man the supreme being, says Feuerbach.

Man has just been discovered, says Bruno Bauer.

Then let us take a more careful look at this supreme being and this new discovery — Max Stirner.

高 坂 正 顯

直線  $AB$  上を  $A$  より  $B$  へ進む  $a$  球と  $B$  より  $A$  へ進む  $b$  球とが一點  $C$  に於いて衝突した場合に、 $a$  の運動量が  $b$  の運動量より大ならば、 $b$  球は  $a$  球のために反対の方向、即ち  $\rightarrow_{AB}$  の方向へ推進せしめられる。一般に力の平行四邊形の示す様に二つの力の交渉は大なる方の方向に近い方向をとる。之は形而下の世界に於いては動かし得ざる因果である。しかし今之の球  $a$   $b$  が意志を有する自動体なりと假定すれば、 $b$  球の意志の方向  $\rightarrow_{BA}$  は  $a$  球の意志のために方向を變せしめられて、 $a$  球と共に  $\rightarrow_{AB}$  の方向に轉じ出す。意志に於いても力の平行四邊形は成立する。かくて、多くの意志の交渉は優勢な意志に近い方向をとると云ひ得よう。

しかし、私は所謂自然科学の法則が全然精神科学の世界にも許されると言ふのではない。一般に意志は *wollen* であると言はれてゐる、尤も自然法 *Sein* に反対した *wollen* は不可能である。地球の回轉をさめて、その代り太陽に地球をまわらす事は不可能である。*wollen* は *Sein* の一つである、そして *Sein*

は因果律である。しかし *wollen* が結果を目的とした時に、因果は逆に用ひられて、因縁は手段となる。米を食へば腹が張る。腹を張らす爲に米を食ふのである。否、「爲には」食はねばならぬのである。目的を意志するによつて當爲が意識される。即ち意志する事は裏に當爲を含むのである。あらゆる意志は當爲を含むが、その當爲の實現の度がその意志の強度である。實は意志の強度が、その當爲實現の度を定めるのであつて、先の二箇の自動球 *a*、*b* に於いてその目的、従て當爲は、各自の方向に自己を保つのであるが、*a* はその當爲を實現し得るもりは當爲を實現し得ない。*a* 球の *wollen* は *sollen* を完成する、即ち *wollen*  $\parallel$  *sollen* であるが、*b* 球に於いては *wollen*  $\parallel$  *sollen* である。前者は自らに自由であつて、後者は自らに偶然である。

*wollen* を基本として考へれば、*sollen* の變化が問題となる。力の平行四邊形の許さるゝは *sollen* 實現の度に止まり、各自の意志には及ばない。*b* 球は *a* 球にはばまれたが、*a* 球の壓迫が去れば *b* 球はその *sollen* を完成する。ここに物質界と精神界の區別があるのである。二つの力は、物質界に於いては全く新らしい一つの合成力となつてしまふが、精神界にては、その新らしい力に於いて、一方の力を除けば、他の力が表はれて、その當爲を完成する。兩者の差異は *wollen* が潜在して自己を保つか保たぬかにある。

しかし、かく物質界、精神界は全然獨立し、別の法則に従ふと見るのは獨斷ではなからうか。私は先に之の兩界に同一の法則は存せぬと云つたが、はたして妥當な言であつたであらうか。カントが純理批判の第二版の序文中「自分は精神が自由であると共に、他方自然律に従ふ、即ち不自由であると考へる事は出來ぬ。…… an object may be taken in two senses, first, as a phenomenon, secondly, as a thing in itself. ……」と言つてゐるのは聖 (Das Heilige) なものに對する「思想傾向としては可能」である。

が「學」としては不可能な獨斷ではあるまいか。「たゞ」種類の因果律で足りる限りは妄に多數の因果律を用ひないと云ふのが「合理的なる現象と本体とを分つより、むしろ「人間にとつての眞實在——欲望と感情との世界によつて物質的、機械的世界を説明すべきではあるまいか。

勿説自分は之の物質世界をば、彼のバークレーやシェンハウアーに倣つて、單に一種の「幻影」又は「觀念」としてのみ取扱ひはしない。むしろそれは我々の情緒そのものと同等な實在性を備へたもの、最初先づ原始的統一が有つて、それが次第に有機的順序に於いて分岐し分裂し隨つて又次第に纖弱となり無力と成り來つたそのそもくの原始的感情世界の種類、換言すれば原始の衝動的生活中の一種類——自營、同化、營養、分泌、新陳代謝等一切の有機的機能がまだ原始的統一状態に於て、互に結合されてゐた、其のそもくの衝動的生活中の一種類、即ち生命の原始的な形式、それが所謂物質世界の謂ではなからうか。(Kensetsu von Gnd und Böse, 金子譯 P. 77.)

私が前に精神、物質兩界の相違點として擧げたのは意志の有無であり、物質界に於ける力學の法則も精神界にては *sollen* にのみ關し *wollen* には、*wollen* の自己保存のために、適せざる事であつた。しかし物質不滅の法則は物質の自己保存を意味するとも考へられる。それは *wollen* の自己保存と何程の相違ありや。意志の存在は自己保存によつて始めて知られるのである。私はその一事實で物質も意志を有すと云ひ得ると思ふ。若し意志——一般に意識——が物質中に潜在的にでも存せざしたら何處から高等動物に於ける意識の發生を説明せんとする。

尙、物質界にては、先の例の如く、二つの力は全然新しい力となり *wollen* を潜在的に所有せざるに反し、精神界にては *wollen* は潜在的に保たれる。そこに二種の世界の相違があるとしたが、はたして絶對

的のものであらうか。力の平行四邊形の際にも *wollen* が保たれるとも説明し得られる。それについて  
 は後に述べるが、今は化学元素の結合と離反によつて説明したい。化学方程式  $2\text{HI} + \text{I}_2 + 2\text{H}$  は還元劑  
 (acid reducing agent) なる  $\text{Hydriodid acid}$  に熱を加へた際に起る化学作用を示すものである。HI は  $\text{H}$  と  $\text{I}$   
 にもあらざる新らしき性質を有する。それは力の平行四邊形に於いて、二力の合一は、方向を共に變じて  
 對角線の方角をとる如きものである。しかし HI がやゝもすれば互に離れ、獨自の姿を示すのは、*wollen*  
 が潜在するためではなからうか。かくの如く物質と精神の差を程度上のものとすればニイチエがかく意志  
 を以つて萬物の源としたのも許されるのである。その時彼の因果律は如何に説明さるべきであらうか、  
 因果とは一つの現象が必ず他の現象をとまうと云ふ事である。小刀を皮膚にあてる、すると痛いど  
 感ずる、その時小刀が皮膚に觸れた事が必然的に痛さを惹起したと感ずる所から前者が後者の原因と見  
 なされる。しかし原因は小刀にあるか、刺した事にあるか、それが痛點を刺戟した事にあるか、又その  
 刺戟を神經末端が中樞に傳へた事にあるのか、或はそのつかれたと、刺戟を意識する所にあるのか、し  
 かし、其の意識は既に我等が結果として擧げた事即ち痛さ——ではあるまいか。どこまでが原因で、ど  
 こからが結果であるか。原因は複雑 (Plurality) であり、結果は錯綜 (intermixture) してゐる。原因と結果  
 とを固定したものと考へるとかくの如き矛盾に落入る、して見ると原因結果はそれ等の多様の現象中か  
 ら比較的意識され易い、従つて最も實用的な關係を抽象したのに過ぎぬかも知れない。マルキメデスの  
 飛矢が運動を分解した爲に矛盾に落ちた如く、因果關係の不正確は、變化を固定させるために生じ、純  
 粹持續を同時關係を豫想する時間の上に分解して排列した爲に生じたのであらう。

ニイチエは、世界は意志であるとす。創造、變化がその特徴である。ではその變化——その間の  
 關係を普通に抽象して因果と云ふのであるが——は如何にして生ずるか。變化に二種類を認め得る、即  
 ち自己の創造作用による變化と、他を征伏する事によつて生ずる變化とが之である。  
 しかもすべては彼に於いては意志であるから、因果律も畢竟、意志体の間の關係を云ふにすぎまい。  
 變化と變化との關係である、固定した因果ではない即ち働きつゝある力の多角形が因果であると云ひ得  
 よう。

*wollen* 即 *sollen* には自由と *sollen* の破壊、即ち偶然との關係が因果なのである。私はこの原理にたよ  
 つて彼の所謂「心中の大狩獵」を初めよう。

正圓錐を眞横から見れば、二等邊三角形に見える、眞上から見れば圓に見える、それにも關せず、吾  
 人は二等邊三角形にも圓にもあらざる圓錐と云ふ觀念(概念)を有する以上は、種々の直觀——*Denke* が  
 體驗 *experience* と *idee* と *分ツタ時ノ experience* と——を綜合し得る能力があるに違ない、カン  
 トは直觀の統一は時間、空間によつてなされ、範疇。即ち純粹悟性の使用に際して始めて先驗統覺作用  
 を用ゐた。しかし直觀と概念とを分つのは程度上の相違で質的の相違でなく、直觀作用は受納するのみ  
 である、と云ひて物自体の如きを假定したのは獨斷である以上その統覺作用は直觀の際にも表はれるに  
 相違ない。ではその統覺作用は何んであるか、ニイチエはカントを評して統覺作用も一種の能力ではな  
 いかと云つてゐる。しかし我々の表象を統一する作用が、その統一さるゝもの以外に大我があつて、そ  
 の統覺能力によつて可能にされるのであらうか。今私はペンを以て原稿用紙に對してゐる。外には寒い  
 風が吹いてゐる、夕方だ、電氣もやがてつくであらうなごゝ色々の感じが浮んでくる、すべての表象は  
 我の表象なりとの意の統覺作用即ち表象の自意識をさして、統覺作用と云ふなら許すがその統覺作用に

よつて始めて概念なり、表象なりが、出来るとするが如き統覺作用は我々の意識内に於いて感じ得ない、夕方だ、電気と云ふごとき觀念が、自らに生ずるのである、最初の問題に歸れば、正圓錐の概念はむしろそれ自らに生ずるのである、しかし二等邊三角形に見えたり圓に見えたりするのが如何にして正圓錐の概念になるか？ ニイチエは之に對して意志の *wollen* の *sollen* の完成と破壊によつて説明するであらう。ニイチエはすべては意志のあらはれだと云ふのであるから。

正圓錐について種々の直観があるが、その中でも多く我等の意識内にあるのは、従つて最も強いのは二等邊三角形や、圓等と云ふ特殊のものでなく、我々が普通に有する觀念である、それ故之の觀念が他の觀念の *wollen* の *sollen* (ニイチエは意志の目的は他を従はするにあると見た、即ち推力意志である、従てその *sollen* は他の征伏である) にうちかつて普通の圓錐の概念が生ずる。

今私がかくの如く言つたのを或はスペンサーの表象機能説の如くとられるかも知れない、ニイチエもスペンサーの攻撃をしてゐる所を見ると、彼を讀んだ事もあるらしい。しかしニイチエは彼とは異てゐる。Spencer の説は表象が根本になつて、その表象に自己保存の力を與へてゐるのであるが、ニイチエは彼の説の逆で、意志に表象的能力を與へたのである。シヨッペンハワーの盲目の意志の代りに有眼の意志を置換へたのである。かく思惟も意志の一種なら思惟は自動的の力を有するはずである。即ち「一思惟が現はれる所以は「それ」が現はれんと欲するがために現はれるので「我が」それを欲するがために現はれるのではない」のである。

今迄言つた事を簡單にまとめれば、意識は統覺作用によつて成立する。その統覺作用は色々の表象中、最も強いものが他を統一する事によつて生ずるのである。誤解を防ぐために言ふが、意識から思惟意識

等を除けばあとに別に意識は残らない。意識は表象、概念、感情、意欲等の集合である。ニイチエに於いてはそれ等は皆根本的な推力意志の表はれである。そして意志の多角形、正當に言へば多面体が生ずる際、知的事物の方向に屬するもの、又その反對の感情等の方面に屬するものは、それぞれに集つてから他のものと交渉するのである、従て圓錐の概念の出来る際に、それに食欲等が影響はすれ、食欲は圓錐の概念にはならないのである。

しかし、かくの如くにして意識は生ずるにしても、己は、今かくかくの事を考へてゐる、己とは一体何にかと云ふ如き反省自覺の作用は如何にしてとかるべきであらうか。

意識の自意識、ニイチエに於いては意志の自意識に如何にして許さるゝであらうか。  
デカルトは I think, therefore I am と言つてゐる、尙同の場所を But, what, then, am I? A thing which thinks. What is a thing which thinks? It is a thing which doubts, understand, conceives, affirms, denies, wills, wills not, which also imagines, and feels. (second meditation)

従つて彼の「考ふ」は今の用語例に従へば意識すの意である。

尙「我」は考ふものなりと言ふ以上、彼の「我」考ふ、故に「我」ありはかう言つてもよからう。

「意識」意識す、故に意識存す。

即ち意識存在の理由は意識意識す、とりもなをさす自意識によるのである。フイヒテも「我とは我が我に働くこと」だと言つてゐるさうである。しからは意識が意識を意識するとは何にか、意識が意識を意識し得るには、前の意識は後の意識に統一され、その部分とならねばならぬ、全体が部分とならねばならぬ、前の意識が後の意識を生むと共にその部分となる。自意識が可能なためにはその創造力を要す



る。ニイチエはその創造力を欲動と呼び力感と云ひ、力感の要求、推力意識遂に推力意志と云つたのである。

意識の存立は自己意識により、自意識は創造力によつて可能とされる、逆に言へば意志は意識なのである、ニイチエの意志は盲目ではないのである。従つて各々の表象は皆自意識を有してゐる。反省の可能はこゝにある。そこに表象にともなう力感、即ち意志が見出される。自意識は意志の屬性である。

ニイチエの意識をかくの如くといった時に、彼の「我」をば如何に説明すべきであるか、反省、自覺まで自意識の作用に歸した時、それ以外に我の存在を許し得ようか、そのためにはニイチエの我を傾向の如く考へねばならぬのであるが、彼自身は「我」を如何に説いてゐるか。

一般に物に二方面がある。否二つの見方がある、質的方面と量的方面とである。そして意識の事實はすべて質的であり、直接経験、内経験の特徴は質である。精神現象に於いて強度(量)を求めるとは危険な事であると言はれてゐる。しかし感覺の強度についてウェーベル等の法則があり、他方光學の如き自然科學に色の如き意識上の質が用ひられてゐる限り、我の大きさを求めるのもあり無理ではなからう。我の大小、我の範圍、は問題になり得る。自分の着物、自分の家、我が國、ひろげれば随分廣くなる、しかしそれを逆の方向へ進めて行く、着物も借りもの、内体も借り物、狂へば自分も自分でない。我と非我との區別、我の大きさ、即ち意識の大きさ。しかし意識の存在が證明し得ない吾人の直接経験であり、すべての學の要請である以上、我の大きさは各人の直接経験による外はない。Amiel にそんな文句がある。He (christ) also — He above all — is the great misunderstood, the least comprehended. 偉大な人さへ、博大な心の持主さへ理解されない。人と人との間には壁がある。

額に感ずる暖みで家畜の近よるのを知つた敏感のニイチエは、自分の充分に理解されぬのを苦がくしく思つたであらう。

「小さい溝は橋を架けるのが最もむづかしい。」我の奥には人に理解されぬ所がある。」かくて彼は、我はそれ自らの城を有すと思ひ、ステイルナーが「我と其の所有」と言ふが如く、我はそれ〴〵の世界を有すると思ふ。しかし、かくの如く我は小に見れば相互の理解は不可能となる。と論者は言ふかも知れぬ。がニイチエの言はんとするのは本質の理解は不可能だと言ふのである。ペルグソンの言ふ様に、認識はそれ〴〵の立場によつて變ずる。彼の言はんと欲するのも之であらう。

その他人に知り得ざるものを我となすけるなら、その私の性質は如何、先に言つた様に彼は萬物を權力意志の現はれである。とする。従つて彼の我はその推力意志の統一作用に外なるまい。統一作用とは材料を統一すると共に、その働きが、自意識の力によつて、新意識を生じ行く創造の作用である。ウインデルバンドはニイチエの我は、フィヒテの我を小にしたものだ云つてゐるが、フィヒテは大我を根源としたから、その創造作用の被創造物を自我の内に求め得たが、ニイチエに於いては、それを外部からも求めるのである、従つてそれを統一するには、ある一種特別の力を假定せざるを得ぬ。彼はその力を過去の種々の意志の統一されしものが潜勢的に働いてゐるに過ぎぬと説明するのである。「我」は普通意識を意識するもの、表象を意識するものと考へられる。しかるに表象が皆自意識を有し、即ち我等に意識され、その意識さるゝものは他より有勢な表徴である、と云ふ以上別にそれ以外に我を設けるのは矛盾であるから。

しかし、彼も科學的經驗のみには安じ得ざる形而上學者であつた。元來、その瞬間毎に意識を内直觀

すれば、最も有勢な表徴が他の表徴を統一し、一つの統覺作用を行つてゐる、けれども、それは一日、二日、一年と長くなる程、各瞬間は、統一する表象と表象との間に一種の連絡が生じ、それが一定の傾向を有する様に思はれる、之が普通に我と呼ばれるものである。ニイチェもこうした我を許さずにはおかなかつた。最有勢の意志、即ち最有勢の表徴が、意志の *wollen* の *sollen* の完成を全うし、他を統一する、そしてその統一は次から次と自己を保存し一種の潜勢力となる。之が我である。その潜勢力に運命的に一定の方向に走る様に定められてゐる。„Wie man wind, was man ist.“ 人は正しく、在る所のものに成る」と云ふ假定をもうけたのである。こゝに注意すべきは、我は一種の潜勢力であると云つた以上その我に精神にもあらず、肉体にもあざざる、それ等の中に内在する、否、兩者を含む意志である事である。がそれはさておき、彼の「我」の傾向の考へは彼の倫理説の影響が多いから、彼の倫理を一通り考案してから説きたいと思ふ。

私は彼の倫理説に於いて如何程、推力意志の考が働いてゐるかを、或は働かせ得べきかを、彼の哲學をして超人の哲學の名をすらす得せしめた *Urbemensch* に於いて知らんとする。ツァラストラの一冊は實に超人の「烈しき嵐の前に圓み、弛み、戦慄しつゝ、」海を超え行く帆の如くにも思はれるのであるが今は私の枯れた論文となるのが悲しくも亦いたましい。彼の熱を、彼の眞面目を知り度い人は直接に讀んで戴きたい。今の私は、彼のとも私のともつかぬ推力意志に頼て超人を考へて見るに過ぎないのだから。

あらゆるものを自己の支配の下に置きたい。自分が自分として本質を示したい、本當の自分はカッカと照る太陽の下に曝したい、之が推力意志である。自己の *wollen* の *sollen* を完成する、そのためには

是非とも他の *wollen* の *sollen* を征伏しなければならぬ。其の際初めの方に示した如く、あらゆる *wollen* は潜在的に *wollen* を支持し、征伏されるのは *sollen* のみであるから、征伏した *wollen* は常に征伏した *wollen* を壓迫してゐなければならぬ、そののみかニイチェは我を小我(心理的自我)に考へた爲に、他の意志の交渉のやむ時はない。意志は絶えず發展せねばならぬ。しかしかく發展が意志の本質であるとしても、その發展がある程度に達した時には、他の意志の *sollen* を破壊して、自己の *sollen* を完成する、即ち *wollen* *sollen* の状態となり得るであらう。それは自由の境地に達したとも考へ得られる。自己に對して自由な時に、自己の本質は自ら躍り出でる。推力意志が自己の本質なら、萬有の本体が表はれるのである。ニイチェは青年時代の著述たる「悲劇の出生」に於いてディオニソスは「根元」の最高満足の実現として、全然の藝術力の現はれであるとし、ギリシヤ人が如何ほどまでディオニソスであつたか、言ひかへれば自然の本質と合したかによつて、其の價值を定めたのであつたが、彼は推力意志を本体とした時にもその *wollen* が *sollen* を完成した度合によつて其の價を定めんとし、*wollen* が *sollen* たる如き人を假定してそれを超人と名づけたのである。従つて、超人は、普通、人類の價值の標準であるとも言ひ得よう。

各々の人がどこまで自己の *wollen* の *sollen* を完成したか、言ひかへれば超人に達したかによつて、價値が定められる。ニイチェの超人に對する考は、猿が人間になりしごとく、人間が、超人になると思つた點も多いのであるが、かくの如き進化論的見方は、第二期に屬し、彼の思想の第三期は推力意志なりとする説に従へば、私の如く超人を各人に對する價值標準と見なすのも誤りではあるまい。彼の妹 *Erster Nietzsche* の書いた「淋しきニイチェ」に於いても、兄は超人を概念的に考へてゐたと云ふ様な事が書いてあるし、又ツァラストラに於いて、超人そのものについての記述よりも、如何にして超人た

るべきかと云ふ、方法に力が注がれてゐる事、又、人間の價値は超人のために超人を産むために没落するにあり、と云つてゐるのを考へて見ると、超人はただ理想として掲げられたので、要は各人の本質の發展が、ニイチェにとつて重要であつたのであらう。しかしニイチェの超人は遙か遠くに光る太陽である。カントの理性者一般の如く達し得ざる境である。たゞ後者は人類を厳格な道德律の下に置き、天上の星の如く、それを思ふ事深ければ深い程、益々深まる道德律を最上原理としたに對し、前者は超人の理想によつて、近づけば近づく程遠のいて行く理想によつて人類を支配するのである。ジネルの語ださうであるが「ニイチェは超人の觀念によつて、從來生以外に——生の終極に置かれたる絶對的目的を、生そのものの中に融し込んだのである。生の各瞬間がそれ以上のものとして産出すべき比較的目的を以つて絶對的目的に代へたのである。そうして超人とは即ち、各瞬間が、生そのものゝ自然的昂揚を以て産出する事を要する比較的的目的に外ならない——故にかく解すれば、人生が如何に向上するも、其處には永久に彼の上に懸る超人がある。凡ての人は常に超人を産出するため没落しなければならぬ。超人のために没落するは人間の道である。」ツァラツストラ、解釋並びに批評、P. 140.

發展が止まれば推力意志は死んでしまふ。しかもその發展は Meyer の、ニイチェの永久回歸を評して言つた、nicht Entwicklung zum glück oder Entwicklung zum Heiligkeit, sondern Entwicklung. である。

ニイチェの超人を以上の意に解した時に、超人も普通の箇人の力を絶對的に見たに過ぎぬと見れば別に箇人について言ふべき所は殆んどない。ただ彼が自傳 *Ecce Homo* の表題に小書した *Wie man wird, was man ist.* の句に見える彼の運命論的な見方について言つて見たい。

運命とは發展の方向が最初から定まつてゐる事を言ふ。しかし何人も生まれて死ぬと云ふ事は定つてゐる事であるから、運命の眞意義は「獨特な方向」に發展するにあると言はねばなるまい。あらゆる推力意志は自己を主張し發展させて行く、それも運命ではあらうが、各人が獨特の方向に發展する、しかもその方向は、その意志の力の及び得ないものであると考へるに到つて運命は判然とした姿となる。では獨自とは何であるか。

他と異つてゐると云ふ事である。一步進めて異るとは何んであるか。西田博士は「或物を他の物から區別する *heterogens Medium* は或物でもなく、他の物でもなく、此二者を超越して、而も之を成立せしむるものでなければならぬ。白を黒から區別する心其物は白でなければ黒でもない様に。」

と言つておられるが、要するに區別、即ち相異も裏に統一者を有するとの意である。して見ると二つの推力意志の相違は之の二者を何等かの意に於いて統一するものがなければ意識されまい。しかし之の統一者の如きを抽象的に假定するのは獨斷である。統一は有勢な表象が劣勢なものを征伏するによつて生ずる。その事は最初に述べた通りである。尤も論者は「二者を超越し、而もそれ等を超越する第三者」によつて區別は可能なので、二者の一つが他を統一する如き統一その統一は兩者に内在するが、兩者を超越せざる如きものによつて、即ち兩者を全然一つにする如き統一によつて、兩者の區別は可能であらうか。直言すれば表象を意志と見て、優勢な表象が劣勢な表象を壓迫したと考へた時に、その統一は全然最初のものの面影をとやめぬものであらうか。もし然りとすれば兩者の相違も分るまい。同一直線上を反對の方向に進む二球の例の際にも球は球の力を弱めたと云ふだけで全然消失するのであらうか。

我は表象の際も、球の場合もさうでないと思ふ。例へばもし、*a*、*b*、球が同等の力を有すとせば、*a*、*b*二球はその衝突のため、共に力を失ふのではなくて、兩方の力が常に互を拒んでゐるために、運動が外にあらはれないのであらう。して見ると、二球の力に差がある際にも、*b*球は常に*a*球をさまたげるとも考へ得よう。表象に於いても同様で、*a*表象と*b*表象とは常に拒み合ふのである。初めの言を用ふれば、*b*球の *sollen* に破壊されるが *wollen* の働きは統一に於て常に感せられる。私は「相違の」意識するの之の理由に歸したい。かくして相違が意識するの理由は、統一に於いて *wollen* が *sollen* を完成せんとしつゝあるのが自意識によつて意識されるからであるとしても、即ちあらゆるものが推力意志即ち *wollen* たるがために意識されるとしても、何故に *wollen* の方向が異り、一定でなければならぬ、かは説明し得ない。意識の事は自意識にあらはるゝだけで、その説明に徹底的には不可能なのであらう。ニイチエは箇人間の相違を痛切に感じたのであつた、それだけであつた。彼が卑俗を憎んだ心が、その間に距離を感せしめ、それが一般化されたのだらうと云ふ事もこばみ得ないが、一般に現在働らきつゝある意志のみが直接に意識せられるのであるが、*sollen* は完成しなくても、完成せんとする *wollen* は不滅である。考へれば、その *sollen* が潜在力となつて現在を推進せしめつゝありとも言ひ得る。その潜在力を我となづける。それと共に差別感、運命感がその我の態度に附著する。かくてニイチエの我は運命論的な色合を帯びるのである。生れつき大きく強くなり得る、従て自由になり得る我がある一方生れつき小さな我もある。その場合小さな我の價値は、たゞ大きな我の踏み臺となり、服従するにある、小さい我はそのまゝでは不自由である、大きな我に全然支配される時には、自我は死して強き「我」が己れに代つて己れの世界を作つてくれる、第二次的に自由になり得るとも言へよう。従つて價値を得るのである。

強くなり得る我も初めから強いのではない。他の人の推力意志の傾向のために、己れの傾向—運命—が蔽われてゐる事もある、かゝる時には、淋しい、静かな世界に於いて自己の傾向を知るのが大切であらう、ツアラストラの山に入つたのも之である。しかしそれが全部ではない、絶えず、自己はその傾向に従つて發展させ、強めるのが目的である。

創造發展こそ彼ニイチエの哲學の根本なのであらう。

お互に力を競ふ世界は苦しい。それを「*Ja*」と言つて自らもその争の中に飛んで行く、悲壯な人生肯定を彼はどくのである。

一九一九年十一月十五日

(私は時々自然科学上の事柄を引用してゐるが、それは「たゞへ」位のつもりで讀んで戴きたい。)

## 或る日の久米仙人

(あるともにおくる)

藤澤和夫

秋も深いある夜、もう餘程更けてゐた。時々落葉の、渦になつて舞ひあがる冷たい音が、障子に搖れた。ランプの濁つた光は十二畳の廣間一ぱいに黄ろくひろがつてゐた。もののぼやけた影が、其處だけ薄暗い壁面に、ぢいつとすひよせられてゐた。

前の仙久米は、さつきからその真中に兩手の指を組み合せたのをそのまゝ枕にして、仰向けにぼんやりと天井を眺めてゐた。若い細君は片隅みの火鉢のよこに、一心に針を運んでゐた。縫つてゐる赤いメリンスが夜目にも美しく見えた。糸をこく度に、細君の鼻をすゝるのが妙に淋しい氣もちにする。

「あなた、もうお寝みにしませうか」

細君は矢張り下を向いたまゝ云つた。久米は大きく見開いた眼を動かもしなかつた。

ひゆうつと風のうなりがした。——と、後は死んだやうにひつそりした。何か變事の前布れのやうな静けさが一しきりつゝいた。ただ遠くの方でするごうつごうつといふ風の音だけが、曇り日の海鳴りのやうに搖れて來た。その合間々々を、とぎれ／＼になつて赤子の泣き聲が聞えて來るやうだつた。

「妙に淋しい晩ね」

と云つて、細君は又鼻をすすつた。この時細君の心では明かに良人の答を豫期してゐただけれど、顔は依然縫つてゐる赤いメリンスの方に引寄せられたまゝであつた。が、久米が矢張り黙つてゐたので、彼女はもう一度「ね」とアクセントをつけて、良人の返事を促すやうに初めて顔を上げた。色の白いどちらかと云へば面長な、そのくせ頬の邊から優しくこけた線が小さいおとがひを美しく描いてゐるごこか愁ひを含んでゐる淋しい顔だつた。

——瞬間、だしぬけに、ほんとにだしぬけに黙りこくつてゐた久米が、破れ鐘のやうな聲で、肥えた身軀中を揺つて笑ひ出した。細君は實際には少し屹驚したのだつたけれど、直ぐ、さもお可笑いといふやうなおどげた表情をして美しい双の眼を大きく見張つた。

「まつ、何がお可笑いの。そんな大きな聲して……………」

「わつはつはは、久米もう一度笑つた。そしてくるりと身軀を起して細君の方へ向き直つた。その顔はいかにも生々した快さに輝いてゐた。細君はにこ／＼してその顔に見入つた。

「随分變な人ね、あれなんて聲……………」

「おい、今日ね」と、久米は相手の言葉にはてんで無頓著に話掛けた。

「え？」細君も惜し氣もなく良人の答を要求する資格を捨てて了つて、その話に聞入るらしかつた。白い手が赤いメリンスで蔽はれてゐる膝の上に綺麗に組まれた。

「今日ね、俺が——ほら水天宮の前から宗形町へ出る坂な」

「え、右衛門坂でせう」

「うん、その右衛門坂を下つて行つたんだ、所がね、あの半襟屋があるだらう、その直ぐ下の所までゆ

くと、實に滑稽なんだよ……」

「あなた、またかつぐんでせう。いや」

と、細君は美しいしなやかな身軀をもぢらせて一寸すねてみた。正直にいふと、細君はこの時別に斯んなことを云つて話を中絶することを望んでゐたわけでもないし、又實際良人が自分をつぐ心算であるかどうかを疑つてゐたのでもなかつた。只かうして愛する人の前ですねてみることに、我身の幸福感を自ら享樂し、その上さうすることが良人に對する自分の愛を表現するに最も有効な方法であると知つてゐたからだつた。良人も妻のさうしたうぶな、こすい仕草を可愛く思ひながらも、それを見抜くからぬのゆゑ、はあつた。だから

「莫迦つ、まあ聞け」と、口では云つても、その眼は可愛くてならない細君の顔をやさしく愛撫してゐた。

「誰かがね、二階からはな紙を通りへ投げたんだ。それが運よくだか悪くだか、丁度通りかかつた俺の顔へピシヤリと來たんだ……」

「まあ、いゝ氣味」

「いゝ氣味つて奴があるもんか。女のくせして」

「でも、あなたがあんまりぼんやりしてるからそんなもの投げられるのよ」

「そりあ、ぼんやりしてゐたには違ひないさ。何しろ羅生門からすうつと鳶の輪を描くのを見上げながら來たんだからね」

「羅生門から？」

「あゝ」

「右衛門坂まで、まあ随分あなたも閑人ひまじんね」

「どうせ閑人さ。まあそれはいゝとして、そのはな紙のあたつた後へ手をやつてみるとヌル／＼してゐるんだらう、氣もち悪くなつちあつたね」

「ばばい、ばばい」と、細君は大げさに顔をしがめた。が直ぐ話の後をつないだ「あなたそれふく紙あつて、？」

「あつたら袖でなんかふきはしないさ」

「あら、袖でふいちやつたの」

「あゝ」

「驚いたわね、あなたにも。誰かに見られやしなくつて？」

「それがちやんと見られてしまつたのさ。それもね、市女いちめがさ笠の若い女が俺の顔を見てにや／＼しながら坂を登つて行くんだらう、俺も怒るに怒られず、さうかつてべそをかくわけにもいかないしね、仕方ないから思切つて怒鳴るやうに笑つてやつたよ」

「なつきのやうに？」

「うん、なつきのやうに。然し意味はまるで違つてるさ。何しろ先のは苦が笑ひだし、今のはその時の俺の顔を想像してみたらお可笑くつてお可笑くつてならなかつたんだからね」

「本當にあなたは伸氣しんきよ」と、細君はもう興味もぬけたやうに、そそくさと膝の上のメリンスをたたみかけた。

それでも久米仙人はにや／＼しながらもの足りなさうに細君の顔を見まもつてゐた。細君は下こそ向

いてゐたけれど、良人の視線が今自分の上に注ぎかかつてゐるのはちやんと感じて知つてゐた。その感じには結婚して一年後の今でさへ、かうぢつとみつめられてみると流石に彼女ももの恥づかしい氣もちにさせられた。で彼女は、こんな時誰でも受身のものの方がするやうに、自分から話の端緒をつくつた。

「ね、綺麗でせう」

さう云つて、細君は今自分のたたみかけてゐる袖のない胴だけの赤ん坊の着物を擴げて見せた。

「うん、ぼうずのか」

久米も直ぐ話を迎へてやつた。

「え、」

「何時生れるんだ」

「知らないわ」

「どうせ生むなら美しいのを生んでほしいね」

「え、え、仙人様でもなんでも迷はせるやうなね」

「莫迦、よせ」

ここで二人はいかにも話の切れめらしく大きく笑つた。それから細君は立上つて、押入から夜具を取出し始めた。久米はごろりと横になると、そのまゝぐつと伸びをして大きな欠伸をした。

——とたん、夢が破れた。

「夢だな」

彼はふつと淋しい心になつた。觸れてはならないものについ、觸れてしまつたやうな氣がした。夢の中のおどけたい氣もちは、急にむつちり黙してしまつた。暗い影が一筋流れたと思ふと、顔までが曇つて來た。

久米はしょんぼり立上つて縁側の柱に凭れた。そして今度は現實で、夢の中のやうに然しそれとは丸で反對に力なく兩手を伸して、欠伸をしてみた。彼はかうして淋しい心をふるひ落さうとしたのだつた。けれど、久米の頭と心はいつの間にか、堅く口を閉ぢた淋しい沈黙のどりこになつてゐた。ほんやり焦點もなく投げられた彼の視線は、よそめにも微かに震へてゐるやうに見えた。彼の眼には何もうつつてゐないらしかつた。實際、自分の眼の前にひろがつてゐる秋も冬枯れに近い頃のかさくした揉めばそのまゝ粉になるやうな落葉と土の上に、薄暮の太陽が、庭木の百日紅や銀杏などの裸躰木の影を、冷たく落してゐるのを、久米は少しも知らずにゐたのだつた。まして消えさうな程うすいそれ等の樹々の影が、一秒々と太陽の光が地上の面を長く這ふのにつれて、少しづつ延びてゆくことなどには氣の付く筈もなかつた。

この時彼の心に、細君が夢の中で云つた「え、え、仙人様でもなんでも迷はせるやうなね」といふ言葉が再びはつきり浮んで來た。彼は思はずにつととした。が次の瞬間には、そんなたわいもない言葉を思出すことに依つて、もう今の心の空虚なまで忘れて了つてにつととする自分のおめでたさ、いやあな氣がした。で彼はきたないものを吐き出すやうに

「莫迦め」と、聲に出して獨言ちた。所が、その聲が變にとぼけて、いかにも間の抜けた一種のぎこち

ない眞面目さといふやうな調子を帯びてゐた。彼はもう自分ながら自分といふものの存在がうとましかつた。

久米は不快さうに一寸頭を振るとそのまゝ部屋の中へ這入つた。

その後を丹念にみがかれた廣い縁が、冬枯れらしい風の中に冷たく光つた。

彼はさうでもするより身軀を始末しやうがないといふ風に、ふところ手のまゝぐたりと机の前に坐つた。すると、いつもこんな氣もちの時午睡ひるねの後に感ずる、かう——もの憂い未だ溶け切らないといつたやうなげだるさが、どこか身軀の髓の方にい、がんでゐるのに氣が付いて來た。それが又一層久米の淋しい心をとぢらせた。「いけない」と意識すると、それだけ變にこぢれて行つた。かうなるとなまなか自分の心だけにどうすることも出来なかつた。

「どうしたつて云ふんだらう」

彼は終にはかう云つて、自分の身體をもて餘したやうにやんちやに無茶苦茶にもぢらせた。そして今度は、懷中懐中の手でちつと腹の邊を抑へながら淋しい心の頭を制へつけるやうにして、机の上の鏡をのぞき込んだ。もう夕闇のすつかりたれ込めた障子の外から暗い部屋の中へ、どこからともなくかき消されるやうな白い線が忍び入る。僅かにそれを受けて反射する鏡の中の顔が、丁度古めいた彫刻のやうに浮び出でゐる。

彼は泌々獨りの淋しみを感じた。

「あゝ俺はひとりだな」と思ふと、彼は只もう無精に誰でもいゝから話し相手が欲しかつた。このどうにもならない淋しいそのくせいぢけた自分の心を、どこでもいゝからもらす所が欲しかつた。彼は考へ

ることもなしに初産のため實家へ歸つてゐる細君のことを思ひ出してゐた。「俺は彼女を愛してゐる」——ぼんやり考へてゐる中にいきなりそんなことをはつきり口に出して云つてみたくなつたりした。彼は抱締めたいやうな愛著を感じた。しかし彼女は今遠く實家にゐる。遠く實家に、慈母の愛護を受けながら、歡喜と不安とのこんがらがつたしかしをどり度いやうな輝かしい心を以て、彼女にとつて最初の経験である神の試練に堪へようとしてゐる。彼はやり場所のない愛著の心に狂ほしい程焦燥を覺えた。

實際久米は自分の細君を愛してゐた。彼は思出すたびに、吉野川のはどりで今の細君が洗濯してゐるのを見て、雲の上から落つこつた自分を寧ろ可愛いものに感じてゐた。時々龍門寺で一緒に仙の法を修業してゐたあづみのことも思ひ出しはした。そして彼が自分よりも早く業を得て仙になつてしまつたのを、心のどこかでねたましく思ふ時もないではなかつた。けれども彼は、自分と彼女とを結び付ける因縁ともなつた未熟な自分の業を、どうしてもくやしいと思ふ氣にはなれなかつた。寧ろ仙になつたあづみよりも俗になつた自分の方がすつと幸福であつたのだといふ氣がしてゐた。彼はある時少し金に不自由してゐたので馬を賣つたことがあつた。その時の證文に「前の仙久米」と署名したのを彼は今でも記憶してゐた。けれどそれとても、彼が人間になつて了つた自分が呪はしくて、言ひ換へれば仙人であつた時の自分が誇りたいために書いたのではなく、只いつものおどけた氣分から世の人の呼びなれたままにさう書いたに過ぎなかつた。そればかりでなく、あの帝みかどが高市たかいちの郡に都をお造りになるときの夫となつた時、行幸官から「凡夫の愛欲に依て心を穢した奴」として嘲笑されたのを吾れにもなく口惜しく思つて、七日七夜の齋戒斷食の業を積んで、どう／＼八日目といふ日にあつして元の仙人に歸つて造營の用材を仙の法で、南の山邊から敷地まで運んでみせたことなども、今から考へると全く要らざる力瘤



であつたと思つてゐる位であつた。とにかく久米は自分がかうして人間になつたことが必然に思へた。仙になつて天上にゐるより俗になつて地上にゐる方が、どれだけ本當の久米らしく知れないと思つてゐた。彼はかうなつて來た運命に感謝した。

「大事なのは彼女を愛してゆくことだ。俺があれを愛し切れなくなつた時、それが俺の存在の意義の滅する時だ、俺といふものが嚴密な意味で亡びる時だ。それが俺の内的の最期なのだ。俺は彼女を完全に愛することに依つて、俺を嘲笑する世間に本當の復讐が出来るのだ。愛することに依つてのみ俺自身を完成し得るのだ。今は彼女を愛することは即ち俺自身を愛することなのだ。さうだ、俺は彼女を愛さなくてはならない。愛し切らなくてはならない」

此處まで考へてきた時には、彼の惱しいままで淋しかつた心はすっかり消えてゐた。只細君に對する燃えるやうな愛著だけが彼の心一ばいに残された。

久米は始めて自分の過去の不品行を恥ぢる心を知つた。自分に全身全靈をたくしてゐる彼女に、そして自分を幸福な地上の人としてくれた運命に對して、彼は本當に濟まないといふ氣がした。彼は、或る人が夢の中で友の愛人と戀し合つたのを自分の道徳的の腐敗だと云つて自ら責めた尊いヒューマニストの言葉を思出した。しかしかうして過去を悔ゆる心の底からも久米に蘇生よみがへつて來るものは、矢張り彼女を愛さうとする意志であつた。

久米は急に坐り直した。

「神様、彼女は今主の鞭の下にゐます。今この私の魂を生み出さうとして苦しんでゐます。私が彼女を熱愛する魂が、今彼女の聖なる身躰を通して限りなく尊い一つの實在にならうとしてゐるのです。主よ、

彼女を幸福にさせてやつて下さい。私はそれを祈ります。私は彼女の苦しむのをこんな遠くに忍んでゐることは出来ません。どうぞ少しでも生みの苦しみの滅じますやうに」

かうして祈つてゐる中に、次第と痛がゆいやうな感じが鼻の邊に集つて來るのを覺えた。彼はそれをどうすることも出来なかつた。はつとする間に、一つほたりと落ちた。つづいて熱い玉が頬の上をすいすいと線になつて流れて來た。

この時久米の身躰はをかしい程震へてゐた。

鏡だけが暗のなかを仄かに光つてゐた。

## 夜明けを待つ心

林 正義

## 一 白雪の野中を

馬車路へ這入ると間もなく足底からむくりあげられるやうな音に脅かされた、私は驅り立てられるやうな焦躁から早くのがれたいためにレールの傍に立ち止つて後から来る馬車を行き過ぎさうと思つた、馬車のローンは私に近づくにしたがつて亂れて來た、私は私の周圍を見廻した、けれど其處には私より外に誰もゐなかつた、馭者台の男の眼は絶えず私の上に注がれてゐた、馬車は私の前へ來たとき殆ど止りさうになつてゐた、私は心の中でかなりごまごまさせられた、けれど今の場合極めて超越したやうな態度をさらねばならぬと思つた、私は視線を外らして馭者の存在を無視してゐるやうに見せた、

馭者台の男は怒に飢ゑた、彼は慥に期待を裏切られた、鬱憤を何うしてくれやうかと苛立つてゐた、ちえつ！

噛み切るやうな舌うちが聞えた、鋭い鞭のひびきがそれについた、私は今にもその蛇のやうな鞭先きが空を切つて首に巻きついてくるやうな氣がした、恐しい權幕だ、

「残酷な」とも思つた、

馬は押出されるやうに動き出した、再び足底をむくりあげる音がひびき出した、私は疲労したやうに傾斜して走り行く馬車の後影を見送りながら何うして此の寒い冬曝しの野中へ殘虐と無智にかたまつた馭者の支配權を犯すために這入り込んだのかと思つた、不審はそればかりでなかつた、私は鋭い鞭のひびきを「無慈悲な」と思ひながらあの蛇のやうな鞭が一文字に瘡せて波うつ馬の脾腹に命中したんだと思ふと男性的な快感を覺えるのだつた、

黒いマントに眞黒なソフトを被つた自分が廢顏した氣分で場末の街からいま白雪の野中へ進まうとしてゐるのだ、たゞ獨り瞑想に耽りながら青年詩人や青年哲學者のやうに——、けれどたつたいままで自分は街のカフェーで白痴だといはれても仕方のないやうな眞似を平氣でやつて來たんぢやないか、

お、恐しい矛盾、自分は何のためにこんな詐欺師のやうな眞似をするんだらうか、私は思はず立ち止つた、

灰色の林檎畑を縫ひ終つた空馬車はなほも右に傾斜を保ちながら亂れたローンを續けてゆく、もう私は馭者のことについて何も考へてゐなかつた、たゞすべてが停滯したマーブルの野に憂々と小さな箱が動いてゆくのが無意識に視覺をそゝるばかりだつた、

私は再び馬蹄と泥雪にまみれた中に枯木を見付けながら一步一步その上を踏みながら進んだ、林檎畑をぬけてから始めて曠野の面積に威壓された、

地上に立ちはだかつたすべてのものを白雪の中に埋め大空を氷雲でどぎした冬よ、私もお前に征服された一人だ、けれど地上を行く大部分の群衆は一日も早くお前から逃れようと思つてゐるんだ、私はその躁いてゐる人間の一人でもあるのだ、

鋭い氷雲の隙から日が出た時私は甦つたやうな氣になつた、私には日に面して立ち日に向つて歩くのが快感をそゝる一つとなつてゐた、

それ程私は陰影とかいふものを此の世で最も煮えすかぬものに數へてゐた、とにかく珍しく日に照されるのが此の上なく嬉しかつた、遂々私はマントもソフトもどつて思ふ存分日光を浴びようと思つた、私は全く快活に闊歩し出した、時々枕木を一つ置きに飛び越えた、けれどもそれは何時ものやうに何時迄も續かなかつた、私の視覚は知らぬ間に恐しく昂奮してゐた、何時か色彩感が淡紅色にのみ作用するやうになつてゐた、

瞬いても瞬いても無数の涙の泡が、瞬から消えなかつた、視力が次第に鈍つてきた、青味を帯びた白雪の中へ顔を打ちつけて見たいやうな氣がした、私はあはてマントを頭から引き被つて白雪の野中にたゞ一つ白い色に支配されずに横切る足下の泥路を今更つくつく見凝め出した、

けれど此の蹄にふみ躡られた路は私に何のヒントも力も與へることは出来なかつた、

N 驛場の踏切りへ來た時はもう惱ましい眩惑から回復してゐた、驛場で近頃街へ入り込んで來た肉屋でよく見る驢馬の主に出合つた、四十余りの髪も髻さかきも區別のつかない程焼けた錆びた彼の顔色が私の氣にいつた、

彼は相變らず驢馬の毛色と不調和な配合を見せる褪せた虎の毛皮を脊につけて私のとつて來た路の方へ戻つて行つた、

またあの服装で平氣に街の中を通らうとしてゐるんだ、廣い世界で、恰も彼の唯一の半身であるかのやうに思はれる驢馬は何處迄も同じ姿勢で鈴の音を狂はさないで行く

驛場の中には男女の見分けもつかぬ二人の年寄つた田舎者が毛布にくるまりながら歸り馬車を待つてゐた、

私は驛場を素通にしてから更に泥土の深い跡を歩かにならなかつた、私の隠れ家は踏切から一町以上離れた狹斜街を脊した土藏造りである、扉と野に面した長方形の窓を除いた外壁全部はすっかり雪垣で圍はれ白壁と雪垣の間には過ぎ去つた秋の日迄暴威を振うてゐた蔦が今はその薄ぐらい狹隘な空間にひからびてしがみついてゐるのだつた、

私は板橋を渡つてから庭つゞきの母屋の方へまわつた、

「お母さん！ 誰も來なかつた？」

椽側に腰かけて私はかう思ひきり大きくどなつた、

「まあ……………」

母はあきれたといふやうに語尾を濁したが、

「何方も御出でにならぬがな」

と何處かで答へた、私の用はそれで済んだのだ、私は急いで避難所へかへつた、避難所へ這入つてから私の心は容易に落着かなかつた、

何度も時計を出した、けれど彼女が來る迄には未だ可成間があると思つた、窓際の椅子に腰かけてから始めて火を起すことを忘れてゐるのに氣がついた、

火鉢の炭が青い燐をあげる迄随分骨が折れた、私はその火鉢を椅子の下へいれてマントを膝にかけながら漸く平靜な状態にかへりかけたことを意識するのだつた、

四角な窓を通して眼に映するものはやはり冬の平原だ、無限の白い平面と灰色の半圓だけの世界だ、たい重苦しい壓迫を感じさせるだけなのだ、

それでも私の視覚がいま灰白色のみによつて支配されてゐるといふことは否定出来ないことだ、早く生の世界が復活すればいい、

私は何んなに生きかへる力に飢え、生きかへる力を望んでゐることが、けれど萬物が停滞した此の死んだやうな世界がやがて新に生の力に躍動してくる目を一層價值付けるものとすれば時期が早いだけだ、といふ恨を犠牲にしても靜かに待つて居よう、

冬の日の惱みは私の心から次第に遠ざかつて行く、

さうだたい時期が早いだけなんだ、

自分も幸福な人間の仲間入りが出来るのかも知れぬ、私は彼女に感謝しなくてはならないと思つた、けれど考へて見れば不思議なことだ、

## 二 恐しい穴藏

私が初めて私達のクラブで彼女に邂逅した時彼女の慥か右の眼だつた、殆ど一時的の疾にかゝつてゐるのだと想像出来ない位深紅色に燃えてゐた、眞赤にやきつけられた眼の中心には彼女の殊更ら大きい悽味を帯びた黒瞳が何を軸とするともなく廻轉してゐるやうだつた、

私は驚異の眼を見張つた、そして私の視線は意地悪く彼女の赤い眼から外れなかつた、けれど彼女の青白い顔の何處にも若い女として自分の短所を發見された時に感ずる羞恥さといふものを見出せなかつた、

そればかりでなかつた、私の視線は脆くも彼女の煽をあげてるやうな視線にはねかへされた、

「恐しい女よ」と思ひこんだ、

けれど恐しい女でなかつた、勿論其の時の彼女の心にはやがて健康な眼を回復し得る強味があつた所爲かも知れない、けれど自分の短所を他人の前に無關心で曝け出して居られる程彼女は無邪氣だつたのだ、

それにも拘らず私が幾度もあの眼が永遠の赤眼であらんことを祈つた理由はかうだつた、

S校を出た時程私は悔恨と羞恥にうづ巻かれたことはなかつた、「たとひそれは私の生んだ罪であるとしてもあまり苛酷な處置だ、見え透いた瞞着や虚偽を彼等は公然と行つてゐる、あれで世の中が破壊せぬのが不思議だ、」

私の肩につかまつてかうさゝやいたのは猜疑といふウイツチだつたとは當時は全く知らなかつた、

私はS校五年間を綱渡りのやうな際どい藝當をやつて來た罰を極めて公平にうけたに過ぎなかつた、私こそ随分虚偽と瞞着とを平氣でやつて來たんぢやないか、假にあの時焚刑に處せられても不服を云はれぬ不徳の數々を未だ外に數へ切れぬ程犯して來た人ぢやないか、猜疑といふものがなかつたら此世は何んなに公平だつたらう、

けれど當時の私にとつては猜疑とか偏見といふものに支配されてゐた方が却つてよかつたのかも知れない、

私はたゞ生れて始めてうけた屈辱を何うして復讐してくれようかと苛立つてゐた、反逆とか抵抗とかいふものから無限の暴力と猛勇を授けられた私とその夏の日力の表象のやうな入道雲の中へそゝり立つ

てゐる下高の煉瓦造を見上げた時私の復讐心は何んなに煮えかへつたことか、私の鬱積した力は壓縮された氣體の壓力と同じ程度だつた、外界と境する如何なる鋼鐵の器も粉碎する力を自任してゐた、私はその上未だ力以上のあるものに迄支配されてゐると信じ切つてゐた、

私は私の身体が眞夏の直射に堪へ得ない程外形が醜化されるまで苦闘した、實際此時程人間の形体がわけの分らぬ醜い骨と肉のかたまりだと思つたことはなかつた、

遂にすべての期待は私の皮肉を満足させるだけの程度で實現された、私は何んなに感激したことか、その感激の涙が何時迄も乾かなかつたら私は何んなに幸福だつたらうか、

けれど私には呪はれたウイツチといふ煽動者が絶えず肩につかまつてゐた、しかも私は彼を肩からふるひ落さうとしたことは曾て一度もなかつた、彼が過去に於て唆唆した罪惡に對して一度の叱責さへもしなかつた、

呪はれたウイツチよ、私はお前を嫌はない、私が此のやうにプライドを保つことが出来たのはお前のお蔭だ、未だ、未だ未來に於てお前の魔力をからなくちやならない、

けれど許してくれ、今は大事な時だ、控へ目にしてくれ、私は歎願し哀訴した、

けれど彼は一度泥沼へ落ちこんだ私をもがけはもがく程眞黒な沼底へ沈んでゆくばかりだぞと威嚇した、

彼は嫌がる私をするする彼女の前へ引きすつてきた、私は曾てうけた屈辱の上に更に大なる屈辱を重ねることを怖れた、彼女が眞實の不具者であつたら私は何んなに聖者のやうな生活が出来たらうと何度思つたことか、

けれど私は今では決して彼女の生れなかつたことを祈るのでない、私の放心状態が彼女によつて惹起されたものとすれば彼女に對するあれだけの好意と愛する心が何處から湧いてくるのだらうか、

私の力の大部分が彼女のために焼きつくされたことは浪費されたことでない、

恐しく溺愛した時代もあつた、けれどすべては私を向上させる道程に横はつてゐた試験だつた、

私のお前に對する近頃の態度は自分でも可成冷靜になつたと自覺してゐる、けれど私は決して打算的な人間になつたんぢやない、

もう私等の立つてゐる地上のすべての人間も覺めてよい時期だ、私は科學者でない限りすべての假面がひきむしられた世界を想像することは出来ない。

私は此の世界が純化されることを祈つてやまない、

けれどそれ迄には未だ随分間がある、私も假面を被る必要が少しはあるんだ、私の醜い貌を蔽ふためといふよりすべての人間に快感を與へるために假面をつくるのだ、

私は私の半身に對して假面を被る要がないかも知れぬけれど鋭い凝視の焦点になつてゐる二人もやはり人間なみに假面をつけなくちやならぬ破目に陥つてゐるんだ、

ウイツチが嫌がる私をお前の前に引きすつて來た、といふのも嘘だ、お前と私の邂逅の何處にも偶然の廻り合せといふ外全く不自然な何物をも見出せない、

ウイツチを呪はなくてはならない世界に生れて來てゐるからだ、お前が眞實の片輪であらんことを祈るといふ理由も呪はれた世の中に生れた所爲だ、

私は彼女に對して極めて剛性な理性ばかりを働かせようと思ひながら又、こんな不甲斐ない辯護のや

うなものに終つてしまつた、

けれど私は今ではお前から熱情ばかりに油を注がれることは滅多になくなるだらう、今迄に於ても決して意志に叛いてまで感傷的な振舞をお前にしたことのないことはたしかだ、

お前と私は私等のサークルで出合ふ毎に不思議なほど反目と反目ばかりによつて支配されて來た、しかもその反目は私にとつて——恐らくお前にとつてもさうだつたらうと思ふが——此の上ない戦ひのあのものだつた、

けれどその反目は決して二人の間をくらます爲めの或る下心から無理に押出したやうなものでなかつた、

私はお前を愛しながら絶えず男といふものゝ嚴肅さで一種の壓迫を加へようとした、お前は私に屈從しながら私の前に跪かうとはしなかつた、

やはりお前も私に反抗し得る力を認められたといふ感じがあつたに違ない、

私にとつては興味のある對抗者だつた、

けれど此頃のお前はもう抵抗しないやうになつたぢやないか、お前が私の眞實の心をつかまうともがき出したのも近頃からだ、

白狀するが私がお前の所有してゐるもので心を動かされるものはすべての女にありがちな見え透いた企みを企んだ表情とかいふものから全く離れてすべての表情の細條にわたつてたゞ處女らしさを生み出す外ちつとも技巧的なと思はせないからだ、

お前の濕んだ眼は主の住む青い淵にのぞむときのやうな緊張を私に與へるからだ、

お前の顔は極めてゆたみがあるにもかゝはらず一分のいぢみかゝる隙を見せない、

いぢらしさと純潔のかたまりであるやうなお前の姿の輪廓は私の心の何處かにいたましい程焼きつけられて、たどひお前が數知れぬ群衆の中にまぎれ込んでゐても私は直ぐ發見し得るだらう、

それほどお前は私の心に喰ひ入つてある部分だけをつかみ得てゐる、けれどそれは悲しいことに私の心の全班圍でない、

あゝ、お前が私の心に潜在するすべてをつかみ得たら、私は無論その日を待ちこがれてゐるんだ、けれどその日を祈るだけでその日を豫言することは若い二人にとつて未知の山路に入るやうに不安な恐しいことだ、

その日に到る迄私とお前は同じサークルに這入つて可成ながい間賤しいスパイのやうに暗夜の裏街みたいな穴藏へ踏み入らうとしてゐるのだ、

私もお前も求めてその恐しい穴藏へ這入りたくない、けれど長い間暗黒な穴藏をさまようた後始めて青空に對する感激の念を強める氣分が味うて見たいのだ、

雲雀のやうなお前をウイッチの跳ねまはる穴藏へ追ひ込むのは殘忍なことだ、

けれどお前がこの苛酷な試練に堪へ得るだけの力のあることを保證する迄は私は心からお前を讚美することは出来ないのだ、

愛するY子よ、

お前が眞實私を愛する心があるならあらん限りの勇氣をふるうて恐しい穴藏へ進め、

## 三 ひからびた馬に

私は心に彼女の幸福を祈りながら再び時計を出した、馬車は私が室へ這入つてから二三度往來した、私はその中に彼女の姿を見出さうと何んなにあせつたことか、けれど何の馬車の中にも私の心をおごらす影は容易に見出せなかつた、硝子戸の隙から冷い風がしきりに襲うた、それでも私は野に向つてゐた。

野末の砂丘まで單調な白色の平面を續けた何の變化もないマーブルの野はわづかに大陸気分を感じさせるだけで私の心の大部分はやはり彼女につかまれてゐた。

彼の女の馬車が最後に林檎畑の蔭から現はれたとき私の心は何んな衝動をうけたことか、

私は直ぐ彼女が後向きに坐つてゐることを直覺した、けれど彼女が今私に見られてゐると意識しなからわざと脊を向けて坐つてゐると考へるのはあさましいことだ、

やがて彼女にもそんな下心がわく時代が來ることを豫期しなければならぬのか、

私はそんな時代が一日も早く過ぎ去つてしまはんことを祈りながら猶も眞偽をたしかめるやうに硝子越しに彼女の後姿を見据ゑた、

私の顔に打つかりさうになつてゐた窓硝子は何時か摺硝子のやうにかすんでゐた、私の唇からやはり硝子板をくもらすだけの勢が溢れてゐたのだ、けれども脈搏も鼓動も狂つてゐなかつた、彼女と接觸する度に血を逆行させた時代がなつかしいやうにも思はれた、

私の心は再び落着きを失つた、無暗に其處等に散らばる雑誌を整理したり書付けを檢べたりすることが仕事だつた、

やがて扉の外に雪を踏む音が意識せられた、

私の心は全然平衡を保つてゐると云はれないかも知れない、けれど狂つてゐやしない、たゞ不快とか陰鬱といふものが感ぜられぬだけに過ぎないと思つた。

四尺四方の敷石の上に足音が止まつた、

警戒しなくてはならぬと思つた、恐るべき煽動者が何度私の心の隙につけ入らうとしては抑へられたことか、

「Hさんゐるの」

私の緊張を破る第一の聲が洩れた。力以上のあるものがこめられた扉の隙から、扉の端にかゝつてゐる赤い手袋の主は意外にも彼女の妹のMちゃんだつた、

「御這入り」

私の聲が耳に這入つたとも思はれぬ先きに赤と黒の毛糸が羊毛のやうに渦巻いてゐるマントに包まれた小さな姿が框を上らうとしてゐた、

「Mちゃんよく御出たね、姉さんと一處」

Mちゃんは黙つてうなづいた、

「姉さん何してゐるの」

彼女は鬨を渡る前に入口を振りかへつてもごかしさうにかう云つた、彼女の何かそれに答へる聲が聞えた、

妹に對して何處かに姉としてのしつくりあふ威嚴をそなへながら彼女が這入つて來た、

眼と眼とが鋭く戦つた、無言の挨拶がすんだ。

「さあ何うぞ」

消えかゝつた火鉢に炭を入れて私はすゝめた、Mちゃんは躊躇せず火鉢の側にもじり寄つた、

「Hさん毎日馬車で通ふの」

Mちゃんは姉に劣らぬ大きな眼でまじまじと私を凝視しながら意外な質問を發した、

私は何う答へてよいか迷つた。

「妾獨でも構はないから、時々これから來るわ」

「Hさん來てもいいでせう」

「何うぞ」

Mちゃんはそれから「嬉しいわ」を續けた、

けれどMちゃんの「嬉しいわ」は此の黒い羅紗紙に四方を封じこめられた土藏の中よりも曠野を快走する馬車の中にあるのだ、

それからの發言權はすべて此の小さい女王によつて獨占された、小さい女王はやがてまばらな書架の間からオペラブックを發見した、そして十歳の子供としては可成大人氣な冷評を下した、

けれど敬愛する女王よ、

やがてそのオペラブックに無限の憧憬を感じる時代がくるかも知れないんだから、

彼女の心がオペラブックに奪はれてから今迄發言權のまわつてくるのを靜に待つてゐた姉は始めて口を開いた、

「随分御待せして濟まなかつたわ」

彼女からブリリヤントな氣分を見出さうとするのは無理だつた、けれど始めて思ひ切つて凝視した彼女の今日の顔の何處にも何時ものやうな快活さを見出せなかつた。

デリケートな淋しみとも違つてゐた、

彼女は黙つて青い包みから私等のサークルの表象ともいふべき創作を集めた製本をとり出した、

「もう讀んだの」

「えゝすつかり……………」

私は今更彼女の語尾があやしくふるへてゐるのを聞きのがすわけにゆかなかつた、私は再び彼女を見上げた、

彼女の細長く流れた眉毛が神経質にふるへてゐた、彫刻のやうに深く切りこまれた二重瞼がかすかに充血さへしてゐた、黒い瞳の頂點になる一點がいつか涙に光つてゐた、

私は愕然として恐しい直感におそはれた、

やはりさうだつたのか

『足に絡まる海草』といふのが私の創作の題だつた、

或年の夏或る灣内で私が何も知らずに飛びこんだ海の底には長い海草が水中に潜んでゐた、そして私の足にからまつて私が躁けば躁くほど底知れぬ淵へ引き入れようとした、私は生れて始めて溺れた、それを思出すことは恐しいことだ、けれどそれを忘れることは猶更恐しいことだ、

私を現在の放心生活に陥れ私を誘惑した私を取巻くすべての對照物をその海草にたとへた、



けれど彼女がその海草の一に解せられやうとは誰が豫感し得られやうか、

「妾も海草の一でした」これが彼女の最後の言葉だった、

「そんなことが……」

と否定しかけたけれど私は俄かに口を噤むだ、

私は心の中で、

「お前は私の對照物以上だ」

と叫んだ、けれど今私は彼女に對して何を辯護し得られやうか、時期が來れば分ることだ、彼女が恐  
しい穴藏を通過する迄待たう、

二人は啞者のやうにたゞ多恨な眼を見合した、

小さな女王は二人の會話が途切れたので不審さうに顔をあげた、そして姉の態度から何か私が彼女に  
暴虐でも犯したのを語るやうな眼で私をにらんだ、

私は暴虐を犯したのかも知れない、

「Hさん酷いわ、お母さんにみんな云ひつけるから」

「Mちゃん堪忍ね」白々しいと思ひながら私はあやまつた、

「Mちゃんの知らないことだからね」

彼女は妹に向つて直ぐ私の言葉を打消した、

そして赤黒いマントに手をかけた、

もう歸るべき時刻が來たのだ、

Mちゃんは不平さうに姉によりかゝりながら惜しさうに私を見凝めてゐた、罪のない者を怒らす自分  
はやはり悪人の中だ、けれど彼女が妹をつれて來たことが私に對する一種の皮肉でなかつたらうか、

「馬鹿な」

彼女にそんな下心があらうか、私は何時の間にこんな獅子心中の蟲に侵入されたのか、

「もう歸るして下のS」

もう歸るべき時に違ひない、若し私が昔の異性に對して深酷な愛着を感じてゐる時代の私であるとした  
ら私は彼女の此の言葉に反對したに違ひない、

けれど相手が女であるだけそれだけ彼女の意志を尊重してゐる今の私は他人の意志を犯す程僭越なこ  
とはないと自覺してゐた、

「お歸になつた方がよいのだ」と心の中で答へた、

彼女は妹を蔽ひながら立ち上つた、二人の姿は框から庭へやがて扉の外へすべり出てゆく、

「さよなら」私は鬨の上に立つて靜かに見送つた、

「さよなら」かすかに返事があつた、

私は再び窓に向つて坐つた、

たとひありとあらゆる衝動からつきはなされた人間であるとしても愛するものに誤解された時に感ず  
る悲みと惱みのたゞ中に取殘されてはやはり人間的な涙を流さぬわけにゆかなかつた、

私は靜かに二人の馬車が平原を横切るのをまつた、

今日も夕陽を見ずして暮れかけてゆく、

冬の平原は夜の吹雪を豫覺してふるへて來た、  
空と地の灰色は次第に濃度を増して亡びてゆく、  
やがて一台の馬車が視線を横切つた、

彼女の影は最早薄暗い暮色に吸はれてしまつてゐた、

馬は夜を恐れて益足を早める、

新な悲しみと矛盾とを乗せた馬車は何も知らず次第に視角に遠ざかつてゆく、

人間的な悲しみだ、

大自然迄夜の嵐に威嚇されて我と我が力をのゝいてゐる、

私は何んなに見渡す限りの皚々たる白雪の平原が緑の沃野に復活する春を切望したことだらうか、

けれどそれは當分望まれぬことだ、

たゞ此の視界に立ちほだかるすべての陰い影をはらいさる夜明けの光を待つことだけは今の私に許されてあつた、

私は何んなに夜明けの光をなつかしく思つたことか、白雪の大平原を甦みがへらす莊嚴な朝よ、  
私の手にはいつか窓の際から匂ひ込んだひからびた蔦がしがみついてゐた

## 譯詩三篇

三 島 寛

### 無常考

ホフマンスタール

いかでこの近き日の、

遠く去りもせむ、永劫に遠く、去りも果てなむ、

なほわれはその息の頬におぼゆるを、

こはもろびとの思ひもせざる一事なり、

あまりにこのあさましければ人はかこてり、

物みな滑り、流れゆけりと、

さてわがわれにいさゝめのさはりなくして、

うなひより生ひけることの、

われには犬のごとうたてくも無言にふしぎに覺ゆなり、

かくてわれもまた百年のかみにありて、  
 經帷巾をまとひたるわがこのかみは、  
 わが髪のごとわれとわれと親戚なりき、

そはわが髪のごとわれと一つになむ、

ひめごと

デーメル

暗き谷間に

月はかへる、

聲音してけり瀧のほとりに、

おゝ戀よ

汝がこよなく高きよろこびと  
 汝がこよなく深きうれひとは  
 わが幸にこそ

太陽

モムベルト

緑の邱の上に群集が脆く、

黒い外套を着て破れた靴を穿いて

その瘦せた頬をしめやかな血が赤く染める、

そしてすべての頭は帽を脱ぎ、

そしてすべての眼は閉ぢられ、

そしてすべての手は拱かれてゐる、

太陽、太陽、太陽

枳殻の實

田中完之助

この萬年青わがいのちぞとめづるかなひと葉は秋に枯れにたれども

よこしまな凡夫の智慧に障へられて戀の面はおびえたりしか

訪へば酒の香こもり泪出ぬ佛生を説きし彌陀のます寺

先づわれに罪を教へしこの町も共に滅びよ侘しさの夜は

熟れし過去足もて躡らん此頃の秋の空こそ面映ゆき我れ

こは誰と人の答へをたよりにて小さくも生くるさらばひし身は

棄てられてさてこそ死なんぞぞ思へり餘やさしく君はあるかも

昨日今日破滅の上に假寝せし不思議な生命十二時を聞く

かばたれ

二見武雄

多摩川は音なく暮れぬ電燈の明るき家に  
かへりけるかも

立てる牛ひざまづく牛われとともに多摩  
川べりの夕闇に入る

秋草をふみて歩むも秋草は健けく生ひた  
り九月のまひる

薄寒うすさむの夕をつごひ驛員が汽車を待つ間の  
したしき夕餐ゆうげ

十月に近き夕をひた黙し北の大海おほみへ流れ  
ゆく川

夜の街祭の街に子供等のたたく太鼓の傍  
を行く

今宵はも祭といふにはるばると出でゝ覗  
ける露店なるかも

水草刈る瀉あなの女まんなに陽は落ちて秋の夕は波  
ひたに寄す

停車場の朝の歩廊におかれたる牛乳の色  
のなつかしさかな

鐵橋の真下河原の葱畑あさけの露は光り  
たりけり

梨をむく吹く秋風に梨の皮ながながと地  
に打散りしかも

新らしき紺の足袋はきしみじみと足もと  
をゆく冬の水みる

ほろゝ啼き朝の庭にきたる鳥しばしうご  
かすこの冬の鳥

## 女 盗 人

北 村 喜 八

京の街は暗い静寂の底に横たはつてゐた。凡ては物凄いと暗く、静かであつた。只、星のみが、瞬  
き瞬いてはその仄青い光を放つてゐた。併し、それもこの静寂をより強くする一つに過ぎなかつた。

この京の街を——と言ふよりは夜の沈黙の底といつた方が適當であるかも知れない——急ぎ足にゆく  
一人の男があつた。それは確かにこの夜の動いてゐる唯一の實在であつたにちがひない。男は、足音も  
たえず、垣根の茂みや土塀の側を、如何にも道案内にしくはしいかの様に歩いてゐた——この様な書き方  
をすると、彼は盗人と間違へられる恐れがあるが、決して盗人でない、確か、西の京の町人の筈だ。彼  
はびくびくしてゐた。冷たい秋の夜風が肌に觸れると、我にもあらず全身をゆるする戦慄に粟立つた。そ  
して、彼の顔色は、もしあかりでみる人があつたらその青いのに駭いたであらう。まるで墓場から脱け  
てた亡霊そつくりであつた。……憊うは書いたものの、彼はしかく臆病ではなかつたのだ。しかし、  
濃い闇によつて醸された恐怖が、彼の空想と絡みついて、一度、「怖しさ」の領土に彼を逐ひやつてか  
らは、彼は其處を逃げ出ることができなかつた。彼は、後から、物も言はずに今にも大きな手が頸を掴  
みさうな氣がした。或は、前の築地の陰から、白刃がひらめく様な氣がした。彼の歩調の自づと早くな

るのは仕方のない事だ。彼は、只管、この不氣味な闇を脱れて、一時も早く、貧しいが暖い空気を仄かな灯のある己が家を戀ひた。

彼が、ある築地の側を歩いてゐた時、不圖、頬に冷たいものが觸れた。彼は、ハツとして立ちすくんだ。全身冷水をあびせかけられた様だつた。この場合、何か彼の眼の前に現るか、大きな物音でも耳に響くなら、彼は氣絶したであらう。併し、頬に觸れたものは、親木を離れて落ちる一葉の病葉であつたのに氣付いた時、彼は、自分の臆病さ加減に苦笑せざるをえなかつた。そして、貧のために皮膚のゆるんだ頬を、こごえた手で、なで廻した。

作者は、彼のために「貧しい」といふ字を用ゐた。この字の説明をしておかねばならない。彼は一月許りに盗人に這入られて、家の中の目星しいものは、すっかり盗みとられて了つたのだ。それで、彼は、自分許りでなく、女房も子供も貧のどん底に沈まねばならなかつた。それ以後、彼は、偷盜に對する憎惡の念が一層強くなつた。自分が生きるために、不正な手段を以て、他人の幸福を奪ひ、時としては、恐しい運命迄齎す人間を呪はずにはゐられない氣持が、彼の胸に、何時も、一杯であつた。この間も、隆房大納言とかいふ檢非違使のもとに這入つた女盗人が、召し捕へられて、きぬかつぎ脱せられ、面あらはに出されて、街中を、ひき廻されるのを見た時に、あさましいとも、呪はしいとも思つた。女盗人は、必要に迫まれての偷盜ではなかつた。生に對する執着の衝動に盲目にされて、からくも生命をつなぐための手段として、偷盜を選んだとみるには、餘りに高貴な身分であつた。彼女は上臈の女房だつた。

男は、今も、歩きながら、その事を憶ひ出いてゐた。そして、その上臈の女房が自分のにくいくい

仇の様な氣がしてきた、必要でもないのに盜賊をはたらいて、不幸の種子を蒔いて歩くものを憤激の心なしでみる譯にはゆかなかつた。もし、今、何處かの辻から盗人が踊り出て、自分の衣服をはぎとらうと脅してもしたら（さう思つたら、一種の脅迫觀念でぞつとしたが）そんな時には、命をなげ棄てて、その盗人の咽喉に喰ひついてやるぞといふ、勇氣と名付けたら滑稽に近い様な或る感情が湧いてゐた。勿論、それは、盗人憎しといふ考で力づけられてゐるものに相違ないことはたしかだ。

この男が、朱雀門の前まで來た時、門の上に灯がともされてゐた。ぼんやりとした明さが、闇の中に自分の領地を固守しながら顛へてゐた。彼が、その灯の光を見付けた時、一種の心安さが湧いた。しみじみしたあくかたで充ちた様な眼付きをして、それを眺めた。併し、何時もあかりのないこの門に！と思つた時、ハツとした。以前にもました怖しさが、たましひを包んだ。この門には昔、鬼住みけりと聞いた事があるので、今も、住んでゐるのかと思つた時、もう、彼は、生きた心地もなかつた。

駭きで顛倒した意識がもとに歸つた頃、彼は、息を切らし乍ら、驅けてゐる自分自身を見出した。この男、因縁の悪い奴と見える。それから數日後、暗い夜の街を、唯一人、びくびくし乍ら歩いてゐた。この間と同じ道だ。他の人なら、一二日延してもいい、用事なら晝の中にすまさうといふのに、この男、どんな用事か、夜歩くのだ。作者は、その男の用事が何であるか知らない。彼が朱雀門の前に來た時、この間と同じ様に灯がついてゐた。この間の様に氣を顛倒させはしなかつたが、恐怖で矢張り顛へてゐた。併し物好きな心が、彼を暫時、立ち止まらせた。彼はうかふ様にして、灯を仰いだ。大きな門は、星明りの淡い空を背景として、巨大な魔物の様に立つてゐた。そして、灯の光は丁度その魔物のたましひが夜の底にある不思議をみきめようとして、開いた眸の様であつた。門の上に、何か影が動

く様な気がした。確かに何か影が動いたと思つた。彼は眼をすがる様にしてみた。それは恐しい形相に違ないと思つた彼の想像を裏切つて、何だか物優しいもの様だつた。彼の好奇心は強く動いた。彼は、この事を在所に披露した。死生不知の人人は評定して、この朱雀門に見にゆく事にした。さて、皆のものが門の前に來た時、唯一人、自分から、すすんで先に登らうといふものがなかつた。で、彼が、矢つ張り、一等先に、登らねばならなかつた。彼は、蒼白い皮膚のたるんだ顔に、眼許り光らせて、一段、一段おぼつと登つた。心では、これを言ひ出した自分を、後悔の念で、鞭打つてゐた。皆のものは、その後につづいた。もし、この時、誰かが、おどけて、わアと叫んだら、皆んな逃げ去つた事であらう。

今にも鬼が喰ひ付きはしまいかと恐れ乍ら、彼が最後の一段を踏み終へた時、駭いた事には、門の上にはほそやかな一人の女が臥してゐるのみだつた。駭いたのは彼許りでなかつた。しかし、その駭きは、恐怖を意味してゐない、期待を裏切られた一種の阿呆らしさに近いものであつた、恐怖を意味した駭きを感じたのは女の方であつたらしい。彼女の眼の前には光る眼玉許りとび出してゐる幽霊の様な男を先頭に、不思議さうに眼を輝かして、すらりど男が並んでゐる。その強い眼差の光を一様にうけた女は、一寸、たぢろいた。併し、わるびれもせず、やをら身を起した。顔は白く血の氣を失つてゐるが、目鼻立の優しい、黒髪の豊かで軟かさうな、ほそやかな女房であつた。

双方の間に、妙に息苦しい沈黙と、凝視とが暫時、續いた。

くだんの男は、相手が女だつたので、いさゝか、勇氣づいたかの様に恚う口を切つた。

「お前さん、一体、誰だね」

「わたし、……わたし、盗人だよ」

女は臆しもせず、恚う答へた。

(何！ 盗人) 恚う心で叫び乍ら、皆の者は、鼻つ柱を折られた様な一種妙な表情をした。女は、夫れを面白さうに眺める眼差を、にくらしさうに俯せた臉の下で光らせた。

盗人ときいて例の男の心の中には、憤怒と、呪ひと、憎悪とが、火の様に燃えてゐた。その心を、彼の眼は語つた。

その眼をみた女は、これはあぶないと思つた。何とかしなければならぬと、彼女は、咄嗟の間に、思をめぐらした。

「ぢや、毎晩、灯をともしてゐたのはお前さんだつたのかい」

彼は、激して、唇を歪めながら、恚う訊いた。

「ええ」

と、打ちしほれた様に答へて、一旦あげて、男達をみまはした、眸を伏せた。それから

「疵をうけてゐて、身体の自由がきかぬので」

と言ひ乍ら、著物をまくつて、白い脛をみせた。(それは、たしかに、蓮葉な、そして、悪黨らしい仕草に相違なかつた。同時に、其處にゐる男達の度膽を抜く脅嚇でもあつた。) 白い太い腿の肉の凹む許りにまきつけた片には、滲み出た血が、黒ずんで乾いてゐた。それは光澤のない一種鈍い重々しい色であつた。人間の血にまざる邪淫がそこに滲み出た様だつた。皆は、ふんと血腥い香がする様な気がした。女は、その傷を、こと更、いたさうにして、一旦、起きあがつた身を、床に伏せて、呻吟した。そし



て、如何にも、しほらしく、あはれつぽく、男の哀情に訴へる様に、そして、さうすることに依つて、自分の強みを働かすために、女は、どうしても偷盗せねばならない身分になつた事、今は、傷をうけて、どうすることも出来ないで、此處に臥してゐるのだと訴へた。

傷ついた小鳥の寂しい羽撃をみては、誰でも、慫慂のこころを起すものだ。いちらしさうな女の素振に、先づ欺かれたのは、例の男だつた。盗難以來、特に、人生の無常を感じてゐる例の男だつた。彼は、火の様な憎悪も憤怒も、すつかり、忘れてゐて、眼には、涙さへにまかせてゐた。

これを見て、先づ、計略成就と心で微笑したのは、女盗人であつた。

彼は、たとへ盗難に依つて起された不幸にしろ、みぢめな貧のその日その日を送つてゐる自分の身にひきくらべて、この女盗人が、疵の痛手に苦しみ乍ら、人氣のない門の上で、幽かな灯をあびて、たよりなく、起き臥してゐる有様を想ひ浮べた時、彼の心は、同情で動かされざるをえなかつた。苦しみつゝ、惱みつゝ、流れゆく人生の諸相の一つ一つに對して、彼は、涙ぐましい様な愛を感じた。それは、單に、この女盗人に對するあはれみの情でなくて、地上に等しく住むものの虐げられねばならぬ運命に對する嘆きであつたかもしれない。

兎に角、この男の胸には、この男自身がはつきりと意識せぬにしろ、純真な心にふれては、清い涙とならざるをえない様な、狂ほしい程に切ない愛があつたのだ。その愛は、人生の至上の美であり善であるか、それは作者は知らない。併し、それは人生をつややかに輝すといふこと丈は知つてゐる。

女盗人はこの瘠せこけた男のとび出した眼玉に、優しい潤ひのあるのをみた時、心を動かされた。何だかしらない、柔かなものが、烟の様に、魂をとりまいた様な氣がした。しかし、次の瞬間、彼のこけ

た頬の蒼白い筋肉が、びりびりと痙攣的に動いて、眼玉が急速に廻り、今にも泣きさうな、怒つた様な顔つきをした時、女盗人は心で苦笑を禁じえなかつた。

と、突然、彼は踵をめぐらいて、逃げ隠れでもする様に、こそこそと階段を下り始めた。二三人の男が、それに續いた。

「あのあまつちよ、俺達を欺いてるんだ。ふんじばつて、おかみへつき出して下へ」と叫んだ男も、急に、口をつぐんで、その後を續いた。皆が、階段を下りて了つた。

京の街を、霧の様に匂ひ始めた夕闇は、この朱雀門の上へも、こつそりと漂うてきた。

女盗人は、ほつと、吐息をついた。しかし、その吐息の後には薄氣味の悪い微笑が漂うてゐた。女は、次第に遠ざかりゆく足音に耳を傾けた。それから、手を伸して、枕元の蝋燭をとつて、火をともした。

疵はちくちくといんだ。それにも拘らず、たとへば、ひきしぼつた弦の様な心で忍びこむ時の様子が、女の邪惡な心を唆つた。偷盗の際の、緊張し切つた心は、彼女にとつてはこの上ない愉快であり、この上ない誘惑であつた。作者自身の言葉で言へば、一寸動いても破れる緊張の心を持しての生活は、最大限の生活であり、最大限の生の享樂である。女は、恚うした言葉で、自分の心持を考へなかつたであらう。しかし、さう感じてゐたらしい、——道徳的正であるか否かは別として。

生命を賭しての生活であつた。其處には微塵の虚偽も許されない。妥協も許されないのだ。それは人間の言葉で言へば、邪と惡との生活であつたかもしれない。しかし、彼女にとつては、夫れは、彼女自身の心の奥から來る本能の強い衝動であるが故に、許された生活であつたらしい。牢獄の冷たさは、却つて、彼女の心をそつた。それ程迄に、彼女は刺戟を求めた。

女盗人は、自分の生活を、強い酒で酔はすことを知つてゐた。件の男は、寂しく清く泣く事を知つてゐた。

夕闇は静かに迫つた。

朱雀門の上は、ひっそりとしてゐる。唯、鼠が、女盗人の蠟燭の光をうけて、半面に濃い陰影の作られた蒼白い美しい顔や、疵をうけた白い太い脛をあらはに出してゐる凄い寝姿を、壁の裂け目から覗いてゐる許りだ。

蠟燭の光は、ゆるゝともなくゆれて、じつと音たてた。そのあとは、又、ひっそりとしてゐる。

一九一九、一一、五稿了

## 菅沼先生

宇田川貞一郎

今年の正月の事である。

前年の暮に自家に不幸があつたために、父のない私は、その後仕末に時をとられて、休暇中を、正月の気分も味はずに、濕つばい謹慎の中に過してしまつた。

確か八日だつたと憶えてゐる。其の日も、親戚へ御禮参りかなにかに行つて、歸途は、夕方近くなつた。高橋で、電車を降りて、あの橋の袂から、石油蒸気船に乗つた。

何時でも、この蒸気船は混雑するのだが、其の日は又恐ろしい程、一杯であつた。私は、辛うじて船首の方の入口に近いところへ、左右から押されながら、小さくなつて腰を掛ける事ができた。私は連日の過勞でぐつたりしてゐた。腰を下すと、船内の温氣が、何時の間にか私をうつらうつらさせてゐた。そのまま、なんにも知らぬ状態で何分か経つた。ふと眼を開けた。私とは反對の腰掛けの上に、五つか六つ位の女の子が、彼方向きにかしこまつて、硝子戸越しに外の景色を眺めてゐる。その子はメリンスの羽織を着てゐる。その模様が甚だ氣に入らない、どういふ料簡でこんな柄を見立てたものだらうと、少なからず不快に思つてゐた。女の子は、黙つて、夕方の川面と岸の上の人通りとを見てゐる。何氣な

く、私は、其の子の傍に、矢張彼方向きに立つて、出入口から外を見てゐる、脊の高い洋服の男の顔を見た。男の左の横顔が眼に入るや否や、私は驚いた。其の男は、十年前に小學校で御厄介になつた菅沼先生である。私は立ち上りかけたが、又腰を下した。若し人違ひだと、こんなごたくさした群中ひこなかでみつともないと思つたので、とにかく、もう一應、其の男の横顔を吟味した。どうしても、菅沼先生である。私は、帽子をとつて聲をかけた。

「菅沼先生」

男は此方こちを振り向いた。そして、その時立ち上つた私を見た。驚いた様な、訝しい様な表情が、先生の顔に浮んだ。

「おう」

と先生は、言つた。そして山高帽を脱いだ。

「僕です。砂原です」

先生の顔には、繻りの解けたらしい笑が描かれた。今度は、私の右手に持たれた帽子に眼を落しながら、

「あ、砂原さんでしたか。こりやどうも……」

「先生、御無沙汰しました。お久し振りです」

私は慎重に禮をした。先生も狭苦しい空間の中に會釋した。

「や、本當にお久しかつたですな、——そして、貴方は、今、ごちらへ……」

「四高です、田舎へ行きました」

「あ左様ですか。そりやどうも……なんですな、早いもんですな、もう高等學校ですか。私は、失禮

な話ですが、未だ中學に被居る事だと思つて居ましたに……ははあ、さうですか。そして何年ですか？」

「やつと二年生です」

「ほう二年生？ さうですか。すると第一發で高等學校へ入れたと言ふ譯ですな？」

「え、まあ辛うじてそんな譯です」

「なんにしても結構ですな。もう宜い……」

先生は髭を捻り始めた。それから又私の格好を見て言つた。

「今休暇ですか。成る程、何日頃まで？」

「昨日までです」

「ほう昨日？ としますと、どう言ふ譯合ひで……」

「雪のためです。去年酷い目に會ひましたので今年は自重してゐます。」

私は歸校遅刻の理由として、事實を語ると、又例の、聞き飽きた悔言くひみをきかされるのが、堪らなく厭だつたので、雪の故爲ゆゑにしてしまつた。

邊りの人々は、一寸自分達の方へ顔を向けたが、直き無感興な様子をして、元の方へ顔を還した。不快な、船の震動と音響の中で、先生と私とは話を始めた。先生は左の手に山高帽を持つて立つた儘、動かない。細い眼を時々瞬かせながら、悠ゆるりと靜かに物を言ふ。その語調は、力の抜けた、低い、耳の傍らを通り過ぎに行く様な聲である。先生の顔形は、昔とさして變りはない。扁平な鼻と、泥鱗ひしな髭とは、昔の儘、眞圓い顔に、貧相にくつ附いてゐる。身形みづかは明らかに立派でない、古ぼけた外套の下に、色の褪せた脊廣を着てゐる。會話の隙に一寸見た靴は、爪先だけに、僅かばかりの皮が付いてゐて、他の部

分は黒いズツクで出来上つたものである。先生は、なんとなく、糞れてゐる様である。

血色も大變悪い。眼の光も鈍つてゐる。そして、甚だ疲れたといふ様子である。

その中に、先生は、なんとなく會話に興味を失つた様になつてしまつた。過去に於ける師弟の關係が、さう無暗に、私の方から言葉を切りだして行くのを控へる様にした。勢ひ、私は、ぼつりくと、むしろ義務的にかげられる先生の間を待つといふ格好になつた。私は、なにがなし、ぎこちない氣ますさに襲はれて來た。私は黙つて、先生の摺り切れるばかりになつたチョッキの裾のあたりを見てゐた。ふと私は、或る事に氣が注いで、ハツとした。私は、始めて、まだ先生に席を譲りもしないで、平氣に構へ込んでゐる自分に氣が注いだ。私は、微に赧くなりながら自分の失態を深く愧ぢた。先生は私の頭の上から、窓硝子越しに、川の面を見てゐる。私は靜かに立ち上らうとすると、突然先生が話しかけた。

「科はどちらですか？」

私は、及び腰になつたのを、無意識に、又下ろしてしまつた。そして少し間誤着いて、

「今文科に居ります」

と、素氣なく答へた。

「は、あ、文科」

その言葉は、なんの感激も、餘韻もない空虚な肯定であつた。私は、その語調で、先生の胸の中を判斷した。案の定、先生はそれ限り科に就いて、良いとも悪いいとも言はなかつた。

先生は、又考へ込んでゐるかの様に凝つと外を見てゐる。私はどりつき端のない、ちぐはぐした心持で、不安定に腰を据えてゐた。その中に、先生と顔を會はしてから、もうかなり經つたのだから今更、

席を譲るのも變だと思へて來た。

暫くたつてから、小學校時代の同級生の淺沼君や橋本君や木原君はどうしたとか、貴方はあの時代から、お憐れさんだつたが案の定、一等先きに立つたとか、そんな事を至極面白くなさ相に話した。そして最後に獨語の様に緩くと靜かに言つた。

「皆、ごん／＼進むで行く」

さう言つて、先生は横を向いた。私は、その言葉の裏に、先生の、或る哀切な詠嘆が含まれてゐる事を推察した。その推察は、私が先生の舊恩に對して、十年間も無關心であつた事を、白日の様に明らかに摘發して感じさせた。私は急に仕末に終へぬ自責に襲はれた。その場に居るのが窮屈になつた。その窮屈の間に少しでも自分の心が慰められる理由を探さうした。そして、

「先生は唯今、どちらですか」

と訊いた。

「え？ 私ですか？ ちき近くですよ。大島に居ます」憊う言ひながら先生は、チョッキのポケットから名刺を取りだして、名前の側へ住所を鉛筆で走り書きして呉れた。私も學校の所在地にある下宿の在所を知らせた。その時、思ひ切つて私は先生に

「お掛け下さい。私が立ちませう」

と言つた。

「否、私は立つてゐた方が好いです」

先生は動かなかつた。私は仕方なく又腰を下した。そして考へ込んだ。

菅沼先生は、私が尋常六年の時の受持の教師であつた。出来る先生だつたかどうかは、よく氣が注がなかつたが、何時でも、大抵考へ事ばかりしてゐる先生であつた。そして物を考へる時や、道を歩く時には、必ず眼を足元に落して泥船髭を無暗に捻る癖があつた。學校の教師をする外に、何か大陰謀でも畫策してゐるかの如く、毎日毎日髭ばかり捻つてゐた。その髭は尖端が鋭い錐の様に、どがつて、勢よく下頬の前へ突きでてゐた。先生には、髭を捻る外に、莫迦丁寧に、涙をかむ癖があつた。念入りに洗ひ、そして念入りに折り疊むだらしいハンケチを、ズボンのポケットから出して、秀でてない鼻をおさへて、首を左右前後へ、痲癩持的に、邪慳に振りながら涙をかむだ。其の格好は丁度、猫が、骨放れの悪るい肉を、無理矢理に骨から撪りどらうと、専念に努力する様であつた。それは、まつたく長い時間をとる所作であつた。先生の双眼からは、不意で、急激な涙腺の壓迫のために、涙がでてきた。それでもまだ先生は「チン、チン」涙を絞りだしてゐた。

先生はその時分、キチンと整つた身形みづかひをしてゐた。私達はよく、菅沼先生はハイカラだと噂し合つた。生徒に對しては、大抵物優しい先生であつた、けれども怒る時は、眼を三角形に睜ひらつて藤蔓の鞭で、びしやりと机を敲いた。非常に快活に、面白さうに生徒達と調戲ける事があるかと思ふと、或る時は又、無暗に押し黙つて考へ込んでゐる様な風であつた。先生は、よく、

「皆んながいまに偉くなつて、お金を蓄めると自動車に乗つて……」

と言ふ言葉を生徒に話した。私は、自分も今に偉くなると、自動車に乗るんだと思つた。それから先生はよく依怙量負をした。それは主として、先生のお宅へ贈物をするか、しないかに歸因してゐたさうであ

る。よく贈物をする家の子は、良い點を貰つたり、級長にさせられたりした。私はその時分、先生といふ種類の人と個人的に關係をつける事を、非常に氣味悪い様に感じてゐたから、ついで一遍でも、先生に贈物する事などはなかつた。私は、その事實から、自分は先生に餘り可愛がられてゐないと思つてゐた。それでも私は五年生の時の様に、矢張、級中で一番上に座つてゐた。

何時かの唱歌の試験の時の事であつた。

「楊子江」といふ唱歌であつた。私が歌はせられる順番になつて立ち上つた。最初の一句を、先生がオルガンで奏いて呉れた。私はそれに蹤いて唱ひ始めると、先生はオルガンの手を停めて聽いてゐた。唱ひ終つた時、先生は鉛筆をとり上げて、

「8点だね」

と言つて、エンマ帳へ記けやうとした。その時分、そんな点を貰ひつけなかつた私は驚いてしまつた。そこで、

「先生、もう一度唱つて見ます」

と大きな聲で言つた。他の生徒達は一齊に、私を注視した。先生はオルガン越に、私の顔を見据ゑてゐたが

「なに、もう一度唱ふ？……」

左様か、そんなら唱つて御覽」

と言つた。私は大いに骨を折つた積りで、又一章ばかり歌つた、併し堅くなつただけ前よりも拙ちがかつた。のみならず第三句の高い調子から、低くなるどころへ唱ひかかつた時に、突然、咽喉へ唾液が入り

こんだために、聲が變に途切れてしまった。

「しまったことをしたな」

と思つてゐると

「矢張8点だね」

と言つて先生は鉛筆をとり上げた。私は大きな自責を感じながら赤面して腰を下した。

それからその年、私の父が亡くなつたが、その折には、長い悼辭を呉れたり、副級長の喜夫さんと近所の長吉君と二人を、級の代表としてお悔に來させて呉れたりした。その悼辭には、男子が泣いてもいい時は、両親の死んだ時だけだ。君のお父さんは亡くなられた。嘸ぞ悲しからう、うんと泣けるだけ泣いた方がいい、といふ様な事が書いてあつた。

六年生も終り近くなると、先生は是非私に、中學へ入れと勧めた。私はその時分、高等の學校へ入らうなんて言ふ心は毛頭なかつた、唯さう認めて呉れる部分だけを喜んで、入學試験を受けるや否やは、よく熟考して後にしますと言つて置いた。けれど、私に氣がなかつたので、おいそれと返事をしなかつた。私の母も、親類も、あまり高等まで通はせ度くない決心だつた。それは私の病身だつたといふ故爲もあるが、父が亡くなつて淋しかつたといふ故爲もある。それで同級の六七人が、府立第三中學校の入學試験準備を始めたのに、私は、入るのか、入らないのか、決定しなかつた。

どうく菅沼先生は、或る日私の家へ來られて母を説いた。私は母が謝る事を祈つてゐた。

「何分、父もなくなつた事ですから、何時までもだして置けませんので……御盡力は誠に有り難うございますけれども……」

と言ふ調子で、母は婉曲に辭退した。

「それではどうも仕方がない。併し家へ置いてもなんにもなりません。今年に限るといふ事もないんですからよく御考への上、試験だけでも受けさせて御覽なさい」

先生は母に恚う言つて立ち上つた。

歸りしなに、先生は私に向つて、

「男は慾がなくちやいけない。なんでも有りだけの才智を働かせなければ駄目だ」

と言つた。

私は結局、六年を卒業した時、試験に應じなかつた。同級生で七人ばかり受けたが、淺沼稻次郎といふ伊豆の三宅島から來た、歩く時天ばかり見て歩く子が唯一人及第した。

私は高等科へ進んだ。

その時分から、菅沼先生は、私の小學校から何處かへ行つてしまつた。校長先生とどうとかしたいといふ噂が立つた。併し私は眞實の事は未だに解らない。兎に角、先生を髭を捻り捻り、花崗石の校門から入つて、運動場の眞中を速な足調で突き切つて、正面の玄關に没する姿は、もう見られなくなつた。其後、先生は寺島村の校長になつたとか、何處とかのなんとかになつたとか言ふ噂は時々耳にしたが、何處に居るのか解らなかつたし、又強ひて尋ねる事もしなかつた。明白に、忘恩の弟子である。

私は高等一年修了後、府立第三中學へ入つた。中學へ入つて以來、到々先生に會ふ事はなかつた。友達に聞いても、誰として明確に先生の居所を答へる者はなかつた。今日恚うして、突然、蒸汽の中で逢ふのは、正に奇遇である。

私は今更の如く、無沙汰と忘恩とを詫びた。先生は、歪んだ様な微笑を浮かべながら「いゝえ……」とか「なあに……」とか、そんな短い言葉で返事をしてゐた。

暫く経つてから、私は「先生、其後どちらに被居いました」と尋ねやうとしたか、ふと止めにした。先生の今の様子が、さう尋ねられるのは、先生自身にとつて、愉快でないらしく思はれたから。先生の髭は昔の様に尖つてゐないし、姿もハイカラでなかつた。

「あなたは經濟科へ行く氣はありませんか？」

先生は不意に慍う訊いた。

「趣味が合ひませんか？」

私は一言で答へた。

「はあ、左様ですか……」

先生は、其處で一寸句を切つた。が、又續けた。

「併しですね、世の中は、趣味や感興ばかりで渡つて行かれるものぢやありませんよ、意地さへ殺さなきゃならない時がありますからね」

「そりや左様でせう。しかし……」

私は言つたところで仕方がないと思つたので、その儘、口を噤んでしまつた。先生も私も、又暫く黙つて別々の事を考へた。

二人の間には、もう話題もなくなつてしまつたやうに思へた。けれども先生の方で打ち解けて呉れば、

幾らでも湧いて來る様に感じた。が先生はそれから本當に無口になつてしまつた。私は先刻の心持を又感じだした。それで、訊かうとする意志以外の意志で。

「奥様さんやお子さんは？」

と言つた。

「皆どうやら壯健でゐます」

「お子さんは幾人ですか？」

「故郷こくにに一人、今家に三人居ます。これは家に居る中で一番下の奴です」

と言つて、私が先刻、厭な柄だと思つた羽織を着た女の子を指した。私は意外であつた。又軽い自責の念を感じた。其の子は自分の噂さをされてゐるのを知ると、振り返つて

「お父うちやん」

と甘えた。其の顔は蒼褪めて、左の脚が大分縋帶されてゐる。

「足をどうなすつたのです」

「え、一寸怪我をしましてね」

先生は外套のポケットから、恐ろしく大きな巻煎餅を一本だして、其の子に持たせた。女の子はそれを舐りながら又景色を見はじめた。

蒸汽が終點に着いた。

河岸の家々には灯がついてゐた。河岸を行く人々の歩調が妙に慌しかつた。黒い風が黒い空から吹き落ちてゐた。八阪橋の袂で先生と別れた。別れしなに私は

かよたれ

「先生、お宅へ上つてもよろしいでせうか」

と訊いた。先生は驚いた様に私を見て、苦笑に似た笑を泛べた。そして、緩く

「え、どうぞ」

と言つた。それから、

「穢い事は知れきつてゐますね」

と念を押す様に附け足した。

「今夜は御迷惑ですか？」

先生は明らかに困惑の色を浮べた。

「さあ今夜は………實は妻が一寸臥つてゐましてね。それに家で鶏なんかやつてゐるものですから」

私は、これは悪い事を言つてしまつたと後悔した。けれども何故先生が私をさう取扱ふのか理由は解らなかつた。

「明日になさつて下さいませんか？ がしかしあなたはもう金澤へお歸りなさるのでせう。雪は果して、そんなに酷いんですかね」

私はすつかり先生の心を讀んだけれど、もう後へ退けなかつた。

「學校の方は一日位遅れたつてどうにかなります。では明日伺ひます。何時頃でよろしいでせう？」

「さあ、三時半過ぎれば家に居ます。それまでは學校に居ます、あなたおいでなさるなら學校へおいで下さいませんか、家はどうぞも………」

「え、ごつちにしますか、私のいい方にお許し下さい。とにかく明日お目にかゝります」

恁う言つて、先生に別れた。

先生は古ぼけた外套の脊に、女の子を負つて、雨の來さうな夕暗の中へ消えた。

其の翌日は、朝から酷く雨が降つた。

四時頃、私は二三の手土産を持つて、大島の、教へられた先生の宅へ出かけた。

路は非常に溼つてゐた。半分道も來ないうちに、私の足袋は泥だらけになつてしまつた。大島へ入つた頃には、雨脚が濃くなつて、早い日暮を誘つた。兩側の家並の所々にある軒燈の乏しい光が、糊の様に粘りつこい泥濘の中へ喰ひこんで行く私の亂れた足元を照した。雨脚が白く見えた。傘を支へて行く手は、寒さのためにしびれて來た。しかも、先生の家はなかく見當らなかつた。先生の言つた様な四つ角は、もう幾つも過ぎたのに、左側に先生の言つたやうな、新しい家は建つてゐなかつた。

すつかり、夜になつてしまつた。冷めたい雨が、冷めたい風につれて、急しく落ちて來た。私は度々、人に尋ねた。けれども判然と答へて呉れるものは誰もなかつた。大きな道が十文字になつたところへ來た。左の方に一棟長い家並がある。家の前には、水の溜つた田が白く光つてゐた。

その長屋を一軒一軒、見て行つた。軒燈がないので、標札の有無さへ判然と解らない。丁度、真中頃へ來たところに、水道があつた。そこで、女が水を汲むでゐた。私はそれに訊いて見た。

「此處ですよ」

と、眼の前の戸を指した。軒を透してみると、其處に、「菅沼寓」といふ標札があつた。戸が閉されてあつて、その隙間から、中の乏しい光が洩れてゐる。私は戸を軽く敲いて「御免なさい」と言つた。な



んの返事も無い。戸を開け様として、もう一度この家は今留守かどうかを女に訊いた。いゝえ、被居いますよと返事された。私は戸をあけやうとした。あけたての工合の悪い戸で、ガタビシ音ばかりしてゐて、大變骨が折れた。戸を開けて中へ入ると、一種の臭氣がした。頭の上で、鶏がクククと咬いた。一坪ばかりの土間である。上り口には、破れた障子がしまつてゐる。

その障子が中から開いて、十二三の男の子が顔をだした。後から来る灯の光が、その左の頬を明るくした。男の子は、柱と障子との間に、立ち膝をしてゐる。そして、

「なんですか」

と言つた。

「先生は御在宅ですか」

と訊くと、不意に、力のない女の聲で「居りませんとお言ひ」と命ずるのを聞いた。男の子は、その通り

「居りません」

と言つた。

「何時頃、お歸りになりますか」

男の子は、顔を座敷の方へひつこめて、後を振りかへつた。「今夜は、晩くなりますつて」今度は左様言ふ女の聲がした。男の子は

「今夜は晩くなります」

と其の通り言つた。

私は一寸、困つた。私は、そこいらを見廻した。餌箱だの、草の切つ端だのが、散らかつてゐた。私の名を告げて、お母さんにお眼にかゝり度いと言つた。男の子は

「お母さんは病氣なの」

と答へた。しかし、部屋の中から「お上りなさいつて」と命ずる聲をきいた。

「お上りなさい」

と言つて男の子は身をひいた。私は足袋を脱いで上つた。障子の蔭に、奥様は、垢と膏とに汚れた体を、むさ苦しい布團にくるめて横になつてゐた。枕元に、薬瓶や、玉子があつた。その部屋は六疊で、三方の壁には、着物や古い袴や、帽子がかかつてゐた。玄關(?)の脇の三疊には、十二三と七八つ位の男の子が二人で、火鉢を圍んで私を見守つてゐた。

私は昨日の事、御無沙汰をした事、病氣見舞の事を一時に申し述べてしまつた。奥様は感冒だと言つた。熱があつて苦しいと言つた。奥様は、深く夜具にくるまつたなりで、苦しうな息づかひで、昔の事をぼつり／＼話した。けれども何故か、私達の村を、去つてから後の事に就いては、なんにも語らなかつた。私も強いてきかうとしなかつた。奥様は時々、痛々しい咳をした。そして、話をしてゐる中に、涙を流した。よく、私が尋ねて來て呉れたと禮を述べた。

「二階が、あの居間です。二階でお待ち下さい。ちぎ歸るでせう。……………」 正夫」

大きい方の子が「はい」と返事をした。

「お茶をお沸し」

私はそれを止めた。とめたけれども、男の子は二人で、哀れに小つぼけな火のかたまりを、兩方から

代り番子に吹きはじめた。ふくらんだ頬に赤い火が映った。

「先生は、何處へ行らしたんですか」

「一番小さいのがね、あなた……」

と言つたとき、奥様は急に咳いて來た、止んだ後は、眼を瞑つて黙つてしまつた。すると大きい方の男の子が

「照ちやんをお醫者へ連れて行つたの」と言つた。

「あ、あの蒸汽で？」

「え。」

「毎日、行くんですか？」

「え」

「照ちやんは、脚をどうしました？」

「梯子段の途中から、落つこつて挫いたの」

私は胸が一ぱいになつた。黙つて、狐色になつた疊を見詰めてゐた。外には、雨の音が、一入激しくなつた。私は、その激しい雨の音を聞きながら、沈痛な顔をして女の子を背負つた先生の姿を思ひうかべた。

暫くして、二人の男の子の方をみると、赤くおこつた火のかたまりの上に、煤けた藥罐がのつてゐた。小さい方の男の子の髪の上に、白い灰の粉末がのつてゐた。

「あなた達はお丈夫ですか」

と訊いた。二人とも、ほつくりをした。二人とも可愛らしい顔をした子であつた。

先生はなかなか歸つて來なかつた。雨が小降りになつた。私は奥様を慰めた。それから、子供達に、  
「温和しくて、お惻憐ですね」と言つて歸つた。

# 或る秋の夜の幻想

— 未定稿 —

松下問童子。言師採藥去。只在此山中。雲深不知處。——唐賈島。「訪道者不遇」

各務 虎 雄

朝戸出に

羅宇屋の笛の

かすれつゝ

秋はかなしや

大きみ空も

ふたゝび慎ましやかな秋が、素波のおもてに煌き躍るときが来た。萬象の瞳をも突き刺すであらうその痛い煌きは、けれどもひそくとして、微かないまづかひをしてゐるのだ。

草の葉に力は竭きた。野の花はしげげなく藉れた。さびしい秋だ。さうしてまた痛ましい秋だ。

晴れわたつた穹窿を仰ぐと、そこには、一目見ただけでひとりでに涙をにじませる真深い緑があつた。いつまでも瞞めてゐると、睫毛の下には、空の色を一つに聚めた、真珠よりもまだ匂はしい、極めて小

さな透きとほる玉の雫が、何處からともなく跳び出して来て、それが數かぎりなく連ぎあはされては、滑らかに浮動した。その浮動は、その時／＼に従つた規則的方向に、一つ／＼の雫が、瞳を中心として、半圓を描きをはるとともに消えた。さうしてまた、あとから／＼と、別の新しい雫が動いては消えた——

この淋しさの限りなる秋。この痛ましさのかぎりなる秋。——無言のうちにも、癒し難き衰への見ゆるなかに、まことの自然の愛しき心を、啜りなく小さき蟲は、物蔭にひそんで、ほんたうに有りのまゝにかたる。

蟋蟀は彼の家のまはりでよく鳴いた。

しど／＼と降りまさる小雨の夜には、世にありとある都ての生きものが、残らず呻きいだす哀切のかぎりのこゑかと思はれた。——可憐なうたよ、魂の髓にまでも徹する悲調のうたよ……

あるときは、また、晝にもないた。

ひと本の秋海棠が、丈たかく伸びた蔓草のすき間から、瘦せたさびしい莖のさきに、うす紅の痛々しい乏しい花をつけて、弱められた午さがりの陽の外光に、音をも立てずかすかに顫へてゐる裏庭の片隅は、晝と夜との差別を完全に消して、それが、この繊細な典雅な感情と聲帯との持主である蟋蟀に、いちばんいゝ住家だつた。

その住家で、可憐なこほろぎは、夜にもまして、深い感傷のかぎりをつくした。

祈らまくも

愛しき蟲かな

こほろぎは

夕かたまけて

泣きやますけり

彼はその蟲のうた聲を、聊かの成心をもまじへずしては聞くことが能きなかつた。さうして、貧しいながら、こんな歌をうたふとき、あたまでは、毎も、翠色の翅をもつた小さな蟲が想像された。その蟲は、その愛らしい翅をもつて、透き通るやうないゝ色のからだを曳きすりながら、地面ちかく飛んだ。しかし、それは蟋蟀の姿ではなくて、すいつちよの姿だつた。ほんたうの蟋蟀は、飛ぶことの能きない油色の蟲である。彼はそれを知らないのではない。だが、彼に、すいつちよの幻をふり落すだけの衝氣がなかつたのだ。何故なら、それはあまりにいゝ色だつたから。ほんたうの蟋蟀の姿は、すいつちよの姿ほごいゝ感銘を彼に與へはしないで、却つて長い鬚をもつた褐色の醜い竈馬（おほろぎ）を思ひ出させたか  
ら。——かうして彼はすいつちよの姿を想ひ出し、それに蟋蟀といふ名をあたへて微笑んだ。

童話めいた空想を、よくこの蟲のこゑを聞くことによつて惹きおこされた。

そのころの彼の「幼き人々へ」と傍註されたる詩劇ひとつ。

## 劇詩 秋の歌

(未定稿)

登場人物

こほろぎ雄

こほろぎ雌

其他多數

子供甲

子供乙

子供丙

舞臺

時、九月のをばり、黄昏に近きころ。  
所、清冽なる水のながるゝ大河の河原。

## 第一場

千草のなかにて蟋蟀あまたすたく。その歌聲は、かの Verlaine の 'CHANSON D'AUTOMNE' そのまゝ。但、ソングには、原詩のかはりに、川路氏の和譯をかゝぐ。

秋の日の

井オロンの

聲ながき獻秋、

もの倦き

疲れ心地に

わが胸を痛ましむ。

胸もふたぎ

おもは蒼ざめ、

鐘の音きけば今さら、

過ぎにたる昔さへ

おもはれて

われは泣くなり。

ああ吾は

心なき風に追はれて

こゝにかしこに

さだめなく

飛びも散りかふ

落葉かな。……

かよたれ

或る蟋蟀の雌 (ふと唄ひやみて)

あなた今あたしの唄をきいて、

その蟋蟀の雄 (思ひ入りて)

淋しいうただね。

雌

え。

(とのみにて沈黙)

雄

汝が唄の

かなしきまづに、

さら／＼に思ひぞつゝのる。

美はしき女王、きりぎりす、

寶石よりも奇しき翠の

透きとほる、その翅のいろ……

雌

あなた……

雄

静かに。

かよたれ

でも、あなた……

雄

うるさい！

(雌だまる)

日並べて、五月雨ふりて、  
うすお納戸のかなしみの  
帷子かたびらを着る族ぞうならぬかと  
思はれし

夕べなりしか。

そはまことよき名なる、

まじりざりす、

わが家やきたりて、

「さびしければ、いざ吾部屋あべぬち  
遊ばんに、……」

雌 (悲泣しながら)

あなた、

雄 (そしらぬ風にて)

そのころなり、

Dante のじつへ、わが夢ゆめこめ、

Amor のふたごの夢、

すへゆらなむじ。

„Froh schien er mir; ich sah mein Herz ihn tragen  
In seiner Hand; und seine Arm' umschliessen

Die Liebste, schlummernd, eingehüllt in Linnen.  
Dann weckt' er sie, und liess sie, die voll Zagen,

Demüthigle mein brennend Herz geniessen.  
Drauf sah ich, wie er weinend ging von hinnen.“

しかすがに戀こひしをのふむ……

雌 (堪へずなりて)

あなた、よして頂戴。

あたし、もう、かなしくつて……

雄 (不興げに)

うるさい！

雌

かなしくつて……

雄 (雌には頓着なく調子を更めて)

落魄の

Genena の國の

あしき相に、

禍神の悔と哀愁は

常夜ゆく。

あゝ天も地もよしなし、

夕されば

瘦せのまされど、

さりとも、待たれし人の、

問はずもなりて

久になりしか。

雌 (泪を拭ひながら)

あなた、随分勝手ね、

えらさうな理窟はつかし……

雄

だまれ、俺には俺の権利がある。

(つまげて)

つくぐと、

物の葉などに觸りつゝ、

秋くるころの夕べしも、

狹庭うづみて

「秋の歌」

奏づる頃ぞ、

わがために、

女王は逝ぬと

きんたりし。

あゝ、運命、とほに哀しや。

(ふたゝび調子をかへて、夢みるごとく)

むかし聞く、

ヘロナの市の、

離宮の皇子とも見えし、

Montague 家の

若者 Romeo だ、

たまゆらのいのちさへ上げて、

愛しく氣高き

Capulet 家の

Juliet の

熟睡を死としあやまりて、

血潮に染みて

斃れふしゝか。

その悲しさの戀のこゝろや。

(しばらく間)

あか〜と、

秋はつれなく、

陽のもえて、

さびしきものを、

はふれ落つる

涙のひまに、

思ひいづ、儂はかなきひとの、

夢のいのちや。

(語りをはりて、しだいに沈みゆく)

雌 (嫉妬ぶかく)

あなた、

かよはれり

それであたしを疎んずるの？

いゝわよ、あたし、悲しくつて…… (一葉集)

(泣きながら)

どうせあたしは醜女しうにょですもの。

この油色のからだ、

このいやらしい、斑あざのある黒い翅……

このとき、上手より、子供のうたこゑ次第に近づく。

蟋蟀のうたこゑ、話こゑ、すべてハタと熄む。

第二場

蟲籠をもつ子供甲乙丙。

一同 (ふしまはじおもしろく)

去年こぞ蔦の葉の

かげにきて

うたひいでしに

くらぶれば

ことしも同じ

しらべもて



かはるふしなき

きりぎりす……………(一葉集)

子供乙 (うたをやめて)

うちの父さんは言つてゐた。

そんなにお前が退窟なら、

蟲でもいゝから採つておいで――

自家の父さんはさう言つた。

それゆゑ僕は捕りにきた。

だのに、

ほんたうにしやうのない蟲つ虻!

一たい何處へ行つたんだらう?

子供丙 (乙についで)

わたしのうちは傘屋、

みんなが面白い唄をうたつて、

轆轤をまはしてくるため、

そんなに淋しくないけれど、

うちの母さんは蟲がすぎ、

(大きく息をついて)

けふも今日とて、隣の小僧さんが、

お前の母さんは菊石顔、

おまけに、もひとつ、馬つ面、

あれがほんどの芋蟲だつて、

隣の小僧さんが言つてゐた。

(ふき出しさうになり乍ら)

その芋蟲の母さんが、

毎日わたしに嘸鳴りつける。

そいつが癢に障るので、

これから蟲を捕つて行つて、

その芋蟲の母さんの、

まがつた鼻に擲げつけてやる。

一 同

ワツハツハ……

笑ひ止みて、こほろぎを捜す。

こほろぎを捜す態よろしく。

しばらく間。

子供甲 (二三匹の蟋蟀を示しながら)

るたぞゐたぞ、  
かあいらしい蟲がゐた。

子供乙 (走りよりて)  
お見せ。

(甲の捕りたる虫をかぞへて)  
なんだい、これつぼつちか。  
すてつちまへ！

乙、甲の虫をたゞき落す。甲乙、しばらくいさかふ。

第三場

甲乙、いさかひを終りたるのち。

各々二三匹つゝの虫を得たる子供甲乙丙、ふたゝび睦じく、下手より退場。

のこりの蟋蟀

取亂されたる艸の間にて、ふたゝび Veraine の CHANSON D'AUTOMNE の  
悲しきうたのこゑをばりあぐ。

秋の日の

ギオロンの

聲ながき歎<sup>うたかた</sup>歎、  
もの倦<sup>う</sup>き

疲れ心地に

わが胸を痛ましむ。

.....  
.....  
.....

—幕—

(この一篇の詩劇は、詩とか劇とかいふ嚴めしい名稱を値するには、あまりに幼稚な、貧しい物であらう。けれども、すべてに倦怠を感じてゐた、その頃の彼の、少い作品のうちでは、彼の思想と、彼の觀照に於ける陶醉とが、如何なるものであつたかを傳へるためには、これよりほかに、何も探るべきものがなかつた。)

彼は、また、よく、蟋蟀に話しかけた。

——おつ、こほろぎよ。

どうかお前の悲痛な曲を、いつまでも奏でつゞけてゐておくれ。透き通るやうな小さい胸が、木乃伊になつて、翠色のその翅が破れ果てるまで、どうかお前の整つた挽歌を、奏でつゞけてゐておくれ。

——おつ、こほろぎよ。

——さきも早く、俺の靈を狂はせておくれ。……

だが、空想での話相手は、翅と跡だけはすい、つちよであるが、その聲は、りうくと鳴く本物の蟋蟀だつた。

かうして、よく彼は空想の蟋蟀に話しかけた。けれども蟋蟀は何らの意識もたないかの如く、彼の心の奥底から逆り出る純淨な魂の叫には、少しも耳を傾けようとはしなかつた。さうして日毎夜毎に鳴き鳴いた。

\*

白刃もて

胸を刺されし

おどろきと

かなしきひとの

ねがひは云はむ

—富田碎花—

ゆふべのことを思ひ出してみると、さうしても、彼は、寝つかれなかつた。ゆふべ、彼は、この秋から急に近づきになつた或人の奥さんから、久しい昔から彼の *Fiancee* ともいふべき戀人であつた Y 子が、——

Y 子はこの春、學校を出たばかりだつた——來年の春、G 市で歡囃の筵を開くさうだと聞いたのだつた。

「Y さまが、近いうちに、お嫁にいらつしやるさうでしてね。」

何んにも知らないその奥さんは、つい先日、歸國したとき、G 市で、彼女には外姪である Y 子の、この所謂慶事を、話に聞いてきたのだつた。奥さんは、彼が Y 子の義理の従兄であるところから、あんなことを告げてくれたのでもあらうが、奥さんの思ひとは反對に、——慥かさうだと彼は思つた——彼の心は亂暴にかき攪られた。

彼と彼女との間は、たゞ、時折の邂逅と、慎ましやかな彼女の微笑とが、何となく、彼に、懐かしさの情を煽り立てたぐらゐのところだつた。彼は、自分が一人の女性に、ほんたうの意味での知己を得ようために、且又、愛人をもつといふ架空的な微かな矜持のために、何時の間にか、彼女を、戀人らしく、*Fiancee* らしく、心のなかで取扱ひなれてしまつたのだつた。嚴正な言葉でいへば、僅か、肉身的な單なる親しみを、相手が女性であればあるだけ、他の者に對するよりは、餘計に有つてゐたのだと、言ふべきであるかも知れない。

その Y 子には、この八月の終に、ふとした衝動から、痛切な悲戀の味を味ひ得るであらうために、*démoniaque* の呪咀の文句をふりかけた。それ以來、彼女との間の想出を、たゞひと時の幻の快樂として、完全に忘れてしまつた心算であつた。さうして、半月ばかり前に、この地に於ける G 中學會の席上で、この春まで同じ會員の一人であつた E——E はこの夏、彼の父に、Y 子を妻る媒人たるべく願つた事が二度まであつた。併し、彼と彼女との間を知つてゐる父は、E の要求を、曖昧のうちに握り潰した——が、

G市で近く家庭をもつと聞いた時にも、それほど心を時めかせはしなかつた。それが、あの奥さんの宣言——残酷な宣言だと彼は思った——と、Eの噂を考へ合せてみると、彼は、俄かに驚惶し、狼狽しなげればならなかつた。やつぱり、彼の情熱の王國の片隅には、彼女のいちらしい情の記憶が、閃きを見せてゐたのであらう。

「Yさまが、近いうちに、お嫁にいらつしやるさうでしてね。」

そのゆふべのことを思出すと、どうしても彼は晏如として睡に落ちてゆくことが能きなかつた。

はじめ、彼の眼の前に、寶石のやうに美しく光る、可憐なY子の瞳が浮んだ。熾烈な靈感力と惱殺力をもつ、中肉の彼女の、少し面長な白いかほが、淋しく笑つた。……

「許しておくれ、Y子。俺がわるかつたんだ。——Y子、俺は、この俺は……。どうか、もう、そんな淋しい潤んだ瞳で、瞞めてはくれるな……」

幻が消えたとき、彼は謔言のやうにかう叫びつづけた。けれども、ふしぎなことに、過ぎ去つた日の熱愛の涙は、彼れには湧いて來なかつた。——

彼女を憐れむことは、やがて彼女を、嫉妬ぶかく憎むことだつた。

「さつと、Y子は、Eの妻となるべく奔つたんだ……」

彼はじだんだを踏んで、のたうちまはつた。

「愚かなY子！ 蟲虻にも嗤はれる。惡魔！ 偽善者！ くだばつちまへ！ 呪はれる！ 畜生。根も葉もないまでに、野たれ死にに死ね！……」

武郎氏でも書きさうな鋭い喚きが、ひとり出に咽喉から迸り出た。彼は、自分の精根がへとくにな

つてしまふまで、吠えに吠えた。——

ふた、びY子が憐まれてならない時が來た。そのとき彼は更めてEを憎んだ。

彼は、Y子とEとを結びつけて考へてみた。さうして、Eが、何かの權威的な手段で、Y子を獲たのではなからうかと疑つてみた。すると、その疑は、たゞの疑では濟まされなくなつた。

——外のひとには嫁きさうもないY子……九月の始めには別にそれらしい容子も仄かさなかつたE……

……こんなにも早く家庭をもつに至つたE……Y子……E……Y子……悲悶……暴虐者……

Diabolist !…… devil !…… demon !……

——彼の思ひの底は、あの氣どつた、氣障なEの映象に對する呪の叫で一杯だつた。Y子の悲悶——そのとき彼はさう信じた——を想像——慰藉する言葉は、闇のうちに姿をかへて、反對に荒まい暴の巨火となつて、慘酷にも、Eの靈を肉を骨を焼きつくしてしまひさうだつた。さうして、やがて逝く秋の夜更に、生くべき力と温度とを失ひ盡してしまはうとしてゐる一匹の雌の蚊が、臥被ふたせにくるまつた彼の頬つべたのあたりを、ほそくとした泣ごゑを絞り出して往き來してゐたのに、彼は氣がつかなかつた。

彼が、自分にもかうした呪咀なごといふ démonique な本能が湧きたち得るのだといふことに氣がついたときは、彼が、ほんたうの自分の憎しみや哀愁を、まつたく忘れてしまつた時だつた。その時、少し誇張して言へば、彼は何となく無上むじやうに嬉しい氣がして、めづらしくも心からの愉快を覺えた。

それから、彼は、日本の現在の道德の缺陷を考へてみた。彼には、くだらない人々が、誤つて傳へたのであらう、微の生えてしまつた、古い昔の、お伽話にでもありさうな、子供たらしのやうな、千篇一律の規範が、考へて疎もとするほど疎ましかつた。

社會制度、特に結婚制度が呪はれてならなかつた。

「元來結婚などいふことは、一家若くは國家の安寧秩序を害しないかぎり、その當事者の愛といふものを尊重しなければならぬ筈だ。今のまゝで進めたら、時代錯誤に陥らなければならぬぢやないか。われらには、眞の意味での自由だけは、ほんたうに必要なだ。」

しばらくして、何だか彼の窓の近くで激しく鳴いたものがあつた。

「ギャア——オ！」

慄へ上りさうな鋭い聲だつた。その聲に驚いて、思はず彼は跳びおきた。しかし、彼は、それが何の叫であるか、判然知らなかつた。

障子を明けてみると、——彼は寝るとき雨戸を閉てなかつた——外はまつ暗闇だつた。星の瞬き一つすらなかつた。

鳴いたものがそこにゐた。それは、のそくと物干の上をあるいてゐた猫だつた。全身まつ黒な大猫だつた。その猫は、彼の姿を見ると、鳴きもせず、ひた歩きにゐるいた。歩きをまつて、あらためて彼の顔を見するた。うす黄がかつた眼玉のなかの眞黒な瞳が、電燈の光をうけて、物凄く輝いた。さうして、また一聲ないた。

「ギャア——オ！」

ぎよつとして、彼は、全身總毛立つた。

ある夜。それは詩によろしい淡い月夜だつた。

そのころ、滅多に詩の心を唆られたことなかつた彼も、その夜は、ふしぎに沸き立つ情熱の力を感じた。

かぎりなき倦怠の

曠野のなか、

そこはかどなき雪

砂のごとく煙く。

空は銅色にして

光もなし、

生けるがごとく

死せるがごとき月の色。……

Verlaine の「忘られた小唄」の第七章（川路氏和譯）をよんでみると、氣の所爲でもあらうか、何處からか、可愛いこゝろが、それに應じて唄つてゐるやうに思はれた。

「雪の上に輝く月の色！」  
彼はじつとしてはゐられなかつた。

.....  
死せるがごとき月の色。

暗き雲のごとく

たな曳く靄のなか、

ま近き森の檜の木立は

灰色におぼろめく。

空は銅色にして

光もなし、

生けるが如く

死せるが如き月の色。

息苦しげに啼く鳥、

また汝瘦せたる狼

惨ましき北風に打ちつれて

汝いましにくるは何ものぞ。

かぎりなき倦怠の

曠野のなか

そこはかどなき雪

砂のごとく煌く。.....

それから三十分経たないうちである。怖ろしく青白い瘦せこけた彼のかほが、彼より二つか、或ひはそれ以上も年上であるかと思はれる一人の男と並んで、とある小路に見られた。

下弦に近い月の光は、ぞつとするほど冷たかつた。さうして、「もうやがて冬が来る」といふ、淋しいやうな感じを彼にあたへた。彼はふたゝび何處からか聲のないコーラスを聞くやうな氣がした。

空は銅色にして

光もなし、

生けるがごとく

死せるがごとき月の色。.....

99  
聲のないコーラスに慎重に耳を假しながら、月を仰いでみると、その光のなかには、何だか、コスモスの花のほひを思はせる、いゝ匂があつた。嗅いでもく、決して飽き足ることの能きないほどの、冷たいが、しかし豊潤な、樂欲と歡樂とを満たしてくれるやうな、いゝ匂があつた。——彼は、月の光のなかにも、

必ず匂があるに違ひないと思つた。さうして、たゞさう感ずることによつて、非常な満足を得たのだつた。

こゝろのないコーラスは、何時までもつゝいた。

暗き雲のごとく

たな曳く霧のなか、

ま近き森の樫の木立は

灰色におぼろめく。……

路が一つまがつて、廣い通りと、静寂のうちに小搖ぐ紫色の小さい光の玉が、彼の眼のまへに展けてきた。むら／＼と蠢めく二つ三つの黒い人影が、毎ものごほり、そこに見られた。そればかりでなく、その上に何か聞えたど彼は思つた。耳を澄ますと、たしか、何か樂器の音色らしい。

「尺八か知ら。」

尺八は彼にいゝ印象をおもひ出させた。——それは、慘ましくも衰へた落魄の老人夫婦の姿だつた。その夫婦は、何時か、何處かの街を、悲曲を流してゐるいてゐた。その曲は、しかし、いゝ音色でもあつた。ことに、嗚がれた聲を張りあげて、淋しげな表情を、薄い額にかすかに漂はせながら、繊細な立琴のひびきを響かせた、あの老媪のすがたが、いちばん瞭然として彼にあつた。……その時、

「あれ聞えるかい？」

伴侶の男は突然嗚鳴つた。その聲の大きさに、彼は吃驚した。しかし、すぐ續くべき夢幻とも實相ともつかぬやうな事の觀照が、破れるであらう悞れから、一寸苦い顔をした。だが、それはたゞ、してみた

だけだつた。彼は、伴侶の男が、縁のない眼鏡を、月の光に、僅か煌かせながら、指の先で丹念に直してゐるのに、ほんの冷やかな一瞥を興へたまゝ、その問には、一言も應へなかつた。

「聞えるかい？」

男は同じ問を繰りかへした。それでも彼は何とも答へなかつた。男はそのまゝ黙つてしまつた。

けれども、何だか、彼は、一人できたのが惜しまれてならなかつた。いゝ印象のあとを辿るにも、今夜、更めて新しい落魄の人——さつき、尺八かしらと思つたのは間違なかつた。そして、その時は、尺八の主が夫婦連の流し者だといふことも明かになつてゐた——の、天地の髓を搔搔るひびきに耳を假すにも、結局ひとりであらねばならないやうな氣がした。その伴侶の男を厭うたのではない。だが、獨りである時にのみ許される耽溺の氣分を、追想の世界から喚び起してみると、彼は、もう、無上に伴侶の男から離れたかつた。

そこで、さう／＼、彼は、その男をふり捨て、驅け出してしまつた。一散に走つた。さうして、ひやりとする僅かな風を避けるために、羽織の袖をかき合せながら、四辻の人込のなかに立つたとき、彼はほつとした。

つれの男は無益な追跡を止めてゐた。彼は、何か重大な罪惡でも犯したかの如く、自分のその行爲をふり返ることに、善いことをした後にのみ起る、妙に唆かされるやうな快感を覺えると、素早くひきかへした。さうして、哀れな音色のあとをつけた。

……何處までも／＼、自分の思ひの動くまゝに、その落魄の老人を追はなければならぬ氣分が、彼にした。

以上はたゞ一例である。こんなことは、此のあとにもさきにも、非常に多かつた。

近く發行される、或る雑誌のために、またしても、机のまへに坐つたきりで、二日も三日も、原稿用紙を、首つ引きをしなければならぬのかと思ふと、まつたく、彼はうんざりしてしまつた。

何故なら、彼はそのときは、彼の先祖である一人の俳人——それは蕉門の十哲のうちにも數へられてゐた——の、元祿乙亥八年二月から、同じ年の八月十五日に至るまでの詳傳六十枚を、堆くつまれた參考書のなかに埋もりながら、半月以上もかゝつて、辛つと二三日まへに書き上げたばかりだつたから。勿論、それは、去年の夏に、大病に罹つたほどの苦心をして纏めておいた、全傳のなから抜き出して、更に一層詳密にするだけのことではあつたが。然し、その俳人の略譜を作るために、多忙な身でありながら、——彼はある高等學校に通つてゐた——六十七年間の各派俳士の動靜と、時勢の推移とを、併せて檢べるこの大業さは、彼の肉を虐げ、彼の靈を極度に疲弊させてしまつてゐた。そのため、知らない人々は、二十歳である彼を、實際よりは二つか三つも年上に見たほごだつた。それが、たとひ止み難き事情があるにしても、どうしても六十枚ほごのものを、數日のあひだに書くやうに餘儀されてみれば、誰だつて倦怠してしまふにちがひない。

その痛苦を忍んで書きだしたものは、そのころの彼の自叙傳の一部だつた。その標題は、はじめ「假面の世界」とつけた。けれども、何だか、それは、活動寫眞の畫名のやうな氣がした。そこで、色々思案の揚句、潤一郎氏の「呪はれた戯曲」のなかの、本物の戯曲「善と惡」の舞臺のやうな難産をして、辛つと生れた標題が「欄」だつた。血みごろになつてのたうちまはる、悶絶のかぎりを竭くした、痛ましい生の叫喚と、散漫にうちだされた、思索の亡骸が、その隨處に見られた。

## 欄

Une odeur de tombeau dans les ténébreuses nages,

Et mon pied peureux froisse, au bord du marécage

Des crapauds imprévus et de froids limaçons?

Baudelaire: Le Couché du Soleil romantique.

ひろい野原が彼の足元に横はつてゐた。うら枯れの草の葉が、俯きがちにしを、と歩く、瘦せた彼の足に、意氣地なく踏みつけられてゐた。——さびしい音が、その草の葉から起つた。曇つた眸で見はるかすと、そこには、何時の間にやら、凋落の色に、淡く秋をかざられた、小高い山の一脈があつた。その山脈は、もう冬が可なり近づいたといふことを仄かしながら、沈みゆく陽の餘光を



頂きにうけたまふ、静かに、けれども慵げに、彼の心にも「もう冬がくるのだ」といふ、彼にとつては、そのとき莫迦に嬉しいやうな豫告をあたへて立つてゐた。

「零落の嘆をうたふべき冬。」

心のなかで、惘然ぼうぜんそんなことを呟きながら、やがて來たるべき晚秋初冬の寂寞じやくまくを思つて、思はず彼は微笑わいふんだ。しかし、それは淋しい微笑だつた。

美しい山よ

しづかに眠れ。

朱あけと金とで飾られた、

その裾模様すそもようが傷まないために、

寂しい山よ

静かにねむれ……

彼は、もう十日も経たば見られるであらう此の山の粉飾の姿を、心に描いて、その想像の山に、子供のやうな感情でかう話しかけた。

……

やがてほんたうの冬が來て、

莊嚴じやうげんなその頸うなじが、冷たく

銀色しろがねいろでおほはれるとき

お前の立派な姿は

よろこびの色にも輝かう。

その悦よろこびに生くるために、

寂しい山よ、

けれども美しい山よ、

静かに眠れ……

さびしい山は、黙つたまふ、何時までも静かに立つてゐる。

眸まゆをうつすと、野の涯うらに一團の白い生きさもの、蠢動うごめきがあつた。そんなにまで高くない、枝と枝とのあひだが疎らになつてみえる、落葉樹らしい樹の下を、その一團の白い生き物は、緩かに動いてゐた。

「山羊だ。」

・霧はれし

丘かみをゆきて

眞白なる

山羊の子を見る

うつくしき國に

——石原純——

禮讚のやうな純眞なこゝろもちが、彼に湧き湧いた。涙ぐましいほど、この小さな自然のまゝの生きものに對する、哀憐あわれみとも惘ぼう然ぜんともつかぬ心の閃ひらめきが、だく／＼と湧き滾たぎつた。

「自然のこゝろ、そのものゝあらはれ。全く偉大さのいのち、そのものゝ姿。——おゝ山羊よ。いつま

でもそのまゝであつておくれ。それでいゝのだ。羈絆なき生の享樂を、いつまでもく、つゞけておくれ。たゞそれでいゝのだ。……俺の心を、ふしぎにも純ならしめる姿よ、靈よ。」

山羊を愛しむころとも、自分を懲れむ心とも、彼には區別のつけ難き心である。彼の眼には、ほんたうの涙が滲んでゐた。その潤んだ瞳を、彼の前にきた一匹の山羊が、審かしさうな眸でちらと眺めた。彼は、その山羊の眸をまともに受けたとき、どうしても、その眸は、温いものだと思はないではゐられなかつた。それが、彼を蔑んだ眸だと、再び思ひなほしたとき、彼の胸は、張りさけるほどの悲しみで満されてゐた。

そのとき、彼は、ふと、山羊とは何の連絡もなく、松尾桃青が死んだ時のことを想ひ出してみた。大阪南久太郎町の花屋仁左衛門の宅が、ありくと思えるやうな氣がした。彼は、元祿甲戌七年十月十四日の桃青の葬送の日の記事を、曾て憶え込んでゐた個所だけ、すらくと頭のなかで誦んじてみた。

「時しも小春の半ばにて、靜かに天氣晴れわたり、月清朗として、湖水の面に輝きわたり、名にし粟津の松に吹きおこるは、無常の嵐かと思はれて、月はおもしろきもの、露はあはれなるものといへど、折にふれては、何か哀れるものならざらん。矢橋の漣に寄する響きも、愁人のためには、胸に迫り、泪を添ふ。」(花屋日記、各務支考記)

#### 引導香語

雪月魂魄。風花精神。等閑一句。驚動人天。嗚呼。奇哉芭蕉。妙哉芭蕉。

……………

何だか、松尾桃青ほど崇高な死に方をした人は、またとない様な氣が、彼にした。さうして、彼の瞳は、い

つの間にか潤んできた。その潤んだ瞳と、純なる心とで山羊をよんだが、山羊は、彼には近よらなかつた。

「山羊は人間といふ暴君に、きつと、恐怖の心を抱いてゐるのだ……誰が、こんなにも可愛い、山羊の心を、傷ましめたんだ……」

山羊は彼の心持に、觸れることすらしないらしく、たゞ他愛もなく夕暮の草の野に蠢くだけだつた。彼の心は、益々憂鬱にとざされて行つた。

秋くると

よろしきことも

灰色の

衣をまどふ

わが心から

……………

「欄」の原稿は、最初に彼の豫定であつた六十枚は、書かれる事なく、また、彼が試みようとした *demoniac* な事件の附加もなくして、これだけで中絶されてしまつた。何故であつたか、それをわたしは知らない。だが、彼は、そのころ、そろく、神經衰弱に罹らうしてゐた。そのために、あるひは彼の思索とか觀照とかが、過敏な、移ろひ易い幻想や空想によつて、支離滅裂なものにされてしまつたからであらうか。——實際、彼は、そのころ、よく、顛顛や後頭部のあたりが仕切なしに痛んだ。歩くたびに、それ

が、頭の髓までも搔き裂かれるかと思ふほど、非道くこたへた。くだらないことに亢奮して、一晚中一睡もしない日が、幾日もつづいた。更に。讀みなれた文字の劃をさへ忘れたのだつた。瞳は睡つてゐた。さうして、彼の姿の何處にも、力といふものは、影すら見られなくなつてゐた。

それから、柏の葉に凋落の秋が来て、小歌みなくふる時雨が、荒々しく彼の裏庭を訪れた。その細々とした雨のひびきにも堪へかねて、柏は、倦怠さうに、白つばい病葉わくらばを落した。落された葉は、慘ましくも地に敲きつけられて、毎日々々、穢ならしく變色して行つた。

名も知れない小さな木の實が、まつ赤に熟れて、黄ろくなつた葉の間から、勢よく顔を出してゐた。

#### 赤き實の

その名を知らず

たゞ赤き

小さき實と見ぬ

そのつぶらの實

そのほかの木も、次第に秋のよそほひを整へた。けれども、それら自然のなかに穩かに育まれた樹樹にも、やつぱり暴虐な争闘があつた。

ある朝、それらの樹々の一つ／＼を、仔細にしらべてみると、春夫氏の「田園の憂鬱」のなかの、眞夏の廢園の斷章のうちに叙べられたと、よく似たことが、そこに見られた。——太陽の光に遮られた、いちばんうち側の葉から凋れてゐるのだつた。

「何といふ淺ましきであらう。」

しかし、そこには、彼に、一つのよろこびがあつた。そのよろこびを、彼は、自分のふどころに大切にかくまひながら、思はず、にやりとした。そのよろこびの消え去らないうちに、急いで小さいペンをとりあげた。——彼の胸には變調ではあるが、旺盛な創作欲が、突然、沸き立つたのだつた。——さうして、ふたたび、翌朝の電車が運轉しはじめるやうになつた頃まで、默想は能きないながらも、まんじりともせず、一心に書き立てた。

それは、わたしがこの作の始にあげた、詩劇「秋の歌」に大添削を施し、それを序曲とした、「或秋の夜の幻想」といふ、八十枚ほどの、一つの長大な詩劇だつた。

その翌日、その原稿は雑誌に送られた。

けれども、そのときから、彼の神經衰弱は、もう、到底快復されないまでに昂進した。

濕りがちなる土のうち、蝸牛群れるなかに、

われ自ら深き墓穴を穿たむ、

そこにわれ老骨を埋め忘却のうちに眠るべく、

さながら鱧鮫ふかきの水中に沈むがごと。

われは遺言を忌み、墳墓を厭ふ。

死して人々の涙を求めむよりは、

むしろ若かず、生きながら鴉を招きて、

わが腐肉のはしくより血を吸はしめむ。

ああ目なく耳なき暗黒の友、なむち蛆、

頽廢の子なる放蕩の哲學者、

また自由なる喜びの死人はみな爾に行かむ。

痛悔なくわれの屍に喰ひ入りて、

蛆よわれに問へ、魂なく、

死の中に死したる腐肉に猶ほ苦痛ありやと。

Bandelaire の *LE MORR JOYEUX* の詩——(厨川氏譯)——が、さうしたころ、よく、彼に愛讀せられた。

小膽といふことが、彼の性格の大部分を占めてゐるものだと、毎も彼は考へてゐた。ところが、ある日、無謀とも言ひ得るほどの大膽さ——彼はさういふ虚飾的な名でよびたかつた——を、ふと、自分のうちに見出したときには、狼狽の極、落膽してしまつた。

それは、ある、風の荒ぶ日だつた。

E に嫁ぐべき Y 子の清艶な姿の思出が、どうしても、彼の切ない心象のまつたなから、消えようとはしなかつた。しかも、その思ひ出は、あの、Y 子を彼の手から挽ぎとつた、氣障な E の貌に對する鬱憤の叫びと結びつけられて、益々、彼に、Atlas でも覺えさうな苦楚を、無闇に煽り立たせた。

「やうだ、E！畜生！」

立つてもゐても、凝乎としてゐられない焦躁と呪咀とが、彼のこゝろに、いつまでも燃えた。彼は、思はず一つのベンをとり上げて、挑戦的な、さうしてまた、絶交のしるしでもあらう一枚の葉書を、少しの躊躇も苛責も感せず、亂暴に書きなぐつた。

「おい、E！悪魔！盗人！」

それまでに、どれだけの激昂が彼にあつたか、さの葉書が、どんな綿密な思慮をもつて書かれたか、當人すらが、そのときは、それを判然とは知らなかつた。

けれども、その葉書を、悪魔でも拂ひ除けたいやうな嫌厭の情に、身慄ひしながら投函してかつてくると、彼は、ふしぎにも、自分のなしたことを、此の上もない醜態だとふり返つて見ることに、居たたまれない自責を感じ出した。そのとき不自然と無謀と亂暴とは、彼に見逃せない大きな罪惡だつた。

「いや、俺は大膽だつた。」

豪さうな附け元氣をしてみると、成るほど、彼のやつた事は、當り前なことだと考へられないではなかつた。

「それくらゐの事が平氣で能きなくて、何しようがあるもんだい。」

だが、それを當り前だとしてみると、大膽といふことは、彼には、譯もなく怖ろしいものと思へた。彼はがっかりしてしまつた。

「亂暴だね。だが、何かに、普通の人なら、いくらもやるこつたよ。」  
 と、その夜、彼と同宿である、彼の同級生は、彼がまだ一年生だつた頃、上級の人に對して彼のどつた、歪れた無謀な、向ふ見ずの大膽な態度——自分ながら呆れるので、滅多なことで静かな心持で、それをふりかへることは能きなかつたのだが——に話頭を轉ずる前に、こんな事をいつて慰めてくれた。しかし、彼は、どうしても、己れの行爲を蔑如し、己れの淺蕪な思慮を呪はないではゐられなかつた。翌日、その人々と顔をあはせるであらうことが、考へれば考へるほど痛苦に思へた。彼は、この世のなかには、豫想してゐたよりも、猶々、狭いものだと思つた。さうして、その狭い世の中に、愛他的な美はしい情などといふものは、少しもないものだ、毎もよりは一層痛切に感じた。さうして、その夜、彼は、わたしがこの作の第三斷章にあげた「伴侶の男」が、ふとしたことから、學校を出されることになつた夢を見た。その男が出された原因は、冷靜な、常識のある人ならば、決してさうは想像だにしないであらうやうな、空漠な、概念的のものであつた。

それから數日のちのことである。ほんたうとも捏造とも附かないやうな、彼にまつた物凄いやうな、彼の級の人々によつて傳へられた。その話を、わたしは、今、こゝに、實際あつたことに多少の潤色を加へ、さきに彼が企てた創作「欄」の標題をかりて、一つの物語の筆裁に仕立てて見ようと思ふ。勿論、かうした噂を生み出させるに至つた、彼の事件の動機に就いては、別に目新しいことはなかつた筈で

ある。しかし、その目新らしくない動機を、これまで随分多くの紙數を費して、わたしが上に掲げた垂直的な叙述のなかから、多少でも纏めてくれる人があるなら、わたしには望外のよろこびである。

## 欄

かなしいかなや流れゆく  
 水になき名をしるすとして  
 今はた殘る歌反古の  
 ながき愁ひをいかにせむ

若菜集

ある夜。蠟燭の光が、大きく揺れてゐた。

じいっと、刺されるやうな苦しみに悶えながら、暗黒のなかに立てられた、この一本の蠟燭の燭を、斜めに映しては、冷たく凍つた小さな鏡があつた。鏡のなかの燭と、本物の、蠟燭の、消えさうになつた青白んだ橙色の燭とは、まつたく、神祕そのものであるかの如く、だいつ、廣い、この十畳も敷かれるであらう部屋の一隅に、物凄く揺れてゐた。而も、この蠟燭の燭は、やがて亡びるであらう自分の生に、聊かの執心をも有たぬ如く、けれども、おほ方は風に腰を吹き折られて、縋れながら、揺れ乍ら、燃えに燃えた。

夜更である。

もう死んだのでもあらうか、つい昨日今日までのやうに、この家のまはりで盛んに淋しいうたを唄つたあの蟋蟀は、もう、何處からもこの部屋を訪づるゝこゑを張りあげなかつた。

あたりは、都て完全な静寂のうちに睡つてをる。しろがね色の冷たい光を放つ小さな時計は、何時しか時の流れを示さなくなつて、机の抽斗のなかにちいこまつてゐる。たい、鏡のなかの、音もなく揺ゆる、燭と、忙しく小さく喘いでゐる本物の蠟燭のほのほと、床柱に小さく飾られた、寂寞の秋におくれ咲いた純白のユスモスの、愁ひげな小さい花の二つ三つのみが、この部屋にあるいのちだつた。

五分のちである。この暗黒のまつたなかに、蹣跚としてよろめく、物の怪のやうに蒼褪めた彼のかほの、歪んだ輪廓が、突如として現はれた。現はれた輪廓のすがたは、太い吐息をつきながら、何とも意味のとほらないやうな、濁つた嘆聲を洩らした。

「その色だ、その光だ。お、生よ、死よ！ ひさしく覚めてゐたものが、今、そこにある……ある、ある。俺の魂がそこにある……」

彼は、この蠟燭の燭の démoniaque な色と光とによつて、ほんたうの自分といふ一つの宇宙の實在の、象徴的な隠れた姿を、はじめて明らかに見せつけられたやうな氣がしたのだつた。彼のこゝろは、悲愁のどん底にのみ見出される、崇高な、けれども小さい悦樂のやうに、すこゝ寛ろぎを覺えた。

「燃える、燃える……いゝ色と、いゝ光とが。魂と生と死とが、燃える……」

危く消されさうになつた燭の前に、倦怠の極にある躰を投げて、ごつかと腰を据ゑた彼は、指に攫まれた純白のユスモスの、咲きさかつた花の一つを、暫く嗅いだする、亂暴に燭のなかに埋めた。

斷末魔のやうな、小さい生の痛ましい叫喚がそこに聞かれた。

焼けきつた花の亡骸を、ふたゝび彼が鼻のさきにつきつけたとき、花には、もう、あの澄み透るやうないゝにほひと、滴るやうな清艶なすがたは失せてゐた。にたりと彼は微笑つた。その微笑の影が消えないうちに、ふたゝび淨い花が悲叫した。——何度もく、新しい花のあるかぎり、官能の悦樂をつくして、彼は、同じことを繰り返しかへした。

最後に焼かれた花の亡きがらにも、いゝにほひと清い姿はなくなつてゐた。それを知つたとき、我慢にもじつととしてをることが能きなかつた。彼は、苦々しげに、ありとある顔の筋肉を醜く引つらせながら、そこに散らばつた、すべての花の餘燼をとりあげた。さうして、いきなりそれを双の掌のなかに丸めて、力強く握りしめた。掌の力の續かざり、何時までも握り締める力を弛めなかつた。けれども、憤のために緊張した全身の肉と、滾り立つた血潮とは、それだけでは満足しなかつた。彼は、微塵に潰された花の粉末を、一まろめにして、荒々しく開かれた、がくぐくと顫へる口のながへ押し込んだ。

噛みつぶしても、噛みつぶしても、どうしても飽くことの能きない忿懣の氣分が、やつぱり彼のうちに煽りたてられた。——けれども、刻底、それでも駄目だと知るときが來た。その時、彼はいかに穢ならしく、のこらす口のなかの花の粉末を吐き出した。さうして、狂氣のごとく——或ひはほんたうに氣が狂れてゐたのかも知れない——甲高に嗤ひくづれた。

「わつはつは……」

けれども、彼はわれながらその號叫のあまり亂調子だつたのに、ぞつとした。さうして、それから瞬くうちには、不思議にも、毎もとは異つた憂鬱のどん底に沈んでゆくのを、彼自身、はつきりと意識しな

ければならなかつた。

泪が双頬をつたつた。

われひとり

霧のなかより

あらはれて

ひそかに霧に

消ゆる性もつ

その泪を止めきれないのを、苛立たしくは思はなかつたか。泣くといふこと、それみづからの中に、何らかの快樂を少しでも貪つてゐたのか。——決してそんなことのあらう筈がない。この夜の彼は、毎もの類廢的な彼ではなかつたから。しかし、しまひには、たゞ、泪を止めたい一念で苛りながらも、あせることそれすらが物が、なしいものに思へたのだ。

さうして彼は、何時までもく、涙線のなかに蓄へられた泪の種がつきるまで、ひた泣きに泣きつづけた。

ばかりと音がして、さ搖ぐほのほは、それをうけた蠟臺もろともに倒れた。

けれども、やつぱり彼は、そのまゝ泣きつづけた。

やがて空虚な泪にも終熄があつた。泪がやんだとき、彼は、手探りで、心覺えのところから、軽くなつた一箱の燐寸を辛くも拾ひあげて、身を伏せたまゝ、張り裂けるやうな心を抑へるかたはら、乏しい火

を鑽らなければならなかつた。

何本擦つても、その火は、ふたゝび蠟燭にうつらうとはしなかつた。

「チエツ、devil!」

辛うじて蠟に灯が点いたとき、あか／＼としたその光のために、泪の乾ききらない彼の眼は痛かつた。その痛みにも慣れきつたとき、ふと傍のかゝみに映る、窶れた自分のかほを見た。物凄しい形相と、疲れぬいた色澤とがそこにあつた。しかも、そのかほの陰影は、蠟燭のほのほの揺らめきとともに、或るときは濃く、あるときは淡く、廣まつたり狭まつたりした。その容子を疑視してゐると、我慢にもその魔術的な現象を、黙つて忍ぶことが能きなかつた。

「devil!」

いきなり、その鏡をとつて、力に任せて投げつけた。鏡は障子の棧にあたつて、がたりと音を立てた。だが、それつきりで、破れも砕けもしなかつた。素早く立つてかゝみを拾つた。ひろつた鏡は、ふたゝび強くなゝまつけた。何度もく、所さらはず敲きつけた。——鏡は鋭い音響とともに、まづ二つに破れた。

そのとき。

わが靈は破れたり、その倦怠に、

鳴らす響は夜寒の空を渡れども

聲はかすかに弱りはてたり……

すつと以前に彼が誦んじてゐた、あの Baudelaire がうたつた、LA CLOCHE FLEEE の物凄しい譯詩の句が、

一つの立派なコーラスとなつて、何處か遠いところで唄はれてゐるやうな心もちが、彼にした。そのコーラスの尾が、尾に尾を曳いて、悠長に、中心をうしなつた彼の思辨の領域のかたはらを通りこした。唄は亂次もなくなつてく——

聲はかすかに弱りはてたり。

最後の呻吟は傷を負ひたる者の

血の湖の岸に棄てられ、山なす屍の下に、

身動きもかなはず死する悶死の聲か。……

家外には猛烈な冰雨がふつてゐて、身に泌みるほどの寒さが彼を襲うた。

けれども、そのとき、狂亂のかぎりも竭くした彼は、現とも迷ともつかない朦朧たる世界のまへに、息も絶え／＼なる身を捧げてゐた。

忽ち、彼の手に欄も碎けよとばかり強く握り締められた、強烈な、兩刃の紫紺の閃きが、胸さき近く、先づ、彼の睡つたやうな窪んだ瞳をハッシと射た。

怯えた如く、彼はぎよつとした。

しかし、彼には、もう、何ごとも判らなかつた。

一九一九、一一、一九、二〇、稿、

### 雑報

#### 第二十六回陸上秋季運動會

十月二十六日。美しく晴れた秋の一日であつた。柔い小春の日の光は色づいた木々の梢に照つて、雪の色、風の音にも秋らしい氣分が充ち／＼して居た。

校門に交又せられた大國旗は先づ人々の心を威壓して居る、物々しく貼り出された各部のヒラは何れも今日の勝利を物語つて居る。

會場の中央、高いボールの頂きには大國旗がゆつたりと風に飄つて居り萬國旗は蜘蛛手に張られて居る、恰も滿艦飾の浮城の様である。静勝館は三部館となつて必勝塔も物々しい。あの老松の下には素朴な法文亭が見え、遙向ふに二部坑がお城を背景にして建てられて居る。

今日は日曜日である、市の人々は朝からごま／＼押しかけた。時習寮の室飾りは例によつて大人氣を博して居た。

つた。勇しき奏樂の音につれて競技は元氣よく行はれた。——空の彼方に漂うて居た雲の一團は忽ち擴つて、遂に雨となつた、その時はもう正午近くであつた。

午後雨は名残なく晴れ、秋の空は益々澄んで來た、一時より續行。折から歸省中であつた中橋文相が見えた。競技は一層緊張して來た。

愈々各部選手競走の番となる、盛なる應援歌の聲が湧く。場内は凜として、殺氣立つ。勝利は三部軍の手に歸した。十有余年の屈辱を雪ぐ事を得た三部の應援團は狂喜した。

選手を擁し、樂隊の奏する勇壯なる進曲に送られて場内を一週して引き上げた。尾山城から冷い秋の風が吹いて來る、見物の人々は暮れ行く町へと急ぐ。あさは、寂しい静だ。

かくして尾山城下秋の一日は歡喜の聲と共に暮れた。

#### 第一着三部選手(青)

小林 榮治君  
橋爪 精二君  
福留 富治君

#### 第二着三部選手(赤)

古木 勝治君  
木村 修治君  
佐村 修治君  
橋爪 精二君  
福留 富治君  
根尾 敏雄君  
橋爪 精二君  
小林 榮治君

#### 第三着三部選手(白)

荻野 市太郎君  
橋爪 精二君  
小林 市太郎君  
福留 富治君

この日動植物實習教室に於て四高山岳會主催で第一回山岳展覽會が開かれた。(川上)

#### 第三年生一泊行軍

第二日(十月三日)

南軍(黒帽軍) 二部中隊

想定

一、動橋川右岸ニ進出シ後續梯團ノ來着ヲ待ツベキ任務ヲ有スル南軍學生大隊ハ北陸道ヲ北進シ十月三日午前九時其先頭ヲ以テ大聖寺町西端ニ到着ス

二、學生第一中隊(機關銃一小隊附屬)ハ右側衛トナリ吸坂、中代、庄村ヲ經テ動橋ニ向ヒ前進スベキ任務ヲ受ケ午前九時三十分其先頭ヲ以テ吸坂ノ橋梁ニ達ス此ノ時マデニ得タル情報左ノ如シ

一、兵力未詳ノ敵ハ北陸道ヲ南進シ午前九時半頃ニハ動橋附近ニ到着シ得ルノ距離ニアリ

犬の遠吠のやうな、ぼんやりした、やわら



かい物音が、ふと、耳に入つたと思つた。それも夢のやうな気がして、ふた、びうつらうつらしてなると、その犬がしだいにわだしの方にもちがひて、すぐ枕元で吠えてた。あるひはまたそれがにわかには遠のいてゆくやうであつた。

喇叭の音だつたのだ。意識がはつきりしてきたとき、わたしはさうだぞ知つた。時計をみるさちやうご五時半だつた。

ひどい雨がふつてゐた。銀の柱がたつてゐる。湯からはあまりにそのさまは物凄かつた。湯からかへると雷鳴さへきこえた。

山中の町には、わたしには忘れれる事のなきない、印象があつた。ほんたうに詩のまぢとも歌の町ともたさへたいやうな、やわらかい感情のあらはれその物でもあらうこの温泉町には、原始にかへつて、一切の人事を剥ぎ去つたらと思ふほどの、印象があつた。

わたしは去年の秋にみんなど初めての一泊行軍で来た時のことを思ひだしてゐた。

七時に防禦軍となつた一、三部中隊は黒谷橋を渡り、四十九院の隧道へむけて立つて行つた。それから十五分たつて、攻撃軍である

二部中隊が、淋しさの表情に蔽はれた姿を、この町から消した。

九時に吸坂に着くまでの山峽の道は、自然の織つた紗の間を縫ふ心持だつた。そのころ雨ははれてゐた。日本海のうへを流れてくる白い雲は、離れ／＼になつて、この山峽の紺青の空をとんだ。わたしは二部の人にはあまり友をもたないので、部隊からはずつと離れて、きよとんさししながら、時折大隊副官の本間君や、丈の高い二部のある人と駄辯つて、景色のなかをあるいた。

戦はこと動橋のちやうど中ほどの加茂の東で行はれた。稲掛がたくさんあつて戦を見るにはあまりいゝところではなかつた。情況はいつものとほりで格別變つた事もない。

十一時にた、かひがをはつた。今朝山中でわかれたきりになつてゐた笠原君や高坂君(宇田川君は休んだ)さかほを見あはせたとき

には、氷のやうな寂寥からすくはれたよる、びで一杯だつた。組のひきにもあへた。笠原君や高坂君にきくと、防禦軍の方にもかはつたことはいふと言つた。

稲掛を前にした稲田での講評は、昨日よりは少し早くすんだが、それでも四十分かゝ

つた。いゝことにも、わるいことにも、それほど今日の演習の成績が重大だつたのだ。鴉が何度も頭の上でないた。うしろには汽車の線路が鮮かに緑をかへしてゐた。

### 第二年生一泊行軍

第一日 十月七日

午前六時四十分校門出發、金澤驛より上車、小松驛に下車す。驛前廣場に整列後直ちに旅次行軍に移り、北陸海道を南進し、串村より右折して佐美村に到り、暫時休憩す。時に午前十時。

南軍(白帽軍) 想定 二部中隊 一、南軍枝隊(歩兵一聯隊、騎兵一小隊、野砲兵一中隊、工兵一小隊)ハ本月七日午前

小松附近ニ於テ優勢ナル敵ト遭遇セシガ未ダ決戦ヲ交ヘザルニ先チ増加隊ノ來着ヲ待

二、枝隊ハ七日夜矢田新及新保附近ニ村落露警ヲナスニ決シ其前哨ヲ左ノ如ク配置セン

トス 一、主力方面ハ其前哨本隊ヲ月津附近ニ置キ警戒線ハ月津新及額見北方ニ互ル

二、學生大隊ハ新保東北方高地ニ露警シ前哨學生第二中隊ヲ佐美南方高地ニ出ス

此ノ中隊ハ午後四時三十分任地ニ到着シ下士哨ヲ佐美南方高地端ニ小哨ヲ同村東

北端丁字路附近ニ配置シ日末松崎方面ニ對シ警戒セシム

(本演習ハ凡テ前日ノ夜間ヲ假想シテ實施ス) 茲に於て、小谷第二中隊長は前哨線の配置

を行はんがため、直ちに次の如き命令を發せり。 「第一小隊は小哨をなれ、第二小隊よりは佐

美南方三又路附近に下士哨を出せ、第三小隊は本隊となり佐美神社境内に位置すべし」

即ち中隊長は歩哨線の撤廢を命ずるに共

に、第二小隊より斥候四組を出し、敵軍を誘ひつゝ柴山東端なる大隊の右翼に合し、此處

に雌雄を決せんとす。敵は南軍の退却を見て

猛烈に追撃を開始せり。折しも佐美南方高地の要害に陣したる南軍の一部隊は、脚下に見

ゆる敵軍に對し側方より猛射を浴せられたれば、敵軍の意氣沮喪せること少なからざりき。

午後一時半、高橋演習統監は次の想定を南軍第二中隊に

一、十月八日午前四時三十分學生第二中隊ハ大隊長ヨリ左ノ要旨ノ命令ヲ受領ス

二、學生第二中隊ハ今ヨリ警戒線ヲ撤シ柴田新附近ニ陣地ヲ占領シ當大隊ハ新保柴

山間ニ陣地ヲ占領セントス 三、學生第二中隊ハ今ヨリ警戒線ヲ撤シ柴

山村東端附近ニ到リ大隊ノ右翼ニ連繫シ陣地ヲ占領スベシ

(演習ハ七日夜ヨリ八日朝ニ互ルモノト假想シテ實施ス)

即ち中隊長は歩哨線の撤廢を命ずるに共

に、第二小隊より斥候四組を出し、敵軍を誘ひつゝ柴山東端なる大隊の右翼に合し、此處

に雌雄を決せんとす。敵は南軍の退却を見て

猛烈に追撃を開始せり。折しも佐美南方高地の要害に陣したる南軍の一部隊は、脚下に見

ゆる敵軍に對し側方より猛射を浴せられたれば、敵軍の意氣沮喪せること少なからざりき。

午後一時半、高橋演習統監は次の想定を南軍第二中隊に

### 第二日

眠つてゐる様な静かな朝だつた、薄白い朝の光が僕等の寢室の南向きの窓ガラスに當つて居たが、いつしか音もなく、氣のつかぬ間に消えてしまつて、うら寒い灰色に變つて居

た。  
五時曉々と鳴りひびく激しい喇叭の音に、あくまで平和に充ちたこの温泉町の静寂がやぶられて、町は再び戦鬨風分を以つて充たされた。すると漸く物々しく武装した数百の荒武者が名残り惜し気に、三三五五町の小路から現れてきた。然し汗と塵とあの雨にまみれた、疲れ切つてた、悲しい昨日の敗残の姿も一夜の安眠にすつかり消え失せて今は砲煙彈雨のその中に、屍をさらさうとする勇士の胸は又高なりして居た。

いま、いよ／＼一夜の旅ではあるが、あの印象深い、この詩的情緒にあふれて居る町を立ち去るのである。

七時出發の準備も整うた。折しも西風は勢を増してきて、この温泉町を取り圍む薄紫の山々からは、薄黒い雲が現はれてきた。

いよ／＼空模様は怪く見えた、雲はしきりさ亂れて居る、風はいよ／＼増して来る。

町の人々は狭い小路に兩側に重り合つて、今立ち去らんとしてる三百の勇士に、哀別の目を見張つた。

北軍(國防軍)想定 一、三部中隊 (一)敵の運送船隻は、其の艦隊の掩護に依

り十月八日午後橋立沖に現出す。  
金澤衛戍地より派遣されたる北軍學生中隊は敵情偵察の任務を受け十月八日夕動橋に到着す此の時既に敵の一部隊は上陸を了り片山津附近に駐在す  
學生中隊は河尻附近に位置し敵を監視し夜を徹す。

(二)國防軍の別働隊は鯖江方面より北陸道を北進中にして九日午前九時頃には、大聖寺川の線に到着し得るの距離にあり。  
(三)翌九日午前學生中隊は金澤衛戍司令官より左の要旨の命令を受領す。

(一)學生中隊は、我が別働隊の進出を容易ならしむる爲那谷―榮谷の谷地附近に位置し敵を該方面にて牽制すべし。  
月津附近には本日午前中に到着するが如く別に歩兵一大隊を派遣す。

進軍喇叭の音も勇ましく黒帽軍は先發した。しばらくで白帽軍も進軍した、

町を去つてから廣い北陸街道を可成長い間北に進んで雨の降る中を松山村に着いたのはもう九時近くだつた、黒帽軍は再び進軍した

暫くすると、敵情視察に出て居た斥候の衝突したらしい小銃の音が遠くからかすかに、聞

えてくる本隊は、いよ／＼榮谷村に着いた。  
我軍は我が別働隊の進軍を容易ならしむる爲にこの附近に位置して敵をこゝに牽制せねばならぬのだ。

雨は止んだ、然し、道は大變に濡つて居て進軍は容易でなかつた、山崎大隊長は各小隊を招集して、策戦を傳へながら北進された、斥候の衝突の砲聲も益々猛烈を加へてきた、いや早や民家の影森の間には濕っぽい空気の中に低くたれこめてる砲煙さへも見とめられ

た。  
白帽軍はいま、敵を喰ひ止めるべく榮谷に優勢の地をしめて踏み止まつた、敵は、死に物狂ひに奮進しつゝ、我軍に攻撃し始めた、

我が軍は我が別働隊の進軍を容易ならしむる爲に、敵に向つて擁護射撃をなし一時たりとも、敵の前進を阻害し本隊の安全を期せんとして之れも、死に物狂ひに砲火を浴せかけた。

暫くすると突然敵の歩兵機關銃隊の一小隊は近く前面の勅使村の森影にあらはれた、田の畦に街道を十字に約二千米の距離に我が軍が散兵線を作つた、すると我が機關銃隊も今現れた敵の機關銃隊に砲火を浴せかけた敵軍は

街道に沿つて我軍近く来たと思ふ頃俄かに散兵線を張つた。敵の軍勢は、はるかに我が軍より優勢らしい、畑も、村も、林も物ともせず、敵はどん／＼進軍して来たその猛烈な突撃振

一、我が軍の運命があやぶまれた。  
一時は止んだ雨が又降り始めた。敵と味方の間には何一つ、目を遮るものはない決戦地には最も適當な場所だ。

斥候戦が清水村方面には絶え間なく銃聲が斷續してきえてくる。  
降りしきつた雨は又止んで雲間からは、青空さへ見える。

立木の隙々や、丈の高い雜草の間には散開した兵士の銃が敵をまち受けて居る。  
もう、北軍は確實に勅使を領有したらしい。

今實現され様といふ荒々しい修羅場としては今の澄み渡つた空は、あまりに不調和すぎる。  
いよ／＼兩軍の決戦だ。

廣々とした、勅使の村も、兩軍の射出す砲煙で立ち罩められて、強い硝煙の香が鼻をつくこと甚しい。  
一分、二分、三分今までハサの上で、敵情視察の大野中隊長から俄かに、「四百メートル

各個に打て」の命令が下りた。  
號令の通りに、猛烈なる一齊射撃。白煙濛濛。我が機關銃隊も物凄く砲火を敵にあびせかける。

敵も銃、號令の飛ぶ毎に收獲後の二日の雨に泥水の梯になつた水田の間に躍進する。  
もう肉弾だ。全軍は一時につけ劍、突如突撃の喇叭が鳴りひびく。

味方の中隊長が指揮刀振つて、叫聲をあげながら眞先に敵に切り込む、續いて全線も衝き進んだ。  
しばしは、敵味方の叫喚と、銃聲が凄まじく入り亂れての白兵戦。全軍の血走つた眼、銃劍の閃。

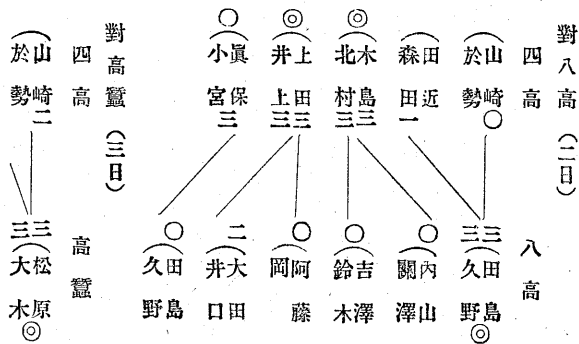
この時ゆるやかにたか／＼と、演習中止の喇叭の音がひびき渡る、時は正に十時半。  
再び隊伍を整へて街道を北に進んで榮谷村について、村の願成寺に少憩の後例の如く、兩軍の學生大隊は、高橋統監から、講評をきかされた。

雨は又一しきり降り出した、全軍は再びひもじい腹をかかへて、それから那谷に向うて進軍した。(D.Y.)

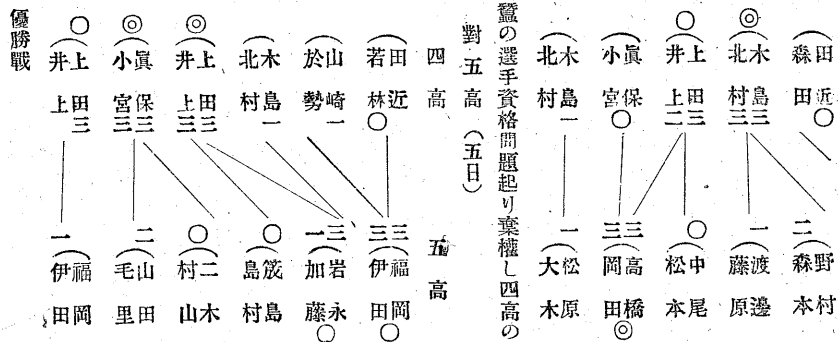
北辰會各部々報

庭球部

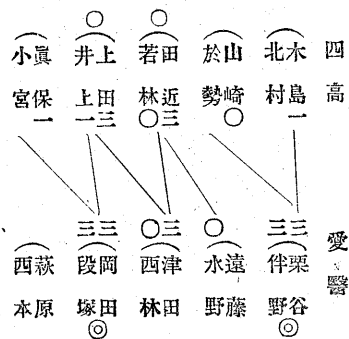
南下記録



高齋の選手資格問題起り棄權し四高の勝利  
對五高(五日)

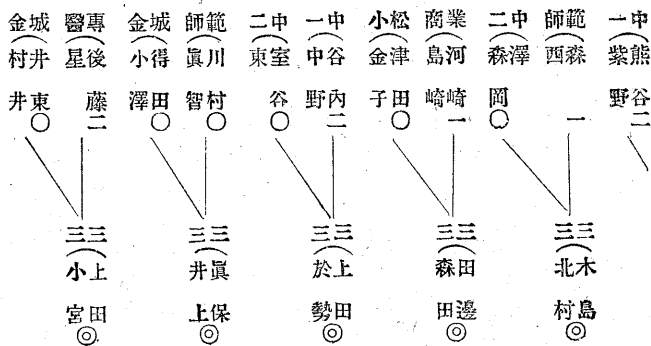
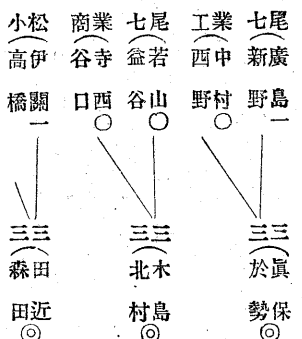


五高と午前には戦ひ午後亦愛醬と戦ふ、時利  
あらざるを如何にせん。

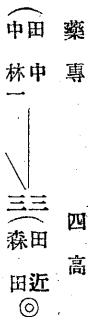


庭球大會

對外試合四月廿二時



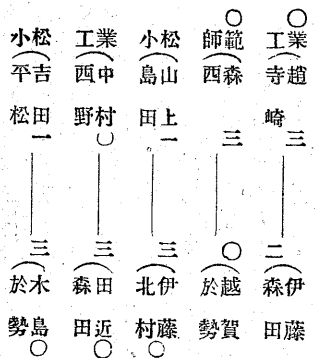
對富山藥專記録



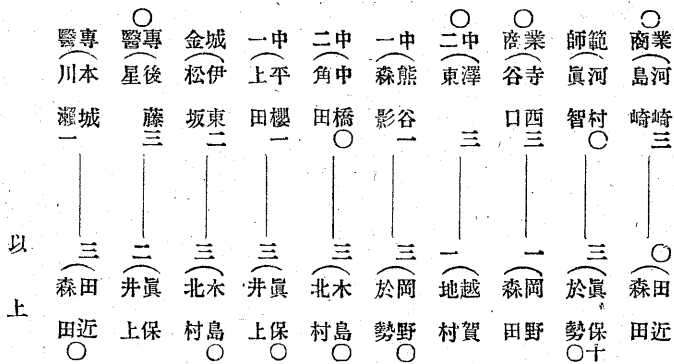
二度迄醫專を敗りて北國庭球界の覇と勇み  
し富山藥專も遂に右の如き記録を以て我が軍  
のため蹂躪されぬ。

秋季庭球大會

對外試合 十月十九日



弓術部



一、新入生歓迎競射會(十月一日)  
來會者三十名の中新入生五名に過ぎなかつ

た。尺二的十射甲四中以上の方を左に。  
寄藤君。水谷君。吉江君。北條君。  
蓮見君。鴻巣先生。山根君。壺田君。

二、百射會(十月三十一日)  
午前十時から午後五時半まで、可成猛烈な、  
雨と風とに悩まされ乍ら奮闘したが、成績は  
余りよくなかつたのは残念であつた。五十中  
以上のものを左に。  
壺田君(七〇中)。阪本君(六九中)。北條  
君(六六中)。山根君(六二中)。鴻巣先生  
(六〇中)。蓮見君(五三中)。三好君(五  
〇中)。

三、百射大會(十一月十六日)  
北陸弓術界は、殊に金澤に於ては、年々さ  
びれて行く。而して毎日一生懸命練習してあ  
る南下軍選手は、力の試し所がなくて、徒ら  
に腕を鳴らしてゐるばかりだ。そこで一は自  
分の爲め一つは北陸弓術界の發展を促す一  
助として、今日は尺二的百射大會を開いた。  
そして善く好弓家を招いたが、醫專、中學、  
師範校の選手以外には、第一高等女學校の柴  
山先生と桃中野雲風氏のみが参加されただけ

であつた。本校にては楠師範、鴻巣部長先生を始め十五名参加し、合計三十六名に達した。本日の規定は左の通りであつた。

- 一 晴雨ニ拘ラス午前八時集合隨意試射、八時三十分開始、
- 二 三十射ノ後十二中ニ達セサルモノ、五十射ノ後二十五中ニ達セサルモノヲ除外ス。但シ都合ニヨリ七十射ノ後四十二中ニ達セサルモノヲ除外スル事アル可シ

### 野球部

#### 第七回北陸野球大會略記

- 時間勵行も出来、始めての試としては、萬事故障なく行つた。
- 三十射の後除外されたもの十六名、五十射の後除外されたもの六名あり。残り十四名となつた。中等學校よりの参加者の中五十射迄残れるもの五名となり五十射の後全部除外されたのは尤もとは云へ残念であつた。成績優秀であつた方の芳名を掲ぐる。
- 第一等 鴻巣先生、北條君。(各七十一中)
- 第二等 坂本君、塩田君。(各六十九中)
- 第三等 山根君。(六十二中)
- 第四等 小栗君(醫專)(六十中)、第五等、小林君(醫專)(五十九中)、第六等、吉江君(五十八中)、第七等、藤井君(五十七中)、等外塚野君(五一中)、楠先生(四九中)、柴山先生

吾野球部主催第七回北陸野球大會は暑い真最中の七月廿九日から開かれ八月二日を以て全部終つた。本年は試合番組製作法を改めて、昨年迄の二回戦法を棄てて勝残り法を採つた。然し参加校が九つだつたから組合せの都合上一敗者にして抽籤により再び出て、戦ふことの出来たものもあつた。

烈日の下、各地より集まれる若武者の揮ふ鐵棍の憂として生けるが如き響の跡を辿つて見よう。

廿九日 勝

長岡中學(5)	對	金澤師範(4)
高岡中學(3)	對	金澤二中(1)
金澤一中(6)	對	富山中學(3)
卅日		
金澤商業(9)	對	富山師範(2)
金澤師範(10)	對	敦賀商業(4)
富山中學(6)	對	金澤二中(2)
卅一日		
金澤師範(8)	對	金澤一中(3)
富山中學	對	金澤商業(棄權)
長岡中學(11)	對	高岡中學(0)
八月一日		
金澤師範(5)	對	富山中學(3)
二日優勝戰		
長岡中學(9)	對	金澤師範(4)
長岡中學は二ヶ年繼續して優勝の榮を得、吾野球部からは優勝旗と銀カップとを大阪朝日新聞社からは優勝旗を授けられた。		

野球部日誌

永い永いと思つてゐた夏休みも愈々残り少なくなつて遂に九月に入つた西風一度拂へば

夏は雖なくさば云ふものの尙ほ殘暑堪え難いものがある。

休暇になる前から休暇に、しやうと計畫丈は立てて置き乍らいざ休暇を迎へて見ると、長い月日を徒らに漫然と暮してしまつて狼狽して後片附にさりかゝる八月の末、早くも吾は來るべき南下を想ひ、過去二年に亘る、痛ましい悲憤の涙、暗い憂愁の雲を拂はんと、固く固く臍を決めて誠之塾へ集まつた。

豫定通り九月一日以後毎日小立野の塾から學校迄の長い道を、てくつて黄昏時迄の火の出る様な猛練習を今から回顧しては、全身の血が沸き立つの感がある。

入學式のあつた九月十日の日元氣溼潤たる新入生諸子の新精力を得て勇氣百倍した。

新に野球部の人となられた方は

- 芝山秀文 (富山中學出身)
- 山内武夫 (神戸一中出身)
- 小川正雄 (三重三中出身)
- 三宅徳三郎 (三豐中學出身)
- 有泉時二 (甲府中學出身)

吾々の練習は山々の木の葉が黄色くなると共に益々其度を増した。幸にして今年に九月中旬に少し雨を見たが其後十月を経て十一月

の中旬迄極めて天候の都合が良く行つたので豫期以上に十分に腕を磨くことが出来た。内野外野に五分の隙なき守備力は熱心な研究の下に得た強い攻撃力と相俟て人々に十分なる期待と希望とを與へたのである。腕試しに時には市内の中等學校とも試合をして見たが力の差が甚しくて全然問題にならぬ。斯の如く市内の學校では吾々の相手とするに嫌らず思つてゐる中央富山藥專野球團からの挑戦を受けた。吾々は好敵手を得たと欣んで應戦の返事をした。

約束の十一月二日が來た。絶好の野球日和だ。金澤のファンは此試合を以て近來不振の金澤野球界の覺醒期として待つてゐた。吾々も極めて緊張した試合を見るに違ひなく楽しんでゐた。然るに吾々の期待は次の様な成績で痕形もなく覆がへされ寧ろ酷たらしい程に裏切られてしまつた。

(藥專)	川邊野 藤崎井林野	得点6	安打1	打數29	打球9	三振8
(高)	本橋山田木山谷内井	得点14	安打10	打數40	打球7	三振5
(四高)	山古横新鈴村磯山今	得点1	安打1	打數3	打球3	三振3
	1 2 3 4 5 6 7 8 9					

既に藥專軍を要撃して一蹴の下に屠り去つた位だから強ひて例に倣つて富山へ出掛ける必要もないと思つたが時には不慣れた他のクワンンドで幾百幾千の野次に野次られ乍ら戦ふのも實に試練だと思つて其後二週間を経て十六日の日曜日に吾々は富山へ遠征した。

當日は前夜來の雨霽れて、二日に譲らぬ好野球日和、吾々は午前藥專と午後富山中學と交戦し、豫定通りに兩者を見事敗戦の憂目に會せしめた、今其成績を記せば

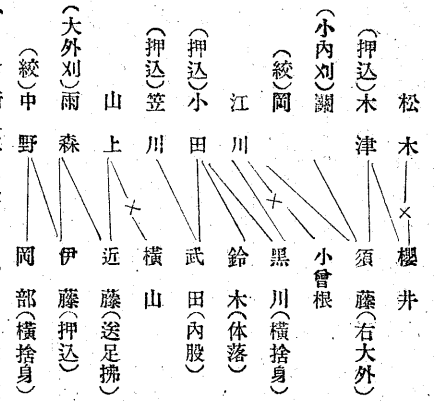
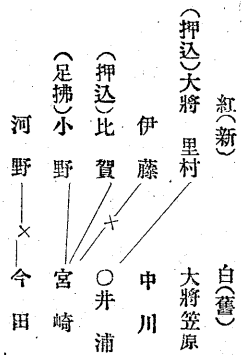
(四高)	本橋山田木山谷内井	得点10	安打9	打數31	打球11	三振7
(四高)	山古横新鈴村磯山三樹	得点2	安打2	打數3	打球2	三振1
(藥專)	P. C. I. B. H. B. H. S. S. L. F. C. F. R. F.	得点2	安打3	打數26	打球10	三振11
(藥專)	館渡淺高伊楠佐小中	得点2	安打3	打數26	打球10	三振11
(四高)	本橋山田木山谷内井	得点2	安打2	打數3	打球2	三振1
(四高)	山古横新鈴村磯山樹	得点2	安打2	打數3	打球2	三振1
(藥專)	P. C. I. B. H. B. H. S. S. L. F. C. F. R. F.	得点0	安打3	打數30	打球1	三振6
(富中)	池赤中永泉内宮志窪	得点0	安打3	打數30	打球1	三振6

十一月十八日愈々何時温い日光に浴し得るとも期し難い陰惨な北國特有の天候が始まつた。次の日には寒さへも見るに至つた今迄練習を爲續けて来た明るいグラウンドから暗い静勝館に引移らねばならぬ様になつた然し勝たんが爲に戦ふなら飽迄練習する、徹底する迄練習する。只々一度手にした、あの優勝旗を再び握らんが爲に。(日生)

柔道部

九月十八日(金)午後三時より新入生歓迎試合を舉行す。

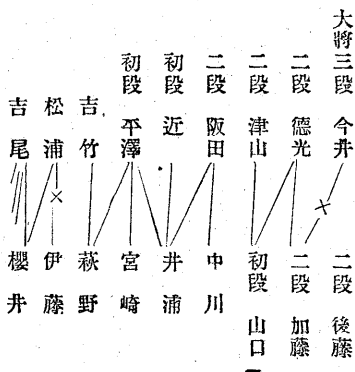
審判 加藤二段 後藤二段 江川四段



かくして新入生は負けた。かくして舊生徒は易々として勝を得た。今夏卒業生諸兄を送つた時、部の寂寞を感ずると共に、九月新進の猛者の入學を祈つたことも束の間、天がわれらに與へたものは、他に頼らずして自を頼まして而して勝つべしとの教訓であつた。

吾人は努力しなければならぬ。五度勝利の榮冠を戴いた吾部は到底まげられない運命の下にあるんだ。洛陽の地の凱歌は今日からの努力の贈物でなければならぬ。勝負後桂月に於て茶話會を開く。席上自個紹介に始り江川先生の勝負に關する注意、大

將の部の紹介南下の話で、新入生諸君に所謂流れスピリットの鼓吹に努む。十月一日 月は改つた、吾部はいよいよ歩武を整いて南下練習を開始す。選手候補者を宮地二階に集めて決心をきく。十月七日 東京帝大より先輩中内二段藤々來澤稽古を附けらる。十六日同じく先輩阪田二段來澤盛んに稽古を附けらる。場内活氣横溢し各選手の面異常の喜に緊張す。十月十九日(日) 徳光二段福波中學生五名を連れて御來場せられるに當り、今井三段、津山二段、金澤師範生三名の御來場せられたるを期し、計らずも對外勝負を行ふ。

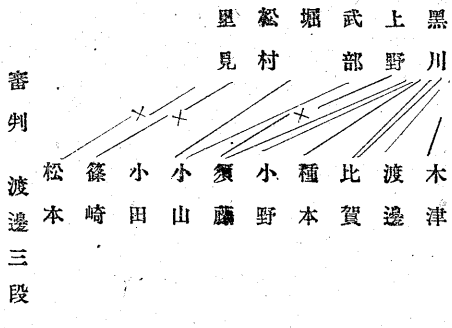


遠足部

遠足部は來年度からは旅行部と改稱する。今年度から、改稱する筈であつただけでも、手續が少しくおくれた爲に公にならなかつた、色々な形式を履まなければならぬ改稱だけでも出来ない制度が箇瘁い。形式や手續を、無暗に嚴重に云はれると、吾々はそんな制度から逃げ出したく思ふ。吾々は遠足部といふ名を嫌ふ。それは餘りに小規模である上に、遊戲的であるやうに吾部の耳に響くからである。小さい遠足や散歩だけが、吾々の能事であるならば、自分は委員を止めるであらう。そして名のやうに消極的のものであるならば、部としての存続の必要がない。自ら廢止の提議をする。然し永い歴史を有する遠足部は、多くの大きな仕事をして來てゐる。遠足部といふ名前に適當しない程大きな仕事をして來てゐる。だから、つと早く何とか改稱してゆなければならぬのだ。

自分は大正七年の夏、日本アルプスを横斷して、立山から白馬に行かうとする時、針木

十一月十八日 此日は我北辰會柔道部に於て最も記念すべき日だ。江川師範五段に列せらる。先輩阿田、伊藤、中内の諸兄段に列せらる。十一月十一日 此日は我北辰會柔道部に於て最も記念すべき日だ。十一月六日 藤井二段東京より來澤稽古をつけ下さる。



先輩近氏二段に列せらる。先輩寺尾宮田兩兄初段に列せらる。而して 現部員にしてこの光榮の日に初段に列せられし者を、井浦、中川、笠原の三君とす。かくして我部は名に於て既に美はした。だが實の之れに伴はんことを熱望してやまず。十一月二十五日 早稻田大學柔道部員師範宮川一貫氏以下三段十名來場せられ本校生徒との間に練習をなす。かくの如くして、吾等は瞬時も怠ることなく火の出る様な練習を重ね、近く三船六段を招いて更に其の堅を加へんと努力してゐる。日は流れ月ほとぶ。吾部は旗鼓堂々六度南下遠征の途に上る時となつた。尊隆高く赫灼たる華の高塔に寸尺の高きを誇すは實に我等の使命にして、且つ責務だ。技倆未熟の嘆はあるが、猛烈火を吐くが如き練習は苟に期する處のものがある。

光榮と權威の徵象たる優勝旗をふりがざして、鐵蹄高く洛陽の地を襲はんとするに際し吾等の胸中易水塘畔に於ける荆軻の悲壯なる覺悟がある。それではこれから洛陽の地に行つて戦つてくる。大正七十一・二十四(小)

峠の絶頂に立つた。数千百尺の谷底に續く雪溪の上に立つて、蜿蜒と連る波濤のやうな大山脈を見渡した時、自分はさう振舞つたらいいのだからなかつた。八千四百尺の針木峠から見る大自然は、全く人類の存在を無視して、自由な雄大な動態を示してゐたのだ。自分はその反抗的に人間の存在を主張したくなつた。それで名刺の裏へ「四高遠足部登山隊三十四名通過。大正七年七月廿一日午後一時。」と書いて其の附近の石に貼りつけた。その時、遠足部といふ名が、つくづく嫌になつた。それは周囲の自然と極めて不釣合の名であつたからだ。

遠足部の改稱を希望するのは自分一人では無かつた。他の委員は勿論、部員全部の希望であつた。

吾々の部の事業の内には、命がけで極めて眞剣な態度でなければ遂行されぬ高山踏破がある。深谷の跋渉がある。そして夫れらが、吾々にまつては、精神的に或る救とも比較し得べきものでさへあるのである。故に、遠足部を改めて山岳部とさへしたかつた。が今は山岳會を部の内に創設したから、旅行部とさうやういふことにはしたのである。

旅行といふこと、ある歡喜とある哀愁とを豫想し得る文學的背景を想像し得られる。そして實際旅行によりて、救はれ、又は啓蒙される事が吾々には多々ある。それに他の學校でも旅行部といふ名稱を採用してゐるし。

このやうにして、吾々は遠足部といふ名を廢して、旅行部とさうとしたのである。大は小をも兼ねるから、改稱したからと先輩を輕蔑し、歴史を蔑視した事にもなるまいと思つた。

然るに手續がおくれた爲に、今年度は改稱の議がフイになつてしまつた。形式が繁雜だから來年度にしてくれといふのである。何でもない單なる部の改稱の爲にさへ、そんな複雑な手續や形式が必要である制度の中に吾々は置かれてある爲に、こんな長々と書く事になつてしまつた。

遠足部は(來年度からは旅行部といふ)、大正八年度から方針を變へた。それは部内の山岳會を成長せしめる爲に、外延を縮めて内包を豊かにする必要が生じたからだ。ランニングの事務などは先づ第一に吾々の部から追ひ出すべきものだ。幸に陸上競技部が出来るか

ら、遠足部内で繼子扱にされたランニングも、のびのびと成長するだらう。安心して長い間いぢけてゐた子供を追ひ出す事が出来る。

大正二年以來續行されて來た土曜會の事業は、今度の學制改革で、又部の改稱で廢止すべきものとなつた。それは新制度では土曜でも午後授業があるので、土曜は今後遠く出かける事が出来ないわけになつたから。山岳會の事業が擴張して行くにつれ、外部との交渉が従来よりも繁くなつて來た。

大正九年の春季旅行班は、隨分班の數が増加するらしい。まだ確定しないけども、何れ二月中には確定して發表する。

九月新學期に入つてからの事業は左の如くである。四高山丘會の事業は無論部の事業の一部だ。(廣瀨)

第一回 戸室山へ

九月廿一日(日曜日)午前九時出發。一行四十一名。雨で大部惱まされた。

第二回 兜山へ

九月廿四日(祭日)午前八時出發。一行四十九名。よく晴れていゝ展望だつた。

第三回 野田山へ

九月廿八日(日曜日)午後一時出發。一行三十三名他に教官外二名。ホカホカ歩くにいい快晴の日。

第四回 醫王山へ

十月五日(日曜日)午前六時出發。一行九十一名。

「赤トンボが空高く飛び廻つてゐる。北國の空は抜けて了つたやうに限りもなく碧く遠い。アケビやブドウも熟して來ただらう。聽て醫王山葡萄酒が小さい盃に赤く注がれる時が來るのだ。」

醫王山は四高の山だ。是に登らない者は卒業證書が貰へない事になつてゐる。

突兀として聳える、鷹ヶ峰の下には、永久に碧い池があり、其の中には覽の那のやうな浮島がある。サンジャが瀧は物凄く落下して紅葉を振はしてゐる。

頂上に達すれば加賀、能登、越中は勿論の事、白山、立山を初め日本アルプスも遠望さ

れる。」

こんな揭示を出したが、其の日は曇つてゐた。アケビやブドウは、今年は去年より少し少なかつた。抑へつけるやうに曇つてゐたので却つて遠くの山々はよく見えた。

第五回 倉ヶ嶽

十月十二日(日曜日)快晴、八時出發、一行十二名。

氣持のいい天氣だつたが、此の日は新聞社のマラソン競走があつたり、校内に色々の仕合があつたりしたので、参加人員は前回と比較すると非常に少なかつた。

第六回 俱利伽羅山

十一月二日(日曜日)快晴、午前七時四十分金澤驛發。一行二十二名。

俱利伽羅の古戰場はいつ行つても面白い。神主さんに寶物を見せてもらつた。義仲の持つた鯛だといふ一丈もあるのを引き抜いて振り廻して見た。仲々重いものだつた。登波山の上で日本アルプスを遠望した。白馬や立山から槍、穂高まで見えた。薬師岳が一番大きく、笠岳が一番形がよかつた。源氏山の峰

では綱を張つてつぐみを捕つてゐた。

第七回 後谷

十一月八、九日(土曜、日曜)八日午後二時半出發、一行十七名。教官外三名。

後谷までは四時間かゝる。一年級に五限あるので止むを得ず二時半にしたが、その爲堂村で日が暮れた。提燈を借りやうとしたら、茅の松明を三本造つてくれた。田舎の秋の夜道を松明の光で歩くのは非常に面白かつた。

夜は雨。朝になつても怪しい天氣であつたので、豫定を變更して直ぐ鶴來へ出た。後谷峠の眺めはよかつた。

第八回 湯涌温泉

十一月十六日(日曜日)快晴一行十三名。ホカホカと暖かい日であつた。

第九回 晩秋の吉野八景

十一月廿三日(日曜日)快晴一行六名。七時四十何分といふ汽車にのり遅れて、九時過ぎの汽車で小松まで行つた。二三日間の荒しを忘れたやうに、うららかに晴れ渡つた

日であつたのに。小松から見た白山は、極めて雄大である。手取川の河口、美川橋の下から見た白山の景が、一番いゝといふ人もあるが、この小松の郊外から見る白山の全景は極めて雄大、壯麗なものである。白山を盟主にして右には越前境の山脈、左には飛騨、越中境の山脈が蜿蜒として連るその中心に立つて、丁度アンフィシアターのまん中から顧客を見上げるやうに、二千米級の山頭が白雪に覆はれた景観を眺める有様はすばらしいものであつた。

吾々が中峠を越えて長いトンネルを出た時、再び白山の靈峰に見ゆるを得た。別宮を過ぎ吉野の黄門橋の上で初めて晩秋の吉野八景に接した。白山の雪に潺湲たる平和の産聲をあげた牛首川と尾添川は、手取川となり廣い吉野の段丘を深く切り込んで、岩壁に激越して流れてゐた。天下無比の黒部の峽流には比較することは出来ないけれども、流石に石川縣第一の溪谷たるは恥づかしくない。更に一里上流の不老橋の俯瞰も仲々よかつた。

秋の暮れやすい日は、もう夕べに襲はれかけてゐた。吾々が急いで歸途についた時、吉野發電所の工事の爲めダイナマイトの爆音

は、靜かな秋の溪谷の空氣を振はしてドーンと轟いた。一つ、二つ、三つ……百一發の禮砲のやうに轟々と響き渡つた。吾々はカサカサ鳴る秋の落葉をふんで、鶴來へ急いだ。七時には汗を流しながら、やつま停車場へかけつけた。

寒氣の中を、輕鐵はのろくさ動いて、やつま金澤に近づいた時、市には火事の煙が上つた。町へは入るこ、半鐘の音にせき立てられて、あはて、吾々を走り越す多くの人があつた。

月曜から又荒れて水曜に晴れた時には、大門、奈良の連山が白くなつたのが市中から見ることが出来た。

第十回 未定 十一月廿日

第十一回 未定 十二月七日

四高山岳會

四高山岳會は旅行部(今の遠足部、來年度からの改稱)の附屬であつて、大正八年四月の創立である。其の綱領は次の通りである。

一、吾徒は現代趣味の傾向たる原始に還元する新氣運に協働し、山岳の研究をなす。  
一、吾徒は足が實行的方策として、日本山岳の踏破に努む。  
(注意)  
吾徒は綱領實現力のため同志の糾合を圖る。綱領に賛同する者は何人とも加入することを得。

山岳會大正八年第一學期の事業

一、登山隊

登山隊の本隊は日本アルプス踏破班で参加人員二十五名、日數十日。其の詳細の記事は二學期に廻し、茲に其の行程の概略を記す。  
△七月二十四日、午前八時松本驛發、有明下車。宮城を経て一五〇〇米の高地にある中房温泉に至り一泊。途中の岩石及び樹根の下に於ける洞穴には多くの光蘇があつて美光を放つ。雷雨に苦しむ。  
△七月二十五日、中房温泉發。燕岳(二七六三米)踏破。頂上まで三里餘。頂上から尾根傳て大天井岳(二九二二米)に至る。此途は屏風岩と云つて殆ど高低なく、途中蛙岩の奇岩がある。二俣小屋着。東天井岳(二八一一米)

外に 三点  
三、書籍類  
林教授 五册  
四高山圖書課 卅五册  
縣立圖書館 廿六册  
四高山岳會 十二册(他に地圖數十枚)  
四、寫眞類  
林教授 エーローストーン十枚  
同 深山幽谷 十五枚  
吉澤庄作氏 高山植物景觀八枚  
四高山岳會 北アルプス 八枚  
二高山岳會 寫眞集 二枚  
五、登山用具及準備品類  
Mr. Wacker カンツキ、靴  
四高山岳會 二十点  
四高地質學教室 八点  
西村教授 登山用品類 八点  
英藥局 登山用藥品 十点  
明治屋 登山食料品 數十点  
石川屋 同 同  
其他商店 登山用具

に上り、下つて小屋泊。

△七月二十六日、二俣小屋發。常念岳(二七五七米)をかけて槍澤小屋泊。常念で岩石崩落し一名負傷。松本へ返す。

△七月二十七日 槍澤發。大雪溪を登り盡し、日本マツタアホーンと稱せられる三一七九米の槍ヶ嶽に至る。此の頂を下り水勢急迅なる梓川の碧流に流れて、上高地温泉に至つて一泊。宮川池、田代湖、大正池。

△七月二十八日 豪雨の爲め、穂高岳、奥穂高岳(三〇〇〇米)の縦走中止。上高地滞在休業。

△七月二十九日 上高地温泉發。燒岳(二四四五米活火山)を極む。白骨温泉泊。雨の爲深夜着。疲労多。

△七月卅日 雨、白骨温泉滞在休業  
△七月三十一日、白骨發、乗鞍岳(三二二六米)を越え、飛騨平湯温泉着 解散

○支隊の活動

尙ほ會員中に各地に飛躍した其の項目だけを上げる。

- 一、劍、立山班  
一、御岳登山  
一、白峰山脈縦走

一、八ッ嶽登山

- 一、白山登山  
一、北海道の諸火山及盤梯山  
一、四國、石碓山登山等

二、第一回山岳展覽會

十月廿六日秋季陸上運動會當日山岳趣味宣傳と山岳研究の爲、第一回山岳展覽會を博物館に於いて開いた。

公開時間は午前十時から午後四時まで。観客二千五百名。満員の爲め、多數の參觀希望者を謝絶した。

最後に、中橋文部大臣及南次官を初め知事の參觀を得た。

第一回山岳展覽會出品目録の概要

一、標本類

市村教授。立山發見の新高山植物五種。高山植物十種、四高地質學教室。らいちやう顯微鏡三臺、四高地質學教室。礦物八点。其他、生徒其他ノ標本類

二、生品(高山植物)

- 四高地質學教室。 四点  
田中アルプス園 八点  
二高山岳會。 三点

三 第一回山岳講演會

十月卅一日 天長祝日午後一時から、至誠

堂で山岳展覽會と同じ目的で山岳講演會を開いた。會する者二百餘名。閉會は電氣がついてからだった。

閉會之辭

- 高島部長
- 澤田武太郎
- 高杉孝二郎
- 廣瀬壽雄
- 林 教授
- 市村教授
- 加藤縣視學
- 西村教授
- 松原博士
- 高島部長
- 高島部長
- 高島部長
- 閉會之辭

時間が足らなかつた爲め、高橋(純)教授と溝淵校長との講演が聞けなかつたのは残念だった。

一學期に於ける山岳會の事業は前記の通りだった。そして豫想以上の大成功をしたので嬉しかった。

が然しこの成功は吾々部員だけの力ではなく、市村先生初め多くの方々の援助による所が極めて多い。吾々は感謝する。七聯隊の中隊

長が兵卒をつれてテントを軍隊式に張つて下さつたので展覽會の時は体裁がよかつた。之も感謝する。

閉會之辭

- 高島部長
- 澤田武太郎
- 高杉孝二郎
- 廣瀬壽雄
- 林 教授
- 市村教授
- 加藤縣視學
- 西村教授
- 松原博士
- 高島部長
- 高島部長
- 高島部長
- 閉會之辭

陸上競技練習會

陸上競技部創設に就いて。

まだ正式に北辰會の獨立した部とはならないが、近い將來に於て完全な体系を備へた部として生れる事になつてゐる今の陸上競技練習會に就いて、部報と同じ資格を以て報告することの出来る現在の氣運を喜ぶ。

吾々は陸上競技部創設の必要を叫ぶ急先鋒である。獨創的な成長と發展を豫想して、此の四高陸上競技部は大きな氣運を捲き起しながら(競技界の先頭に立つて一代の趨勢を指導する權威を振ふる爲に、創造者に

のみ與へられる愉快な沈黙と、緊張した元氣の裡に、畫策縦横、凡てがドシ／＼運ばれてゐる。陸上競技部設立の希望は、今年初めて起つたのではなくして數年前に其の源を發してゐる。吾々には先輩の意志を繼いで又現在の氣運に乗り出して新しく生れ出やうとする組織の爲に懸命な努力を惜しまない。

閉會之辭

- 高島部長
- 澤田武太郎
- 高杉孝二郎
- 廣瀬壽雄
- 林 教授
- 市村教授
- 加藤縣視學
- 西村教授
- 松原博士
- 高島部長
- 高島部長
- 高島部長
- 閉會之辭

陸上競技練習會

陸上競技部創設に就いて。

まだ正式に北辰會の獨立した部とはならないが、近い將來に於て完全な体系を備へた部として生れる事になつてゐる今の陸上競技練習會に就いて、部報と同じ資格を以て報告することの出来る現在の氣運を喜ぶ。

吾々は陸上競技部創設の必要を叫ぶ急先鋒である。獨創的な成長と發展を豫想して、此の四高陸上競技部は大きな氣運を捲き起しながら(競技界の先頭に立つて一代の趨勢を指導する權威を振ふる爲に、創造者に

町を飛び廻つた方がいい。人が出て来るので面白いといふのなら、都會の十字路に立つて一日中馬鹿顔して人を見てゐたらいいのだ。吾々人間の要求する運動欲はそのやうなものでない。殊に吾々青年の有する運動欲、競争心はそんなものでない。運動會に観客などは一人も来なくともいいのだ。

陸上競技部は陸上運動會を支配し、根本的に改革すべき使命を持つてゐる。重苦しくおひかぶさる因襲の魔の手を、小氣味よく拂ひのけてその使命を果す爲に、躍り出て戦を戦はねばならぬ。獨創的な有機的な成長と發展となしなればならぬ。四高陸上競技部は、將來一世の先頭に立つて競技界の趨勢を指導すべき地位にまで至らねばならぬ任務を持つてゐる。

目下は費用もなく、コーチヤアもなし、生れ生ずる奮みに男らしく戦つてゐる。先づその組織はフギールドの部と長距離の部との二つから成り立つてゐる。フギールドの方は一部二年の木村太郎君と、二部二年の牛谷富美夫君とが専ら盡力し、長距離の方は一部三年の佐治孝徳君と二部三年の荻野市太郎君とが専門に努力してゐる。

來年度に於いては確實に部となる筈だ。自分、それぞれ委員となる人の力によつて立派に成長することを切望する。

一部三年廣瀬壽雄

△フギールドの練習

陸上競技部の前身としての陸上競技練習會は、ケラウランドの都合上、フギールド及び長距離の練習を行つてゐる。

今此の紙面を利用して、フギールド練習の經過を簡単に報告して置き度いと思ふ。

種目は、圓盤投、砲丸投、槍投、高飛、幅飛、竿飛、の六種で、現在の使用器具は、圓盤一個、槍二本、砲丸一個、甚だ貧弱ではあるが、追々完備せしむる考である。

本年十月二十九日練習を開始した。参加者數十名の多きに達し、案外同好者の多いのに、吾々も意を強うした。

其の後も、雨天を除き、毎日二十名近くが、熱心に練習して居る。一寸やつて見た處が、面白くて止められず毎日出て来るものが、非常に多いのである。誰でもやれば直ぐ出来る。引込み愚案は止めて、どしどし出場を望む。

少々位雪が降つても、フギールドの練習には大して差支へないから冬期も、出来る限り練習を繼續する決心である。炬燵などにしがみついて居るより運動すれば寒みも却つて凌ぎよい。雪中に鐵丸がうなりを爲して、飛ぶのも痛快ではないか。

そして、來春は是非とも小會を開催する計畫である。大いに練習して、優秀なるレコードを競はれん事を希望する。

運動の必要は今更喋々を要しない事である。就中陸上競技類は單獨にて爲す事を得、服等準備も至極簡單で、極く手軽に、何人にも行はれ易い。又他競技の如く、過激に陥る弊が少い。吾々が學業の餘暇に行ふには最も適當なるものであると確信し、北辰會々員諸君に切に御勧めする。

今や陸上競技類は、逐年流行し來るの形勢にある。今日學生界は勿論、一般青年の間にも、陸上競技に對する嗜好は、非常なる勢を示しつつある。此の時に當つて、獨り吾が北辰會に陸上競技部の設置なきは寧ろ吾々の不幸、本年度の豫算呈出期までに、具體的の



立案を得ず、爲に財政上に於いて、一頓挫を來し、加之既設の各部共部成立前に、之が準備の運動を爲して、充分將來永續の保證を與へたる等の前例に依るも、その成立の機運未だ全く熟するに至らず感みを吞みて、來年度を待つこととなつた。然るに學校當局も充分吾が部存在の意義を認め、且つその必要を感じ、之が獎勵的態度に出でつゝ、あるの有様であるから、此上は唯、同好者及び廣く、北辰會會員諸君の贊助を得、熱心なる練習と並びに之が趣味の普及に努力し將來繼續、否益々發展すべき保證を確實ならしめ、夫れに依りて、來年度は是非共、陸上競技部の成立を期し度いものと思ふのである。吾々は北辰會々員中必ず多數の同好者あることを信じ、夫ら同好者諸君の熱心なる應援を、切實に希望する次第である。

吾が北辰會陸上運動部が、北陸運動會の牛耳を取り、大いに吾が國陸上運動界に、雄飛する日の近きを信じつゝ、この稿を了る。尙大なる抱負と計畫を有するけれども他の機會を、利用して、追て發表することにす。

(文科二年木村太郎)

△長距離の練習

昔橄欖の綠蕪るオリソックの野に、鐵脚宙を飛び土を蹴つて、大空に翱翔する卑の如く、荒野に奔馳する狂駟の如く、互に技を練り術を競ふたグリシャの勇士の面影は髣髴として、吾人の眼前にあるではないか。或は三伏の候、灼熱した太陽の下に、或は嚴寒の候凜烈なる朔風の下に、最も勇ましく自由の天地に活躍して、剛健の氣象を養ひ、堅忍不拔の精神を鍊り得るものは、我ランニングである。田前に動く黄金の波の間に、或は芳架の櫻花の中に、玉なす汗を鉢巻に支へ、白衣のユニホームも軽く、地上に生存する萬象を脚下に蹂躪するが如くに飛ぶ快き。之れランナーにして始めて味ひ得る自然の享樂である。現時のランニングの隆盛は滔々として、その際限る所を知らぬ。長距離、短距離、中距離共にそのレコードは年と共に進歩を示してゐる。中學校のランニングですら好レコードを作つてゐる。然るに蹴つて、我四高のランニングの形勢はさうであらう。之を筆にするも恥かしい程ブーアなものである。殊に長距離に於ては北陸の權威たるべき我校は中等

學校と比較してこれが弱を唱へるに足るレコードを作つた者を出してゐない。之れ一には我校にランニングとして獨立した部がない爲に、校内に於て各部の競争が激しく爲に各部の好ランナーが、一致協力してランニングの進歩發達に盡すことが出来ない爲でもある。此處に於て來年は是非ランニング部を獨立したものととしてオリソックの各種ゲームと聯合した陸上競技部を作らんが爲、本年よりその下準備として、陸上競技練習會なるものが組織された。ランニング練習部の事業として十一月五日より毎週二回(水、土)金澤近郊に二里乃至三里の行程で、長距離の練習を行ふことにした。

十一月五日(水)午後三時本校發金石電車停留場に至る往復三里半此日は天候もよく温かであつたため出場者十人もあり中々盛大に行はれた。然し途中驟雨に逢つて歸途には道路泥濘の爲に困難を感じた。  
十一月八日(土)本日の行程は五日に同じ。此日は天候悪しく、寒冷を覺えた爲め出席少し。(六人)  
十一月十二日(水)曇 校門より片町を通り蛤坂を登り寺町を突切つて師團のはづれ迄

行き坂を下りて、それから岸川に沿つて下る

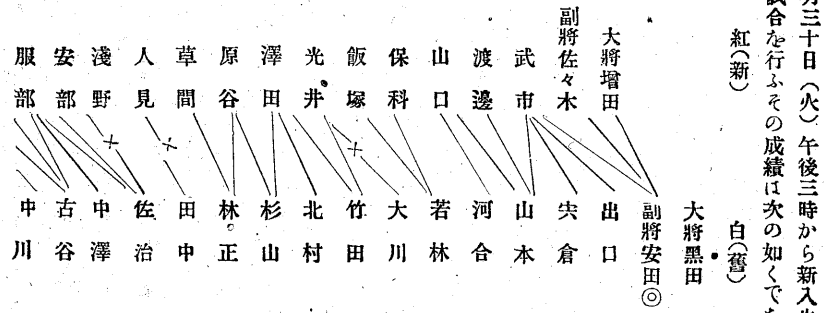
豫定であつた(往復約二里足らず)が途中又もや雨に逢ひ兵器支廠倉庫の横より折れて、河俣ひに歸る。本日も天候及び通知の行届かなかつた爲め僅か五人しか出席者のなかつたのは残念であつた。本年は最早冬季に入り北國殊有の陰氣な雪や雨のみのシーズンに入つたからこれで暫くは、練習は出来まいが氣候と天候の加減を見てやるつもりである。乾坤一轉陽氣來復と共に新活動に移り大に飛躍して好レコードを作りたいものである。本練習會は新進氣鋭の新入生の多數出席せられんことを切望する。中距離、短距離の練習と來春は是非行ひたい希望である。

(一部三年甲佐治孝徳)

劍道部

去る六月に五人の選手を送り出した我部は九月九日から新學期の練習を始めた。本年度は一年生の中になりに多くの選手を見出し得た。一同は和衷協同熱心に練習してゐる。私は唯これだけを言つて沈黙しよう。——將來

の喜びのために。  
九月三十日(火)午後三時から新入生歓迎紅白試合を行ふその成績は次の如くである。



かくて不戦者一人を残して舊生側の勝利となる。  
本學期は毎日午後三時から稽古をしてゐる。但土曜日は午後二時から、日曜その他休日は午前九時から稽古を始めてゐる。私達は有志の方が道場へ出て應援して下さることを希望してゐる。次に夏の劍道大會の報告を載せておかう。(守吉生)

第四回劍道大會記事

七年度の大會に参加した學校は十二校その組合は次の如くである。

- 第一日(大正八年七月廿九日)
- 一 長岡中 — 七尾中◎
  - 二 ◎高岡中 — 工業
  - 三 石川師 — 礪波中◎
  - 四 ◎二中 — 商業
  - 五 ◎一中 — 富山中
  - 六 富山師 — 小松中◎
- 第二日(七月三十日)
- 一 石川師 — 富山師◎

- 二〇高岡中——長岡中
- 三〇七尾中——礪波中
- 四〇一中——二中
- 五〇小松中——商業
- 六 工業——富山中

午後四時優勝戦の抽籤を行ふ左の如く決定する。

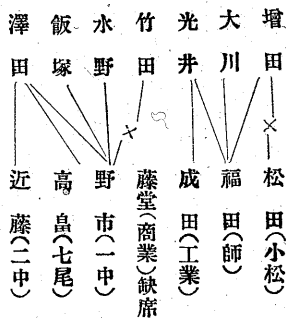
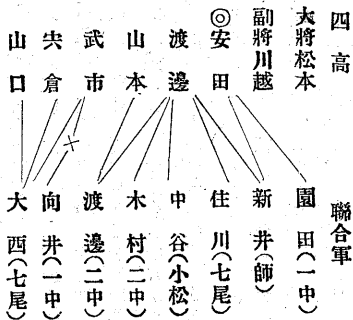
□第三日(三十一日)優勝戦

- 一〇七尾中——高岡中
- 二〇一中——小松

最優勝戦

一 中——七尾

武徳會石川縣支部主催劍道大會の番組は次の通りである。



通信

東京帝大四高文科會より。

(この六月まで、四高の雑誌部の委員として、わたし達をいろいろと指導して下さいました。東京帝大文學部の南兄から、二日の朝わたしのさころへお便りがありました。それはわたしたち、文學部へゆきたいと思ふものにさつて、この上もない有益なお便りでした。文學部へゆかうといふ方々のために、この雑誌をかりて、こゝに、殆、その全文を掲げておきます。

(一一、五、各務)

雑誌部の諸兄も、相變らず御健在、御奮闘の事さながら喜んであります。今年に經費も増加した由、結構なことと思つてあります。

別紙通信として、つまらぬ事を書きました。が、雑誌にのせて頂くことを豫期してるといふのでもありません。少數の文科志望者の爲に雑誌の幾分を費すことが苦痛かもしれませ

んから。浦井さんの許へ送れば、先輩の通信として雑誌へ出して呉れた先例があるといふ野口君の話で、さうしたらよからうといつてゐましたが、さういふことも敢てしません。もし雑誌へのせるさいふやうなことになるれば辭句の取捨は御隨意にしてくれて差支へはありません。そのまゝのせられると却つて迷惑なほどの出タラメですから。掲載のことは別として浦井さんなり誰へなり見せることも御隨意です。こに角、四高文科會の集りの決議によつてした仕事ですから、それ丈の扱ひをして、後學の諸君の益するやうな方法を講じて頂ければ幸甚に存じます。

金澤も寒や霞の季節になりましたね。東京も寒いことは、随分寒くなりました。文科は文科らしく、みんな、案外ソソリとしてゐますが、内的には苦しんでゐます。本當に高等學校を享受したまへ。文科といふと殊に苦しまねばならないから。(後略)

十一月廿九日夜 南 幸夫

文科大學では、制度が變りましたから、御知らせします。詳しいことは規則書を見るのが一番ですが、簡単に、規則書を見てもよく

了解出来難いところを書いておきます。

學期は九月から一月までを秋學期、二月から七月十日までを春學期といつて一學年二學期といふことになりました。休暇は、どういふ方になるのか、よく分りませんが、一月は十日から六月は二十日から試験があります。

學科はすべて選擇の制度です。一週四時間宛で一學期間續く講義を一單位とします。一週二時間で秋春二期に渡る講義は半單位といふ勘定になります。(半單位といふ言葉は用ひられませんが)それで、こに角一學期に三單位以上ノ授業科目ヲ學修スヘシニ規定されてゐます。ですから一週十二時間以上出ればいゝことになりませんが、外に一週四時間の學科があります。しかし之は至つてラクなものであります。専攻學科によつて違ひますが、三年間に十八單位以上と語學を修了したら卒業させて呉れます。十八單位は二年間に立派にこなしますが、しかし二ヶ年では卒業はさせて呉れません。(十八單位修了の外に勿論卒業試験を論文と口述まで受けねばなりません)

十八單位のうち先攻學科に屬する科目は半數位修了すればいゝことになつてゐます。他の半分は、何でも自分の好きなものを聽いて試験に通ればいゝといふことになります。英文科の例をとりますと十八の内九つを英文學に關する科目を修了すればいゝのです。が、また別に規定があつて、英文學の一般修養ヲ得ントスル者は十八の内五つといふことになつてゐます。これはよく分りませんが、全体として十八以上を修了して、その内五單位の英文學科目を修了してゐれば英文學先攻といはれないで、漫然と文學科を卒業したといふことになるのでせうと思つてゐます。もし英文科に入つて、それにあきたらないとしますと、一般修養を得た、漫然たる文學科卒業とすればいゝといふ方法が講じられます。その代り、英語の先生にでもならうといふ時は都合がよくありますまいと考へます。

詳しいこと、これ以上のことは規則書を見れば、よく分ります。規則書で了解の出來ないのはこれ位であらうと思ひます。

四高文科會といふのがありまして、先輩と學生との連絡がとれてゐますが、その席上での話から私にお鉢が廻つて、かう通信を書くことになつたのですが、高等學校にゐる頃には勉強の癖をつけておくと同時に出来る丈

の享樂をしておかれれば駄目だと思ひます。

大學はある意味に於てノンキです、英語や獨逸語ではやはりアテられるといふことがありますが、高等學校ほどもありません、それだから高等學校の倍も遊べるかといふと半分も遊べません。時間から云へば高等學校時代よりも、餘裕がありませうが、気分が落ちてしまつて、愉快といふことが半分も四分の一も得られない氣がします。文科の人でもさういひます。文科では特にさうならざるを得ません。何處からか、始終強ひられてゐるやうな氣で勉強しなければならぬやうな氣で、そんな責任が感じられます。ですから高等學校時代に勉強の癖がついてゐないと駄目です、文科の新制度では一年二年といふ區別がなくなりましたから、教授が得々としてやつてゐる講義が、小供のやうな坊主頭にも、きれいな藝術家らしい頭にも、禿げた頭にも平等に、その上に落ちて來るのですから、そんな處の刺激からも、ホンヤリしてゐられなくなりす。(大きな聲では云へませんが、四高の先輩にもかなり有望に禿げつゝある人も三人はゐますよ。)それよりも更に、内的に智識慾が猛烈に起つて來ます、自己の充實さ

ふ責任感がヒドク私たちを追ひ立てます。野口君(大正六年四高出、教育學三年)の話ですと、四高文科の先輩(それはいささかクスクツ太いが)からの通信として、所謂三四郎のエピソードでも書いたらしいのでせうといつてゐましたが、生憎、それも今はもち合せがありませんし、學校生活といふことになると君等の方で御免蒙りたいでせうし、私たちが厚かましく書いてみる丈の材料もありません。

金澤はいゝ處です。私たちは今になつて話してみると誰もかも、みんないゝ印象をもつて來てゐます。何故もつゝ高等學校生活を享樂しなかつたかと思はれても、誰一人として金澤を去つたことを祝福する者はありません。極端なことを云へば、高等學校では勉強する習慣さへ造つておけば、後は全部を享樂の爲に費していいだらうと思ふ程です。今の私たちの享樂の淡い印象は何といふ惨めさでせう。理智が邪覺してゐるではありません。うらほひのないミリエーに私たちの胸のうるほひが吸ひとられてゆくのかも知れません。心が乾いて來たのでせう。若い血の彈力と反撥

力との減退かもしれませぬ。若々しい感激が少くなつてゆく人間が無能になりさうです。落つて來たといへば、さうかもしれませぬが、責任感が苛責のやうに迫つて來るのは悲惨です。眞の高等學校生活の享樂に貴い意義を認めたく思ひます。

四高文科會はかなり優勢です。文科大學の建物内では随分四高出をみす。

文科へ來る方は、規則書と相談する上に、方針などを定める上では、學校の先生方によく相談してみられることが必要です。變つたといつても、私の書いた位の變化で、それ以上の上のことは、先生方の頃も同じことでした。さうして先生方は私たちの知らない、いろいろな事を御存じです。

### 編輯餘言

#### 初雪の夜に

うた川

□雪が一定の音調をつづけて降つてゐます。涯しなく斜めに立つた竹すだれの上を、浅い水が限りなくすべり落ちるかのやうに、スラスラスラといふ音が絶えず耳へびやいてきます。

□雪の來ない中にだしたいと思つて、かなり急いだのですが、印刷屋の破約やなにかで矢張こんな後れてしまひました。拾九日頃になると思ひます。

□今度では、各務君がいちばん骨を折つて呉れました。繪の事では、北村君が奔走して呉れました。

今度は、一体に原稿が集らなかつたといふことです。私もさう思ひました。集つた數と内容とを見て、慌てて、委員達が穴埋めのために書きはじめました。時日が切迫してゐたので困りました。それで、氣が咎めてなりませんが私は、學校の作文の答案として出したことのある「菅沼先生」を焼き直してしま

すした。だから、それだけのものしかないこととは知つて居ります。みんなが、もつと書いて呉れていいと思ひます。委員達に苦しい算段をさせないために。

□都合で發表できなかったものの中の數篇に就いて、一言申させていたゞきます。「無烟炭」は、すつきりとした、なんさなく食後の果物さういふやうな感じがしました。面白いところを擷んでゐると思ひました。私だけの感じでは、「宇宙の發展に就いて」は、考證さういふ点で、本當に、誠實であるといふのが輿論でした。私もさう思ひました。けれど、もつとあの中に獨創的なものが欲しいと思ひました。「けいさうの葉」は、かなり長いものでしたが、中身が淋しい氣がしました。「我宗教と藝術と聖書」は、随分改まつた心持で拜讀しましたが、混濁としてゐてよく解りませんでした。私達だけでせうか?

□「或る日の久米仙人」が、ちよつとでも、ある教授に、物議を醸す言はれたといふことには驚きました。學校の檢閲は、(この頃は、こんな言葉で言ひ表すに適當な程)嚴重になつてきました。あんまり窮屈にするさ、痺れがきれるか、いぢけるかどつちかです。

どつちにしても、決して嬉しくありません。子供は足を投げたし度がるものです。

□今號が充實してゐるかどうか、それは讀者めいめいの御批判に委せまします。作の價値は、人々との相談づくでは決りませぬ。讀む人その人だけの胸と頭とで決ります。と言つて、しかし、讀む人すべてが、その作の眞價を知り得るやば、その人の侍醫も存じませぬ。その人の狭い低い趣味性も存じませぬ。妄言多謝。

一八、二二、一〇夜

#### 私のを讀んで下さる方に

高坂

書きつてから讀み反して見ると、自分の論文ながら愛想がつかまる。不統一不明瞭、尙わるい事には、知りもしない自然科学の方にまで手を出した事などが如何にも心苦ししい。しかし發表する以上は出來るだけ理解して戴きたい。凡らく間違だらけではあらうが——と思つて、あれを書いた時の氣分をここに書きしめてもらひます。

ニイチエは誰も知る様に自分の哲學を体系にまとめたかつた、すべてはフチリスメンの形式をさつてゐる、おまけに所謂矛盾とも言

はるべき点が多い。従つて彼の本意は何にか明白には言はれない。彼に對する評價の區々なのでもそれは解かる。従つて彼を讀むには、自分が一つの体系を立てて、彼を解釋せればなるまい。私は權力意志を以つて彼の説の基礎であるとし、それによつて、彼の「超人」に關する考察を共に因果説、表象の成立を考へて見た。その順序は、

1 力學の法則は自然科学、精神科學の兩界に妥當であるとして、表象の成立を考へて見た。勿論不完全な考ではあるが、所謂統覺作用に於いて、我と云ふ特別な考を除去すれば、あつた方向に進まねばならぬのではなからうかと思つてゐます。自然界、精神界の區別は直接経験を屬せしむるカテゴリーの種類によつてなるものと説が正しいとすれば、兩者は別々の法則に従ふのかも知れない。

私はただニイチエが物質についてなした考察を模擬したに過ぎない。其の當否は私なその權限外である。

2 因果律は英國經驗派の攻撃以來一種の規約としてのみ許される様になつた。IIIの自然の齊一の如きその最たるものであるがカントの The Category of Causality and Dependence (Cause and effect) も一種の規約と見得ると思ふ。しかし直接經驗の域に近づくにつれて私の示した強きものが弱きものを征伏するのが因果律になるに到る、即ち意識に於いては意識せらるるものと意識せられぬものとの關係が因果律になるのであるまいかと思ひます。

以上を序論として次に「我」の考察をした。意識の自意識は意識成立の根本要請である事、もし意志を根本とし、しかも意識の成立を可能ならしむるためには意志は何等かの意味に於いて有眼でなければなるまい。自意識が普通に我と名づけられてゐるが、あらゆるものが自意識を有するとせば、肉体に對した精神の意に於ける我は不可能になり、肉体と精神とを合した我を生ずる。それは一時的のものでなく繼續的のものである、過去の推進である。従つて一定の傾向を帯びる、それが箇性である。その獨自な事は自己自らに感ぜられるので、理解され得ぬものであらう。

私は彼の實踐的方面を殆んど釋かなかつた。彼を理論的に私が考へるのが目的だつたからである。ただ彼を利己主義者の様に考へる人

あるがカントの The Category of Causality and Dependence (Cause and effect) も一種の規約と見得ると思ふ。しかし直接經驗の域に近づくにつれて私の示した強きものが弱きものを征伏するのが因果律になるに到る、即ち意識に於いては意識せらるるものと意識せられぬものとの關係が因果律になるのであるまいかと思ひます。

以上を序論として次に「我」の考察をした。意識の自意識は意識成立の根本要請である事、もし意志を根本とし、しかも意識の成立を可能ならしむるためには意志は何等かの意味に於いて有眼でなければなるまい。自意識が普通に我と名づけられてゐるが、あらゆるものが自意識を有するとせば、肉体に對した精神の意に於ける我は不可能になり、肉体と精神とを合した我を生ずる。それは一時的のものでなく繼續的のものである、過去の推進である。従つて一定の傾向を帯びる、それが箇性である。その獨自な事は自己自らに感ぜられるので、理解され得ぬものであらう。

私は彼の實踐的方面を殆んど釋かなかつた。彼を理論的に私が考へるのが目的だつたからである。ただ彼を利己主義者の様に考へる人

益鋭く突らせながら、久しぶりで、今日、原稿用紙に親しむことが能きる。

□試験の最中に下刷なんかの校正に時をとられるのが疎ましかつたので、今度は、毎もふ心算であつた。ところが、印刷屋の方で初めの約束を守らなかつたために、駄目になつた。みんなが出揃ふ十九日の朝までにはどうにかしたいと思つてゐる。

□集つた原稿は、委員のもの五篇を除いて、總て二十六篇あつた。そのうち、一年の方の三篇ほどあつた。い、現象だと思ふ。それらの原稿の中から、今度は五篇だけ戴いた。残りの物で、い、物は、能きることなら次號で發表する。

□原稿を拜讀して、わたしたちの驚いたのは、ある二三篇を除けば、悉く、短い物ばかりだつたことだ。四十枚を越える物は一つもなかつた。しかも、その内容は、私達の豫期してゐたとは、全然、反對だつた。

に對しては、彼が「我は創造して、滅び行くものを愛す」と云ひ、彼の生活は正しくそのモットーを實現したものである事を述べた。人間の一生は織物を織る様なものであらう。材料は天から與へられてゐる、しかし、それを如何に織り得るかはやつて見なくてはなるまい。新しい織物を作らうとして自らを殺す人もあらう。しかしその失敗は何等かの意味に於いて偉大なもののために役立つのであるではあるまいか。目的もよく結果もよいのは一番ではあらうが、人間の眞の苦しきは、すべての善を爲し得ないためではなく、單に一つの善すら何し得ぬ所にあるのではあるまいか。一つの善のために自らを犠牲にし得る人は愛すべきである。創造して滅び行く人を愛するニイチエには、之だけの自己犠牲、自己否定があつた事を、彼を利己主義者なりと云ふ人に告げる事を許してもらひます。

私のお謀舌り

北 村

□繪は三枚にする積りだつた。しかし、いろんな都合で一枚にした。表紙にはピアズンを用ゐた。それからゴッガンを一枚挿んだ。

「生きる事のかれ」と「寂寥」があつたが、いづれも、物の見方が粗雑であるか、表言の形式が整つてゐないか、どちらかであつた。悪く言へば、未熟であるが、よく言へば、率直な心も知れない。純真な心もが見られないではない、その點はい、事だと思ふ。これは、たしか、私ひとりの感じではなかつた。小品には「小蛇と小犬と私との或日の交渉」といふのがあつた。小蛇も人間と同じやうに欠伸するのを見て、無感覺では居られなかつた作者の純なる氣分は、到る處に出た。が、何だか物足りないやうな氣がしないではなかつた。

□締切つて半月も過ぎた十一月の中旬には、私達は隨分周章した。その結果、委員の中から、高坂君の論説と、宇田川君と北村君の創作と、私の冗長な幻想が生れた。お互に自信のない作であるが、餘興として本號に出させて戴くことにした。たゞ安村君の長詩だけは、わたし達の考で、當分控へることにした。

□田中君の短歌は、八首だけいただいた。その選擇は、宇田川君と二人でやつた。選擇の標準を決めることは、色々の意味で隨分苦しかった。その苦しみの間に、兎に角、一つの

繪をさがすのについて、高橋楨二先生に御世話になつたのを、此處で御禮申しておきます。

□好ききらひは感情の問題で、良し悪しは感情問題でないと思ふ、好きだから良しといふことは、ある場合にはいいとして、藝術に於いては、よくない言ひ方だと思ふ。本當に光つたものなら、好ききらひに依つて判斷される以上のものだ。本當に光つたものを有つてゐる繪をみる時、特にさう感ずる。本當にすぐれたものには永遠の生命が波うつてゐる。それは、惱めるたまじひの救ひであり、心の内在美をみる眼を興へて呉れるものだ。ピアズンにしろ、ゴッガンにしろ一種の凄味をもつてゐる、そして、その凄味がみる人の心にピンと來る。確かに、夫れは、偉大なサムシンガだ。

雪解の日に

□絶間なく、淋しい物音が、融けてゆく雪の滴りから起つてゐる。その音に病的な神経を

かゞみ

益鋭く突らせながら、久しぶりで、今日、原稿用紙に親しむことが能きる。

□試験の最中に下刷なんかの校正に時をとられるのが疎ましかつたので、今度は、毎もふ心算であつた。ところが、印刷屋の方で初めの約束を守らなかつたために、駄目になつた。みんなが出揃ふ十九日の朝までにはどうにかしたいと思つてゐる。

□集つた原稿は、委員のもの五篇を除いて、總て二十六篇あつた。そのうち、一年の方の三篇ほどあつた。い、現象だと思ふ。それらの原稿の中から、今度は五篇だけ戴いた。残りの物で、い、物は、能きることなら次號で發表する。

□原稿を拜讀して、わたしたちの驚いたのは、ある二三篇を除けば、悉く、短い物ばかりだつたことだ。四十枚を越える物は一つもなかつた。しかも、その内容は、私達の豫期してゐたとは、全然、反對だつた。

科 目	區 分	豫算額	決算額	流用増額	流用減額	殘 額
第一款 經常收入		二九三,〇〇〇	二九四,〇〇〇	〇	〇	△ 一,〇〇〇
第一項 特別會員寄付		三四〇,〇〇〇	三四〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第二項 通常會員會費		二九三,〇〇〇	二九三,〇〇〇	〇	〇	△ 一,〇〇〇
第三項 入會金		二五,〇〇〇	二〇,〇〇〇	〇	〇	△ 五,〇〇〇
第四項 預金利息		四,〇〇〇	五,二〇〇	〇	〇	△ 一,二〇〇
第二款 用途指定寄付金		六〇,〇〇〇	六〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第一項 特別會員用途指定寄付金		六〇,〇〇〇	六〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第三款 會費増徴		七六,〇〇〇	七七,一〇〇	〇	〇	〇,一〇〇
收 入		三,〇七〇,〇〇〇	三,一三三,九三〇	〇	〇	△ 六三,九三〇
支 出		二,六四〇,〇〇〇	二,七六八,八四〇	一〇四,五一〇	六〇,九六〇	〇,六八〇
第一款 講演部費		六,〇〇〇	六,〇〇〇	〇	〇	〇
第二款 音樂部費		三,〇〇〇	二五,九六〇	〇	四,六九〇	〇,三〇〇
第三款 雜誌部費		四〇,〇〇〇	四九,八六〇	〇	〇	〇,八六〇
第四項 弓術部費		七,〇〇〇	九七,〇〇〇	〇	〇	〇,九〇〇
第五項 劍道部費		一九,〇〇〇	一九,八四〇	〇	〇	〇,八四〇
第六項 柔道部費		一三〇,〇〇〇	一三〇,〇〇〇	〇	〇	〇

大正七年度北辰會費收入支出決算書

(△印ハ朱)

標準を得て、潜越だと思ひながら、あれだけ戴いたのだつた。各詠題を省き、排列の躰裁を左右したことは、全く、私たちの或る都合からである。猶、二見君の短歌も、排列の躰裁をかへた。

「わたくしの」或る秋の夜の幻想(は、おかみから覗まれさうだつたので、自分の信念を十分書きあらはす事ができなかつたため、暫く未定稿にした。さうして、創作にも散文詩にもなり切つてゐないが、假りに散文詩といふことにした。私の藝術に對する近頃の信念(?)を、はつきり、見てくれない人のために、術學だとか何だとかといふ非難を受けることがなければ幸である。あの作の主人公の性癖と環境とは、決して私自身の夫ればかりではなく、中には、形だけを假りた、荒唐無稽な話が多い。一例を擧ぐれば、あの中のY子と主人公との経緯は、私の體驗した物ではない。あの作に出る神經衰弱の材料は、私の組の或る二人の人から獲た。

「六月發行の第八十五號の六號雜記で、部報のことに就いて、遠足部を攻撃した。ところが、それに對して、この十月十二日頃だつたと思ふ、廣瀬君からお叱言をいただいた。そのもさは、私があまり大きく出過ぎた事から起つたのだつた。亂暴な文字を使つたためだつた。それ以後に非常な手落ちだつた。そこで今日、ふたたび、この編輯餘言に筆をとるに當つて、遠足部にそのことをお詫言いたします。

「短歌會」と「俳句會」は、色々の都合があつて、一年間沈黙してゐた。そのうち、短歌會を、改めて私たちの手で開かうとして、十一月に希望者を募つてみたが、希望者が豫想外に少なかつたのと、雜誌の仕事で忙しかつたのとで、お流れにしてしまつた。新年には都ての用意を整へて、立派に、第一集會を催すつもりである。みんなが、遠慮なく、さしへ出てくださるやうに。それに次いで、俳句會も誕生させたく思ふ。先輩南兄から、この六日の朝、短歌會俳句會再興願はとく存申候」と激勵があつた。(一一・一二)

「豫定よりも、二十頁ほど超過した。この理合は、次號でしたいと思ふ。相かはらず雪のふる靜かな宵だ。(三・一七)

第七項	野 球 部 費	三,四七〇.〇〇	三,四七〇.〇〇	〇	〇	〇
第八項	庭 球 部 費	二六,〇〇〇.〇〇	二六,〇八五.〇〇	〇	四,九六〇.〇〇	〇.一七〇
第九項	遠 足 部 費	一〇,〇〇〇.〇〇	一〇,五九六.〇〇	〇	〇	〇.〇一〇
第十項	漕 艇 部 費	三,四〇〇.〇〇	三,二五〇.〇〇	七,八五〇.〇〇	〇	〇.〇三〇
第十一項	特 別 大 會 費	一,八〇〇.〇〇	一,四九一.〇〇	一,八九〇.〇〇	〇	〇
第十二項	春 季 運 動 會 費	一八,〇〇〇.〇〇	一五,七四三.〇〇	〇	三〇,〇〇〇.〇〇	〇
第十三項	秋 季 運 動 會 費	二,四〇〇.〇〇	二,五四一.〇〇	〇	一八,五五〇.〇〇	〇
第十四項	會 務 費	一,〇〇〇.〇〇	一,〇〇〇.〇〇	七,〇〇〇.〇〇	〇	〇
第二款	豫 備 費	一七,一〇〇.〇〇	〇	〇	五〇,〇〇〇.〇〇	一〇一,〇〇〇
第三款	端 艇 新 造 基 金	一三〇,〇〇〇.〇〇	一三〇,〇〇〇.〇〇	〇	〇	〇
第四款	野 球 庭 球 場 修 繕 積 立 金	三,〇〇〇.〇〇	三,五〇〇.〇〇	〇	〇	〇
第一項	野 球 場 修 繕 積 立 金	二,〇〇〇.〇〇	二,八〇〇.〇〇	〇	〇	〇
第二項	庭 球 場 修 繕 積 立 金	一,〇〇〇.〇〇	七,〇〇〇.〇〇	〇	〇	〇
第五款	用 途 指 定 費	六,〇〇〇.〇〇	八,六八〇.〇〇	三六,四八〇.〇〇	〇	〇
第一項	運 動 會 用 器 具 補 充 費	六,〇〇〇.〇〇	八,六八〇.〇〇	二六,四八〇.〇〇	〇	〇
支 出 合 計		三,〇七〇.〇〇	二,九六,三三〇.〇〇	一三〇,〇九〇.〇〇	一三〇,〇九〇.〇〇	一〇一,六六〇.〇〇

【ずら賣に市】

大正八年十二月十九日印刷納本  
大正八年十二月二十五日發行

石川縣金澤市早通町五十六番地  
編輯兼 吉 村 政 行  
發行所 石川縣金澤市穴水町二番丁廿九番地  
印刷者 生 沼 倍 男  
印刷所 明治印刷株式會社  
發行所 第四高等學校北辰會

四高等學校 北辰會雜誌 大正八年十二月十九日印刷 第八十六號